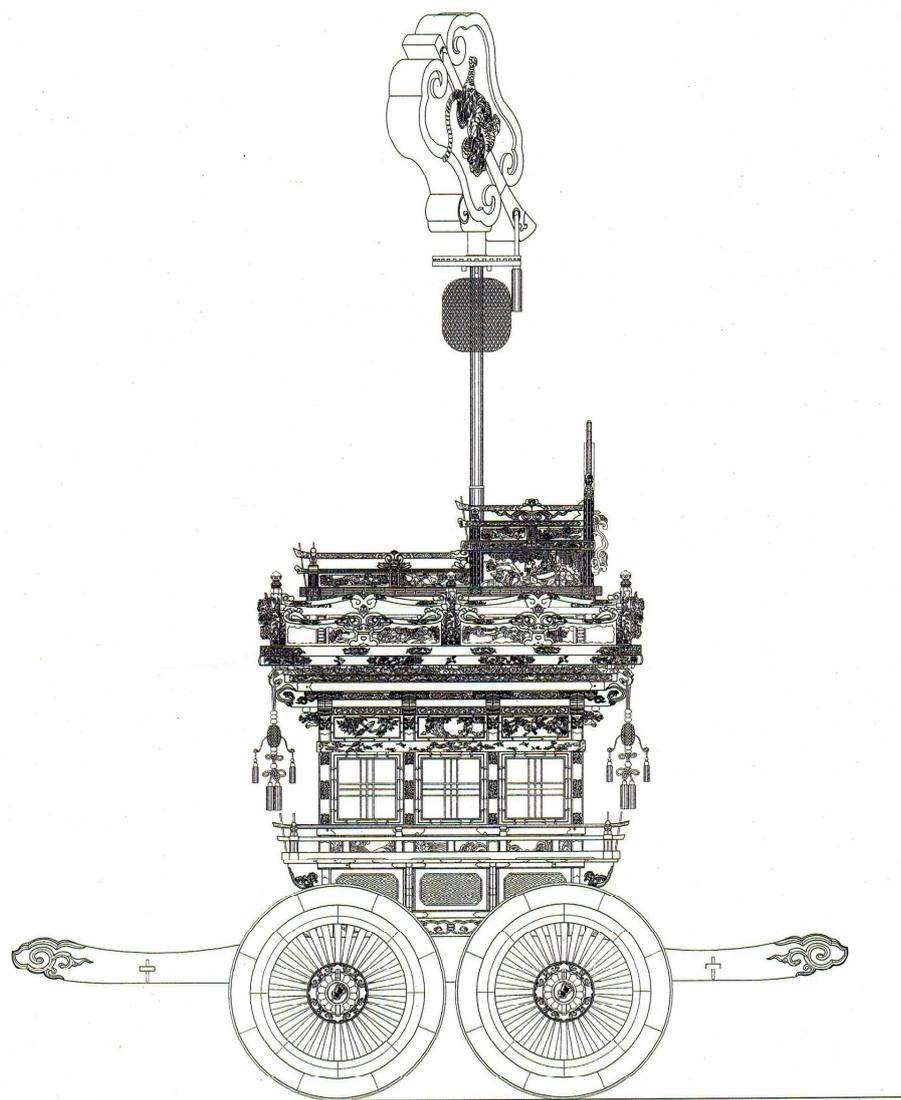


嘉和羅惠比寿

法土寺町曳山備忘録



右側面図

嘉和羅惠比寿(かわらえびす)
《曳山囃子：本囃子第1番》

2022年(令和4年)10月01日
企画・協力／法土寺町曳山委員会・法土寺町自治会
<https://www.houdoujimachi-imizu.jp/>
編集・作成／桧物和広/email: himokazu@nifty.com

二〇二一年(令和三年)三月十一日に、「放生津八幡宮祭の曳山・築山行事」が「国の重要無形民俗文化財」に指定される。



目 次

御挨拶	
01. 曳山のはじまり	p02
02. 法土寺町由緒	p03
03. 法土寺町曳山車に関わった職人	p04
(1) 法土寺町曳山制作図面	
(2) 高瀬一門	
(3) 塗り師等の職人	
(4) 提灯	
04. 軍配(標識)	p06
05. 何故「曳山」と呼ぶのか！	p08
(1) 曳くとは	
(2) 山でもないのに何故曳山と言うか！	
06. 曳山囃子	p09
(1) 受け継がれる曳山囃子	
(2) 法土寺町曳山囃子	
(3) 「曳山囃子と囃子方」 富山大学島添貴美子氏報告(参考文献)	
07. 曳山囃子曲目名の分析	p16
(1) 曳山囃子名の調査	
08. 放生津について	p24
(1) 放生津八幡宮	
(2) 放生津湊	
3) 放生津(放生会)・奈呉の由来	
09. 放生津に関わる古地名調査メモ	p29
10. 法土寺町曳山各部名称:彫刻・鍔金具	p37
11. 法土寺町曳山車輪修理	p47
12. 曳山作成に影響した漢籍	p48
13. 漆工芸/鍔金具の技法	p 50
14. 法土寺町曳山王様(曳山に関わる神達一覧)	p57
15. 法土寺町曳山の彫金と彫刻	p58
16. 裃纏・法被	p59
17. 法土寺町曳山年表①	p61
18. 曳山の由来	p63
19. 愛宕社	p 64
20. 曳山祭り事業への提言(今後の課題)	p68
21. 編集後記・参考文献	p 69

法土寺町曳山 「おらっちゃんのまつん」には「詩・物語」がある！

御挨拶

法土寺町の先人は、このような「曳山を何故作ったのか！」「曳山に何を求めていたのか！」昔の人々は、「超人間的な自然現象」つまり、地震・大津波・台風などに「神霊の姿」を創造したのではないだろうか。

いにしえの人々が畏怖し、神が宿ると考えたのは「恐怖」だけではなく、食べ物である「魚・米など」生活に必要な「海の幸・山の幸」全てに神様存在を認め、気の遠くなるような「自然崇拜」を確立してきたのであろう。

「奈呉の浦」の恵みや海の荒れや、塩害による米への被害など、人知を超えた神秘的聖地が求められ「放生津八幡宮」が霊場として出来てきたのではないかと、「曳山の成り立ちを独自に推察し開陳」するためにも細部にわたり調査してみたいと考えた。

花山や3,000個以上の提灯が川面に揺れて、各山町の曳山は、放生津八幡宮に向かっている。内川に映える祭りの火は、何故か心を躍らせる。どうして嬉しいのか、子供のころからの思いは変わらないが、きっと、楽しい思い出が積み重なっているせいではないだろうか。

いつもより、美味しいものが出てくる。「いい着物・履き物」が身につけられる。

祭りとは何であろう。これまで生きてこれた感謝であり、これからの祈りであろう。

正に「放生会」そのものである。先人達の生活は、家族のために、仕事に村の活動に精一杯の日々であったろうと推察できます。

祭りに神様を招待し、自然に感謝し畏怖し神道崇拜が自然崇拜が生まれてきたのであろう。

そんな時代の流れの中で「曳山」と出会い、自分達の「子供の成長・地域の発展を願い悪魔払いの象徴」として作り上げた物でしょう。その思いを「祭り形」にしたと想像出来ます。

法土寺町曳山

「ホーラスイター」(サー山を曳くぞー)と声が轟く。ゆっくりと花傘を揺らしながら、ギーギーと車輪がきしみながら、曳山が動き出す。「ハマ・ハマー」(北側)「田んぼ・田んぼ」(南側)「庄川・庄川」(西側)「立山・立山」(西側)と左右に振りながら前へと進む。

懐かしい人が「お祝いをくれた」若衆が「チェンチョコヤー」と声が飛ぶ。御礼の意味を込めて打ち鳴らす。

神社の前に来た、囃子方は、「お神楽」を静々と神様へ贈る。

曲がり角に来た、サー力を入れて「曳かんにゃー」曲がらんぞー！「ハーイヤサー・ハーイヤサー」と声がどんどん大きくなった。

車輪が道路を削りながら、「ガーガー・ガー」と曲がりきった。「戻せー戻せー」とハタキが動いた。



「ハーイヤサー」のかけ声は、「弥栄」(イヤサカエル)は皆さんの地域や家が「いよいよ。ますます栄えてほしい」と言う願いが込められています。

ハタキが動く、右や左を指示する道具でもあるが、昔は、電球ではなく、ロウソクであったため、揺れると提灯に火がついたことも、しばしばあったそう。ハタキで火を消す役目もあり、火のついた提灯を叩き落とすことも出来たと考えられる。

祭はその時だけの行事や祭事ではなく、過去・現在・未来と生活の節目として、感謝・御礼・連携・地域の伝統として守り育てていくものです。

「放生津」の意味は、生き物を放す(殺生禁断の地-奈呉乃浦)水辺(津)から来ております。つまり「生き物に感謝をする放生の心は、現代風に言えば「環境保護政策」と言えます。我々の先人の思いを「祭は伝えています」それら内容をしっかり伝えねばなりません。

ただ単に「勇ましい・絢爛豪華」では一元的です。

曳山にある「彫り物の意味・構造的な意味合い・曳山囃子の名前の由来など」取り上げることは多くあります。

今後共守り育み伝統を繋いでいくためにも、皆様の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

今回の調査に際し、無知な自分に「ホトホト…」嫌気が指し、それなりにまとめたつもりですが、地域・内容によっては、調査不足を強烈に感じております。これから時間の許す限り精進致しますので御容赦願いたく申し上げます。

1. 曳山のはじまり

(1) 京都山鉾巡行

京都八坂神社のお祭り祇園祭は、疫病退散を祈願した祇園御霊会(ごりょうえ)が始まりです。

平安京ではたびたび疫病が流行し、祟り(たたり)や疫病の恐怖に脅え、貞観5年(西暦863年)に平安京唯一の禁苑で、現在の二条から三条、東は大宮から浄福寺当りまで約39,000坪(現在の約20倍)の広大な庭園だった「神泉苑」(現在は東寺真言宗寺院)で読経、神楽・田楽や踊りなども行う行事を「御霊会」と言いました。

しかし、疫病の流行や天災は続き、貞観11年(西暦869年)に平安京の国の数66本の鉾を立て悪霊を集め祓い、インドの祇園精舎の疫病神「牛頭天王(ごずてんのう)」を祀り、祇園天神とも称された「祇園社」に神輿三基を送り、御霊を鎮めるために祀り、やがて平安末期には疫病神を鎮め退散させるために神輿渡御や神楽・田楽・花笠踊りや山鉾を出して市中を練り歩いて鎮祭するようになった神仏習合の御霊会が祇園御霊会です。

放生津曳山は、毎年10月1日の放生津八幡宮秋期大祭に13台が、山町を曳き廻します。

これの祖型は、まさしく「京都祇園社の鉾山」(863年)であり、その形式は、高岡御車山に多くの類似態が見られます。(新湊古新町曳山1650年)

祇園祭りの山鉾巡行

高岡の御車山は(1609年)、鳳輦(ほうれん)(※01)に鉾を立てた古格な様式をもち、これには、豊臣秀吉が「聚楽第に後陽成天皇と正親町上皇(おおぎまちてんのう)を、お迎えしたときに使用された御所車を、後の「前田利家」に与え、その子利家に渡り、高岡築城の折に、これを高岡町民に与えたとされています。これを基に改装し、今日の高岡御車となっていたのです。

祇園祭りの 神輿渡御



もちろん、先に記述しましたように、「京都の祇園祭の山鉾」が高岡の職人の目の衝撃的なものとして写ったに違いありません。

秀吉が天下統一(※02)をしたことにより、大阪城(1583年～1598年)や神社・仏閣を多く建設しました。

しかし「それぞれの専門職といわれる「職人」の数が足りず、秀吉は利家に高岡の職人を派遣するように依頼したと言われています。

高岡市の御車山1909年写真

高岡の職人たちは、地元にも「山鉾がほしい」と情熱的に利家や秀吉に懇願し「高岡の御車山が出来たと考えられます。

1609年これを見た放生津や城端などの人々は「自分達の地域にもほしい」となり、この高岡の御車山を模倣し作成したことから、大騒動なり、地区奉行所を巻き込んだ大事件となったのです。これらの大きな歴史的なうねりの中で、各地域で守り育ててきたことは誠に偉観でありましょう。

もともと放生津の曳山は、神輿の渡御(とぎょ)に供奉(くぶ)するもので、崇神(すじん)にあわせて、庶民の楽しみとして古くから民間に伝承されてきたものであります。



※01 鳳輦(ほうれん)は、「屋根に鳳凰の飾りのある天子の車」を意味する言葉で、

日本においては、古くから、天皇の正式な乗り物を意味するほか、現代では神社の祭りなどに使われる、鳳凰の飾りがある神輿を意味する。

※02 「本能寺の変」天正10年(1582年)6月2日、

1676年(延宝4年)の夏に、放生津八幡宮の祭礼に、曼荼羅寺から引き出した「法楽の引山」があったと記録が残されています。すでに江戸時代初期には、曳山が曳かれていたことになり、町方留帳(柴屋文書・野村屋旧記)などでは、1692年には奈呉町・中町の曳山出来。1716年頃からは、今の半数近いものが揃っていたのです。

2. 法土寺町由緒

町名は、もとの「法土寺村」放生津内川南辺の二の丸地区を含んだ地域で、久々湊・石丸・放生津の入会地字今堀に鎌倉時代末期に栄えた。当時の「時宗」の放生津道場「報土寺」に由来する。

中世期には、報土寺(のちの専念寺)・光正寺(石丸山)が領内にあり、放生津守護所(放生津城)も近かった。

「村名名附帳」(前田家文書)によれば、対岸の荒屋村と共に金屋村(牧野)の枝村とあり、正保4年(1647年)前田家古絵図には、村高34石が記入されている。享保年間(1716年～)山王社(日吉神社)と曼荼羅寺との間に「七間町」が出来る。

鎌倉時代末期に興った浄土教の一宗派の「時衆が時宗」に変化し、鎌倉仏教のひとつが起きる。開祖は一遍で、総本山は神奈川県藤沢市の清浄光寺(通称遊行寺)である。

「一遍上人」も真教上人も教団に所属している僧尼を「時衆」と呼んできました。

報土(浄土)は、報身仏の住する世界。阿弥陀仏の極楽浄土もその一で、仏語あり一切の煩惱(ぼんのう)やげがれを離れた、清浄な国土。仏の住む世界。特に、阿弥陀仏の住む極楽浄土。

浄土宗は法然によって開かれた仏教の一宗派であり、称名(しょうみょう)念仏(南無阿弥陀仏と口に称える)によって、阿弥陀仏の極楽浄土へ往生することを期す。

(1) 踊り念仏と一遍上人

一遍聖絵』によれば、1279年(安2年)には、一遍上人の一行が善光寺への遊行の際で長野県・佐久地方で踊り念仏を行なう姿が描かれています。そこに法衣に身を包んだ僧侶や武士たちが輪になり念仏を唱えながら踊る姿が描かれます。これが一遍上人の一行が踊り念仏を行なった最初とされます。中でも一遍上人を一躍有名にした「踊り念仏」がありました。

1721年(享保6年)7月30日放生津八幡宮の本殿が竣工され、竣工大祭が盛大に挙行された時に、未だ曳山7本であり法土寺町は出来てはいなかったと云われています。

それから50年後の1775年(安永4年)の頃には、法土寺町の曳山が参加したと云う記録がありますが、その3年後の1778年(安永7年)には、高岡側との『曳山騒動』があり法土寺町外6町の曳山が当時の魚津奉行所へ没収され、祭りは見れなくなったが、1801年(寛政13年)には復活したと云われております。

法土寺町の曳山車完成は、1785年(天明5年)とも言われ、その後文化・文政((1793年～1841年)時代の町民文化の隆盛は、曳山にも大きな影響を与えました。

その中で庶民芸術の粋を集めた曳山は、地方文化の向上と共に、今の曳山の様式に変えられ、各町はそれぞれ曳山の新調改造を行いました。

しかしながら、1810年(文化7年)12月23日の夜、俗に言う『法土寺焼け』の大火で、法土寺町は全焼し、山車も焼失しました(野村屋旧記)。町内では再建の願望が強く、文化8年(1825)によく建造した山車が、現在のものです。

本座の王様には中国の武将、「玄德・関羽・張飛」を祀り、高欄の内に安置され神の依代として、この街の守護神と崇拝信仰されています。

しかし、明治の末ごろ、山体を低く切り下げたことから『玄德』を降ろして、今は2体になっています。

この王様と随神は、木彫り胡粉研ぎ出しの彩色された、等身大の衣装人形で荘重の趣があり、中央の『カラクリ人形の猿』は山王神の使者・道案内として、観光客に親しまれています。

曳山車全体は、彫刻・金具・彩色・図案など、年月と共に優美にして意匠をこらし、美術工芸の粋を集めて郷土文化の風格と伝統を大切に守りながら、誇りを持って今日に引き継がれております。

宮大工は、塔堂の建築に渦を彫ることが必須の技術であり、そのことが粗彫り技術にも通じたと考えられます。言わば、虹梁(こうりょう)(※写真01)を彫る器用さが生かされたといえます。城郭・神社・仏閣に関わる中で職人達はいろんな技術を学び大きく育っていったのです。

1994年(平成6年)公民館完成



3. 法土寺町曳山車に関わった職人

放生津曳山 花笠

放生津曳山 夜提灯



立町通りの法土寺曳山1959年(昭和34年)

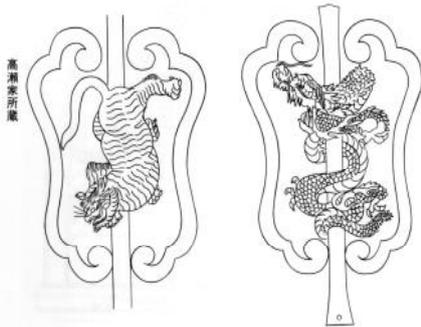
(1) 法土寺町曳山制作図面

宮大工の「高瀬一門」が設計、建造したものが多く見られます。

これに高岡の金工と漆芸・井波の彫刻・城端の漆芸などの技術を取り入れ制作されました。

高瀬竹次郎 制作原図

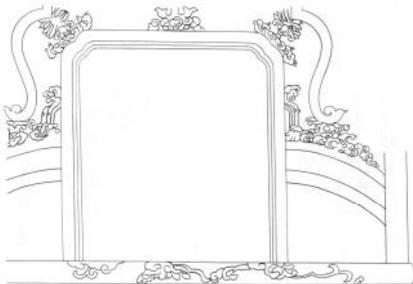
法土寺曳山標識の軍配の絵図



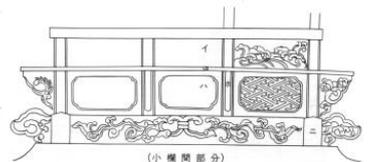
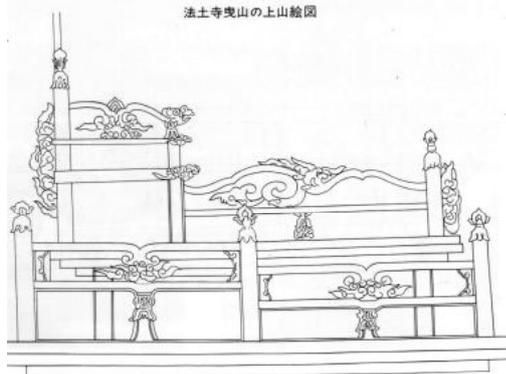
放生津曳山祭でにぎわう立町通り(昭和34年)

曳山の標識は『軍配団扇』で『竜・虎』の浮き彫り金箔仕上げであり、軍配は、いわば、『天下太平・四海安泰』祈る平和のシンボルであります。

法土寺曳山の鏡板絵図



法土寺曳山の上山絵図



(2) 高瀬一門

曳山を設計し、作成した中心人物は、高瀬竹次郎(加賀藩御用大工)であり、規矩術(きくじゅつ※説明02)にも長じ、彫刻や絵画にも精通していたと言われています。

虹梁(こうりょう)

写真01



※説明02規矩(きく)

1. コンパスとさしがねを活用し、寸法や形を造る。
2. 考えや行動の規準とするもの。手本・規則



関羽・張飛・踊りの猿公は、井波出来。

(3) 塗師等の職人

○辻丹甫(つじ たんぽ)は、高岡漆器の元祖といわれる人物です。明和年間(1764年から1771年)頃に京都で修業し、その後高岡に戻り、擬堆黒・擬堆朱、存星など唐風の漆器技法(いわゆる「丹甫塗」)を伝え高岡漆器の基礎を築き、1805年(文化2年)に84歳で没しました。

法土寺町曳山中山から上山部の彫刻は、「2代目 辻 丹甫」の作と言われ、「高瀬竹之助」も修復にあたと記録にあります。尚、法土寺町にも塗り師といわれる家が数軒ありました。このことは後述します。

鏡板には、中国殷周時代の「康鼎こうちゅう」なる者が【鐘鼎文】(しょうていぶん※説明02)を調査する様子を刻むとあり、油屋に左衛門(当時の宮源の家で山王町在中と記)の寄付と記録されています。



鐘鼎文

※説明02
鐘鼎文とは、中国古代、殷(いん)・周時代の鐘鼎の銘に書かれている古文のこと。



- 高岡 安川屋三右衛門(金具師)
- 高岡 板屋小左衛門(塗り師・丹甫一門)

現在の曳山車は、昭和12年に彫刻・金具を含む全体を塗り箔し、その後部分的な補修を重ね、2016年(平成28年)新湊市文化財現状変更承認申請書をもって、補助を受け『高欄・殊連・地覆』などの大修理を行っています。尚、2019年(令和元年)には、格納庫を建立し、現在の優雅にして華麗な姿を守っております。

※ 20.漆工芸/鍍金具の技法にて詳細を記載する。

(4)提灯

提灯は、7種類に分けられます。(1. 高張型提灯 2. 長型提灯 3. 丸型提灯 4. 卵型提灯 5. 切長型提灯 6. 小田原型提灯 7. カンス型提灯)とあります。

法土寺町の曳山に使われている提灯は、中山の4角から吊す、「大型の小田原提灯」と夜に高山に6段で点灯する「丸形提灯」があります。

何故に提灯6段なのか！とよく聞かれます。各山町が競って提灯の段数を増やしていく中で法土寺町は先人が創ったままの段数を維持しています。

正確な伝文はありませんが、「法土寺」(時宗念仏道場)という名前の由来や、曳山の神様の使いとしての「関羽・張飛」の由来から見ても、三国志時代の「儒教・仏教の意味合いからも、宗教的な意味から6段になっているものと想像されます。

(5)鏡板

法土寺町曳山の鏡板は、書を読む人物像です。殷の康鼎(こうちゅう)が「鐘鼎文(しょうていぶん)を説くの図」です。辻 丹甫(二代目)の作と伝えられています。

殷の康鼎が鐘鼎文を説くの図「鐘鼎文」。なお「鐘鼎文」とは、殷・周時代の鐘鼎(青銅器)の銘に書かれている古代中国の古文です。

しょうていぶん【鐘鼎文】は、鐘・鼎などの古銅器に刻んだ文字。金文である。

中華文化は、夏・殷・周の三代の王朝で確立され、その文化の主軸となったのが「礼」と「楽」です。孔子が常々周公の「制礼作楽」を文化確立のための、広い模範としていたことから、その重要性がうかがえます。

礼楽文化は、国家の重宝である銅器に体现されています。礼器の中では「鼎」が首位にあり、楽器では「鐘」が上位に位置付けられています。これは祭祀の陳列と演奏に、列鼎(れってい)と編鐘(へんしょう)が欠かせないものであったからです。

古代、「金」とは、黄金色に輝く銅のことも指していたため、銅器に鑄刻されている銘文は「金文」とも呼ばれています。また、銅の礼楽器は、「鐘と鼎」が中心となるため、「鐘鼎文」とも言います。銅器に鑄刻された銘文は、功績や徳行を述べて宗廟に示し、祖先の名を上げるとともに、子孫に代々伝えるものであり、史料・実録として確かなものであるだけでなく、漢字の発展史においても極めて貴重な根源とされています。

伝世の「宗周鐘」は、西周の天子—厲王・胡が直々に、製作させた礼器の中でも最も重要な楽器です。「毛公鼎」は西周の宣王の叔父で重臣であった、「毛公」が鑄造させた礼器であり、鼎の中には世界最長の篆書の銘文が鑄込まれています。「宗周鐘」には、123文字、「毛公鼎」には、500文字の銘文が鑄込まれており、これをもって殷周時代の金文すべてを総括することはできませんが、「嘗鼎一臠」(しょうていぶんちれん)、「間鐘半響」(しょうきょうはんきょう)などの、ことわざにあるように、部分から全体を推し量ることができます。この二器合わせて六百二十文字あまりの「鐘鼎文」は、漢字の源流を探る題材とするには充分と言えるでしょう。

謹んで「鐘・鼎の銘文」を展覧テーマとし、ここに漢字王国の末永い繁栄を祈ります。

4. 軍配(標識)

(1) 軍扇が軍配となる！(軍扇とハタキ)／軍配龍虎／風虎雲龍

想像すると、昔昔、放生瀧という海とつながった湖と内川という川にがあり、真ん中に「弁天島」と呼ばれる島がありました。そのそばに法土寺村という、部落がありました。その近くに放生津城という平城がありました。

腰まで使って「田植え」する湿田が広がり、瀧からはシジミや魚の「ボラ・グズ」などがとれ、海からは「ブリ・タイ・イカ・イワシ」など多くの魚が揚がりました。

奈呉の浦

農業や水産業だけではなく北前船という北海道からのニシン・昆布などの海産物や中国からの漢方薬などで賑わっていました。



この放生津という賑わった地域に、当然盗賊や火事だけではなく、いろんな自然災害なども頻繁に起こりました。

特に「寄り周り波」とう高潮や台風・大雨で被害よく起きました。

仮に想像してみると、昔の放生津城のお殿様は、いろんな事件や出来事に対し、先頭になって村人の安全や安心に勤められました。その時に持って指示・命令に使用した物が、「軍扇」と言われています。

火事の際は「火消しに」盗賊の際は「召し捕り」にとその軍扇が指導者の手にありました。軍扇が軍配に変化し、「村人の守り神」になっていったのかもしれない。

それと同時に「村を火から守る龍と安全を守る虎」が村人から崇拜され、「軍配龍虎」になったと想像しても面白いと思います。

これらの現実からくる想像力は、村人の生活を守ることや、子供達への成長を願う気持ちから「自然発生的」に生じたものであり、権威の象徴である「龍虎」は、神聖な神として扱われ、豪傑などの例えとして用いられ、龍は、「洪水日照り」などの自然現象を治める力があるとし、虎は、勇猛・勇気・悪霊退散・幸運「お力として崇められてきました。

武將軍配

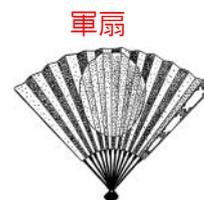


軍扇は、軍陣に用いる扇であります。古くは通常の扇を携帯したものでしょう。

「愚管抄の平治(へいじ)の乱(1159年:「平治元年」)の折りの源義朝(よしとも)の日輪を描いた扇の記事がその最古の例であります。

「平治物語絵巻」や「蒙古襲来絵詞」などには、親骨以下すべて太く彫骨(えりぼね)(彫り透かした骨)、黒塗りで表に日輪を描いた大ぶりで武骨な扇を武者が使うようすがみえる。

室町時代の故実書『随兵日記』には、長さ1尺2寸(約36センチメートル)、表に日輪、裏に月と七星を描くとし、随兵の携帯する扇とするので、中世には軍陣専用の扇のあったことが知られています。



しかし軍扇という語は近世の出現である。近世の軍扇の様式も室町時代と同じ規格で、軍用記などにあり、絵は表が日輪、裏は九曜とするものが多い。

現在使用しているハタキも軍扇の使うイメージからすると何か合っているような気がします。

軍配は、天運と地の利を計り、戦術を指揮すること。

軍配(ぐんばい)とは、かつて武将が戦の指揮に用いたうちわ形の道具である。

軍配団扇(ぐんばいうちわ)の略であり、本来「軍配」とは、所謂「軍配術」「軍配兵法」とも呼ばれる、戦に際して方角・日時を見極め、天文を読んで軍陣を適切に配置する法のことである。

軍配龍

軍配術を行う者を軍配者という。当時の軍配者にとって、合戦の勝敗は本人のみならず一族の盛衰にもかかわる重大事であり、出陣の日取りや方角で吉凶を占い、天文を観察して未来を予測することは軍配者の大きな役割であった。

もともと団扇は古くから悪鬼を払い、靈威を呼び寄せるという意味合いで、神事などにも用いられてきたものであり、龍虎は、中国古代神話では、古代王権を龍に寄せて、皇帝のしるしとして権威の象徴ともしてきました。

以来、龍虎は強いもの、神聖な神として扱われてきたのです。

龍と虎。また、互いに力の伯仲した英雄や豪傑などの例えとして用いられ、龍は、「洪水日照りなど自然現象を治める・悪を退治・幸運」の力として、虎は、「勇猛・勇気・権威・病や悪霊退散・幸運」の力として崇められてきました。

龍虎風雲・英雄豪傑・雲従龍・風従虎などの表現があり、「雲は龍に従い風は虎に従う」など、いずれも興味深い部分です。。

この龍虎の原図は、安永年間1775年(明和元年)に放生津在住の「高瀬竹次郎」が、法土寺町曳山を作成した際に設計した原図であります。

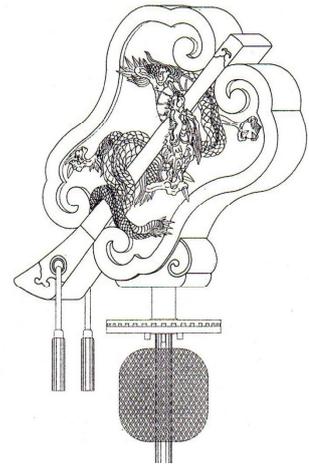
安永年間は、明和の後、天明の前。1772年から1781年までの期間を指し、この時代の天皇は後桃園天皇、光格天皇。江戸幕府将軍は徳川家治。

今から247年前に、この「軍配龍虎」を町の標識として図案化したことは、とても意義深く、歴史的な背景を見ても最高の表現力ではないかと考えられます。

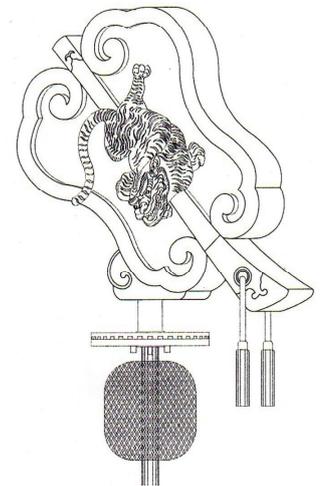
現在、この形の「軍配龍虎のデザイン」は法土寺町にしかないことを知るべきでありましょう。

「虎走れば、風が吹き、龍飛べば雲が沸きの「風虎雲龍」は、豊作・漁業・海上物流の五穀豊穰・安全を祈願する「軍配龍虎」の標識でありましょう。

大きな太鼓が「どーん」！。笛が一斉に「ピーヒュルウ ピー」続き、擦鉦がチンチチーと鳴り始める。



軍配虎



5. 何故「曳山」と呼ぶのか！

(1) 曳くとは

「曳く」はく引っ張ること、「曳く」の意味は後ろにさがること。「山車を曳く」ことから「曳山」と表現したのではない。曳く山という表現は、江戸では山車を曳くと言っていました。曳くことは神様を我が町内へ、我が家へ案内すること。

また、祭りなどで神輿を担いだり、山車を曳く役割の者も勢子(せこ)と言いました。

同音異義語！(読み)ひくでは、「引く・曳く・退く・牽く・惹く」がありますが、「曳く」は、物に手をかけてさがりながら近くへ寄せるという意味があります。

(2) 山でもないのに何故曳山と言うか！

山岳信仰からみても、神様はいろいろおられますが「高い場所に祀る」ことが原則であった。自分達の位置よりも「より高く祀る」ことから、「山に見立てた山」として神を迎えたのでしょ。

山車(だし、さんしゃやま)は、日本で祭礼の際に引いたり、担いだりする出し物の総称です。花や人形などで豪華な装飾が施されていることが多いが、地方によって呼称や形式が異なり、曳山(ひきやま)・祭屋台(まつりやたい、単に屋台とも)などとも称される。神幸祭などの行事では、この山車が町の中をねり歩き行列となります。

厳密に言うと、山の形状を模したり、上に木を立てて山の象徴としたものを「山」。それらが無い屋根の付いた曳き物が「屋台」と分類される。ただし、実際は祭礼ごとに形状に関係なく、名称がどちらかに統一されている場合が多く地方によって様々な呼ばれ方をする。

全国の代表的「山・車・笠・台」

○山のつくもの
やま(山、山車、軸)、ひきやま(曳山、曳き山)、かきやま(舁き山、担ぎ山)。／ やまほこ(山鉾)。台の上に山の形の造り物をのせ、鉾や長などを立てたもの。 厄神は鉾のようなキラキラしたものに集まるといふ言い伝えから。やまかさ(山笠)(北部九州地方) やたい(山車)(山形県新庄市、最上地方)

○車のつくもの(上記を除く)
だんじり(地車、台尻、壇尻、車楽、段尻[4])(主に関西地方) さいしゃ(祭車)(三重県桑名市地方) おくるま(御車)(知多地方、尾張地方)

○笠のつくもの(上記を除く)
かさぼこ(笠鉾)(秩父地方など)・おかさ(お笠)(和歌山県田辺市)

○台のつくもの
屋台としては、長野県、静岡県遠州、岐阜県飛騨など中部地方、神奈川県小田原市および兵庫県播磨地方など。 太鼓台は、瀬戸内地方で愛媛県新居浜市、西条市、大阪府八尾市、堺市などあります。また、台楽(台額)として、戦前まで大阪市南部一帯にあったが、2015年現在は生根神社の2基のみある。山車(だし)の語源は、神殿や境内の外に出す出し物であるからとする説と、依り代である髯籠(ひげこ)を出していたからだとする説などがある。山車は「出し物」全般を指すが、車の字がついていることから曳き山を指すことが多い。

山車の原型は、自然の山岳を模して造られた依り代(よりしろ)で、祭礼などで用いられる。

古来の民間信仰では、神は山岳や山頂の岩や木を依り代として天から降臨するという考えがあり、山上や山麓に齋場を設け祭祀が行われていた。提灯山は、神様を案内し「足下を照らす」役割があります。

これらは山岳信仰として、或いは山岳を神体とする神社として残っている。代表的な例では大神神社(三輪山)などがあり、小さな神社でも山麓にあるものは山頂に磐座や神木を持つことが多い。

村落が発達すると平野部においても祭祀が行われるようになり、臨時の齋場が設けられた。この時にも降臨を仰ぐために依り代(よりしろ)を立てており、これが恒久化して、現在の神社のような施設ができる。

この依り代のつに、山岳を模して造られた山(やま、造り山・飾り山)がある。恒久的である神殿内部の依り代と並行して、この山は神の降臨を表現する、或いは、再確認する臨時的依り代として、祭礼などで用いられるようになる。元来は実際に盛り土(築山)をし、祈願していたが、後に祭壇を築山と見做すようになる。

民間の祭礼にも同じようなものが登場し、形態は山との関連と運行形態から一時的に祭壇のような築山を設ける「置き山」、曳く形式の「曳き山」、担ぐ形式の「舁き山」などと呼ばれ、また「だし」とも呼ばれるが、その漢字には、関東地方では山車が使われた。現在の祭礼では、巡行されない「置き山」は数が少なく、巡行される山車がほとんどである。

6. 曳山囃子

(1) 受け継がれる曳山囃子

曳山が奏でる典雅(てんが)な囃子は 初めは、笙比千利岐(しょうひちりぎ)を使った雅楽のような囃子であったと考えられます。

1774年山王町に太鼓台があり、大太鼓と横笛を基本とした「お神楽囃子」であったように思われます。

文政年間ごろ「瞽女囃子」と言われるものがあり、下座に座頭の囃子方がいたことからこの名がついた。立町の山王社横に「瞽女町」(現法土寺町七間町)があり、ここで三味線、笛、太鼓を習った盲人の女芸人が存在し、昭和の初期までこれら盲人の練達者が各山町の囃子方の指導にあった。

囃子は、山町ごとに楽曲や曲態が多少は相違があったようであったが、後の遊芸の義太夫や長唄など、その他の曲を取り入れた賑囃子(にぎばやし)の研究が進み、擦鉦(すりかね)も加わり、今のような囃子に統一されたのは、明治の中期からである。

祇園囃子の「銀囃子」という勇みを入れたものは、明治の中期であろう。

いくつかの曳山には、三味線も取り入れられ、囃子を整えていった。「戻り囃子」は、誠に勇壮で奈呉の浦に望む放生津の曳山に最も調和したものであります。

放生津には祇園囃子系列の「桧物派と菊屋派」がある。

囃子練習



囃子練習



桧物派は、三味線、尺八、胡弓、長唄に長じ、紺屋町・立町・南立町・法土寺町・荒屋町・東町・四十物町の曳山に、菊屋派は、笛、太鼓、尺八、義太夫を演奏し、長徳寺・古新町・奈呉町・中町・三日曾根・新町に属し、また、中谷、廣原、菊屋(綿屋)、皆川、釣・小松などの各社中も曳山に参加しています。

囃子は、本囃子と戻り囃子と雑曲に大別されます。本囃子は、新興渡御に供奉するときの囃子で、本ばやしは、古風で厳粛典雅(てんが)であり、戻り囃子は割竹(小太鼓を打つ細い竹)使用せず「ばち」で勇壮に打ち、祭り気分を高潮させます。

囃子練習

囃子には、楽譜がなく町内に関係する子供達などが練習をしています。

囃子方を育成し伝統を守り伝える事業が日々続けられています。「町内外・男女・年令を問わず」、曳山囃子に魅力を感じた皆さんが集まってきています。

現在は、「福田吉孝・福田行宏・中野栄昌・桧物豊成」等が指導し、若手を育成している。(故:亀田重和)



参考資料

笙(しょう)とは、雅楽に用いる管楽器の一。匏(ほう)の上に17本の長短の竹管を環状に立てたもので、竹管の根元に簧(した)、下方側面に指孔がある。

匏の側面の吹き口から吹いたり吸ったりして鳴らす。奈良時代に唐から伝来。笙の笛。鳳笙(ほうしょう)。

現在は、囃子方・曳き子など、町内外の若集が集まり、実質的な運営に携わっている。

町内の少子高齢化に伴い、外部からの支援は不可欠であります。

今後は、しっかり組織化し重要な戦力として捉えていかねばなりませんし、指導的な役割もお願いしながら、共に保存・継承・運営出来る体制を構築する必要性を強く感じております。

(2). 法土寺町曳山囃子 令和元年09月25日収録(法土寺町公民館にて:CD作成)

(1)本囃子

- ①嘉和羅恵比寿(かわらえびす)
- ②神楽
- ③万歳どんどん
- ④仮名和(かなわ)
- ⑤唐加茂辞(からかもじ)
- ⑥神楽どんどん
- ⑦江戸越後獅子
- ⑧邯鄲(かんとん)
- ⑨二つどんどん
- ⑩開花(かいかい)
- ⑪桜揃いⅠ
- ⑫桜揃いⅡ

(2)雑曲

- ⑬銀囃子
- ⑭ちゃちゃりこ
- ⑮見渡せば
- ⑯ちゃちゃりこくずし
- ⑰おっぴきだいさん
- ⑱チェンチコ
- ⑲弥栄(いやさかえ/イヤサー)
- ⑳宮づくし
- ㉑戻り囃子

全21曲

CD録音盤は、2012年録音分8曲含み計29曲収録。

(3)「曳山囃子と囃子方」 富山大学「島添貴美子氏」報告(参考文献)

曳山囃子の歴史と近年における伝承は、「桧物派と菊屋派(綿屋派)があり、現在の曳山囃子につながる囃子方の系譜は、各町の囃子方の人々が書き残している。

それによると、曳山囃子には桧物派と菊屋派(綿屋派)があり、「桧物派は三味線、尺八、胡弓、長唄に長じ、紺屋町、立町、南立町、法土寺、荒屋、東町および四十物町の曳山に、綿屋派は、笛、太鼓、尺八、義太夫をよくし、長徳寺、古新町、奈呉町、中町、三日曾根および新町山に属しとある。

故明川博氏(荒屋町)による「新湊市放生津 曳山囃子(私家版、1997年)によると、桧物派の祖として桧物幸次郎、菊屋派(文中では「綿屋派」とある)の祖として廣原耕造の名が挙げられている。「二人コウハン」と呼ばれたこの二人については、以下のような伝承がある。

桧物派まず、桧物派の桧物幸次郎については、桧物和廣氏(法土寺町)が寺の過去帳等を調べたり、先人から聞いたことをまとめておられる。

それによると、桧物家は、寺の過去帳によると1764年(明和元年)まで遡ることができる(それ以前のは寺の火事により焼失)。江戸時代は代々、檜野屋松右エ門を踏襲し、檜物師をしていた。桧物となったのは明治になってからである。桧物幸次郎は安政生まれ、1936年(昭和11年)没で、生まれつき目が不自由であった。

「幸次郎」は次男で目が不自由であったので、瞽女町であった七間(しちげん)町(ちょう)(七軒町)に移り住んだ。

生地行男氏(法土寺町)によると、思われる聞き書き「曳山囃子(法土寺中心)」(年月日不明)に、幸次郎の息子市四郎が、幸次郎について次のように語っている。

三味線・尺八・胡弓の楽器の演奏と長唄の出来た人である。

自分が幼少の頃、父より「曳山囃子は長唄から出来たものである。

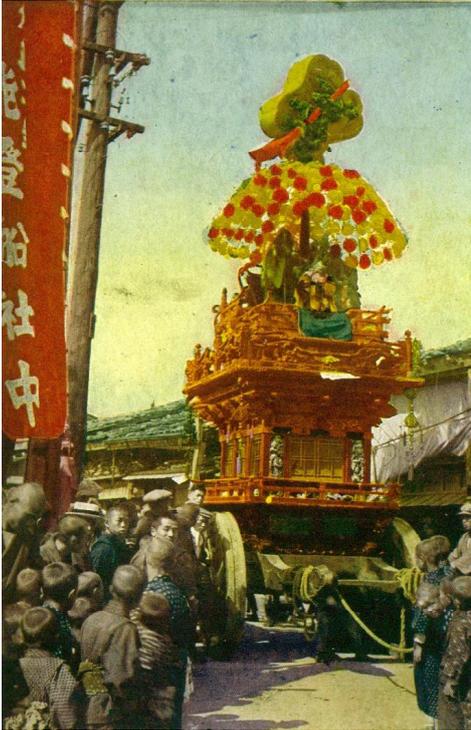
これから其の唄を歌うから笛で音を合せて吹け」と練習をさせられたが、唄に笛を合せることが難しく、叱られながら覚えたことが蘇って来る。父より指導を受けた曲は種々あったが忘れて残念である。

其のうちの一曲に「あおいのう」と云うのがあるが、他町では知られていないと思う。囃子の原形は長唄であることは父よりの言で証明出来る。父も曳山囃子では一派を成した人である。三味線・尺八・胡弓の演奏が出来たということから、幸次郎が江戸時代以来の座頭(当道)の伝統を受け継いでいることがわかる。

1884年(明治17年)



1918年(大正7年)



当道(座)は明治時代になると江戸幕府の庇護がなくなり解体していくが、放生津では明治時代以降も、七軒町で座頭芸の伝承が続いており、曳山囃子にも影響を与えたことがわかる。

幸次郎には、六人の子供がおり、うち、長作(1904年(明治37年生)、1971年(昭和46年没)は荒屋町の囃子方として笛で活躍、市四郎(生年不明、1987年(昭和62年)没)は獅子絵田在住で塗装業を営み、法土寺の囃子方として笛で活躍した。

菊屋派(綿屋派)他方、菊屋派(綿屋派)の「コウハン」である廣原耕造については、故二口繁治氏(三日曾根)が平成一六年に新湊市教育委員会(当時)へ宛てた手紙に、八幡町に住んでいた文久生まれの目の不自由なおばさんから聞いた話として、以下のように記している。

1890年(明治23年)から24年頃、放生津立町の菊屋小路北側中程に廣原桶屋が有り、其の桶屋に廣原耕造さん、目が不自由で何が(ママ)特技をとして曳山囃子を拾数曲、作曲されました。

其の曲(囃子)を現在「本囃子曲名何々」と言って居ます。

之迄、専用の曲(囃子)が無く、童謡、民謡、寄席の出囃子等(雑曲)を囃子として居ました(現在も)。本囃子十数曲の内、一曲宛、各町固有の囃子として、祭には町の有志「曳山停車」の張紙の処で囃子をしたのです。

旧菊屋町廣原さんは石川県に移転。この他に故渋谷善蔵氏(新町)の『曳山車の由来』に本囃は當町藝人の總元締菊屋町高等様(座頭の官職)(桶屋)の發案にて優雅古典的にして本町獨特の物也とある。

1935年(昭和10年)



「高等様」とは当道の官職「勾当」のことで、郷土史家の故荒木菊男氏が「放生津曳山囃子『雑考』」(執筆年不明)で推論したように、廣原耕造が桶屋勾当であった可能性がある。ただし、視覚障害者である桶屋勾当自身が桶職人であったとは考えにくく、また、放生津に桶屋勾当なる座頭が存在していたかどうかは現在のところ不明である。

尚、菊屋小路は、新豎町(西立町)にあった神楽(かぐら)遊郭の小路である。神楽遊郭は、戦前まで春は獅子舞競演、夏は盆踊り、秋は曳山の休憩の場になるなど、若者によく利用された場所であった。

このように、檢物派は瞽女町であった七軒町で生まれ、菊屋派(綿屋派)は菊屋小路(神楽遊郭)で生まれた派であり、祖とされる「二人コウハン」のいずれもが、座頭の芸を習得し伝承してきた人物である。こうしたことから曳山囃子は、座頭や瞽女、芸妓といった花街の芸能者による芸能の影響が大きかったと推測される。

近年における伝承現在の放生津の曳山囃子方は、皆川社中に依頼する新町と紺屋町を除く11町が、各町内で自前の囃子方を養成している。

しかし、戦後しばらくの間まで、曳山車の焼失等による中断期間中に、囃子方が他町の曳山に乗ったり、あるいは、熱心な人々が他町の囃子の上手な人に習いに行ったりする交流が広く行われていた。こうした交流が戦後に生じた人手不足による囃子方の伝承の危機を救い、また、現在の各町の本囃子の系譜にも影響を与えたともいえる。

法土寺町と荒屋町故明川博氏による「荒屋町曳山囃子方系図」によると、荒屋町は1930年(昭和5年)の曳山焼失後、1952年(昭和27年)に再建した際に、囃子方の顔ぶれが一新した。その中に檢物幸次郎の息子長作が荒屋町囃子方(笛)として指導に加わっている。

明川氏への聞き取りでは、中断期間中の囃子方は新町や法土寺町へ行っていたという。明川氏自身は、18才の頃、青年団で獅子の囃子で笛を始め、20才くらいのときに曳山の囃子を始めた。

昭和30年頃、同じ会社の同僚と三人で、廣原源一郎(奈呉町、1914年(大正3年)生、1986年(昭和61年)没)のところに一年間毎日通って曳山の囃子を習った。廣原は菊屋派である。廣原のところへ習いに行く前に、荒屋町の山の囃子を習っていたが、完全には覚えていなかった。

廣原のところでは、桧物の笛と合わない。怒られて当たり前。でも、一度覚えたもの(廣原の笛)はなかなか変えられなかった。前述のように、現在の荒屋町の本囃子は、菊屋派には分類できない。そのため、明川氏は怒られながら、桧物派を維持していったと思われる。

一方、明川氏と一緒に、廣原源一郎へ習いに行った生地行男氏は、荒屋町からのちに、法土寺町で囃子方を勤めた。

法土寺町は、桧物幸次郎の息子市四郎が囃子方を勤めた町であるが、前述のように、現在の法土寺町の本囃子は菊屋派に分類できる。

生地氏によるとと思われる聞き書き「曳山囃子(法土寺中心)」(年月日不明)によると、1960年(昭和35年)から昭和36年頃より世代交代となり、現在の廣原理髪店(奈呉町在住)に(昭和27年頃)指導を受けた生地行男(笛)の構成する現メンバーが誕生し、町の年配者からはよく、法土寺の元の囃子とは違っていると指摘を受けたものである。

その後、各町各派の囃子方との交流に依り曲目の不足補充をされた所などもある。といい、1955年(昭和30年)代に法土寺町の囃子が菊屋派に代わり、現在に至ると思われる。

また、生地氏とともに、長年、法土寺町の囃子方を勤めた本郷和夫氏によると、生地氏が法土寺町の囃子方に入ってから三味線が加わったという。菊屋派の広がり菊屋派の資料は二口氏と荒木氏による文字資料の他は、明川氏と生地氏の桧物派側の情報及び聞き取りに頼るほかなく、しかも情報が錯綜している。

しかし、菊屋派の系譜として廣原源一郎のほかにも、綿嘉作(奈呉町、屋号デンセイ、1906年(明治39年)生、1961年(昭和36年)没)、綿谷仁三吉(古新町、屋号中谷(なかや)、1897年(明治30年)頃生、1955年(昭和30年)頃没)らの名前が挙げられる。

そして、この世代とその次の世代である故小松與二氏(三日曾根、1928年(昭和3年)生)、故二口繁治氏(三日曾根)、釣岩由氏(奈呉町)らが、町を越境して囃子を伝承していたことが分かった。

菊屋派の祖とされる廣原耕造に直接つながる伝承の系譜は、明川氏が1987年(昭和62年)にコピーしたと書かれた「放生津 曳山囃子楽譜 廣原派 廣原源一郎」の末尾に追加された「新湊市曳山(山車)囃 48.9.18 廣原」に本囃子は当時、当市の芸人の總元締め高等様(座頭の宮?) (?業は桶屋 コケラ葺を得意とする)(廣原の祖先)の発案で優雅古典的にして当市独特のものとして生れる。とあり、この「廣原」は廣原源一郎のことと推測される。

生没年と考慮すると、源一郎はおそらく、廣原耕造の孫か曾孫、あるいはその世代の縁戚にあたると思われるが、耕造から直接、囃子を習ったかどうかは不明である。

次に、綿嘉作について、生地氏によるとと思われる聞き書き「曳山囃子(法土寺中心)」(年月日不明)には、嘉作の長男勝次郎の談話として、1906年(明治39年)生、1961年(昭和36年)、奈呉町にて塗装業を営む。曳山囃子の一派を成した人で、笛・太鼓・尺八に優れ、義太夫を語る事が得意であった。

自分が幼少の頃、父と紺屋町の神楽湯に入浴するたび、入浴客に義太夫を聞かせていた事をおぼえてゐる。又家では年中曳山囃子の太鼓と笛の音がたえず、皆川社中の皆川竹男(太鼓)、皆川富雄(笛)、奈呉町釣社中の釣岩由、田辺氏など多くの方が父の指導を受けていた。



1952年(昭和27年)



又、戦前では、法土寺町の羽広義男(笛)(塗装業)も練習に来てみた。現在父の囃子の本流を汲んでゐるのは皆川社中の人達だと思ふ。銀囃子の演奏は笛・太鼓共に何ともいえない父の味がにじみ出ている。

1970年(昭和45年)



又父のメンバーには、中瀬喜一、中谷(なかや)(古新町住人で三味線)氏などが居た。とある。綿嘉作も、廣原源一郎と同じように、奈呉町以外の人々に囃子を教えていたことが分かる。

皆川社中の皆川竹志氏、孝志氏、良一氏の三兄弟によると、三兄弟の父竹男氏と富雄氏は、綿嘉作が親戚であったことが縁で習いにいったという。父竹男氏から三兄弟への伝聞によると、綿嘉作は太鼓も笛もよくしたが、特に太鼓はすばらしく、教える時はバチでたたかれるなど非常に厳しかったという。

綿嘉作の演奏仲間として挙げられている「中瀬喜一・中谷(なかや)(古新町住人で三味線)氏」の二人のうち、古新町の中谷とは、綿谷仁三吉のことである。仁三吉の娘國子氏によると、仁三吉の生家は東町にあって、幼少の頃に失明したという。大人になってから、古新町に移り住み、按摩で生計を立てる一方、綿嘉作、中瀬喜一らと菊屋町の「料亭汐海」のお座敷で演奏していたという。

また、仁三吉は三味線や笛、ハーモニカが上手で、仁三吉の妻は箏を弾くので、夫婦で「黒髪」(地唄、長唄の曲のひとつ)などを合奏したり、浜に行つてハーモニカやアコーディオンなどを家族で合奏していたという。孫の忠氏によると、仁三吉はいつも着物を着ていてスラーとした人で、いつも火鉢の前に座つて、三味線を弾いていた静かなお爺さんだったという。忠氏は箏で「さくらさくら」を弾くのが好きで、お爺さん(仁三吉)の前で弾いていると、箏柱を動かして調子を整えてくれたという。

2016年(平成28年)

孫の孝治氏が祖母(仁三吉妻)の生前に聞いた話によると、曳山や獅子舞の囃子方を勤め、故小松與二氏のほか、故野村氏(長徳寺)、故小菊氏(四十物町)といった人々が、曳山囃子を習いに来ていたという。

仁三吉に習ったという人は他にも、故二口繁治氏、釣岩由氏らがいる。このように、菊屋派では優れた囃子方の人々が広く門戸を開いて、他町の人々も教えていたことが分かる。2010年(平成22年)に射水市教育委員会が行つた放生津曳山囃子調査(アンケート)によると、「過去に自町の囃子に対して影響を与えた方や町(囃子を習いにいった、又は指導を受けた等)があれば記入してください。」の問いに対して、「奈呉町」(中町)、「綿谷流。明治時代に古新町に囃子を習いにいった。」(長徳寺)、「過去に菊屋に習いにいったと老人から聞いた」(南立町)といった回答がみられる。

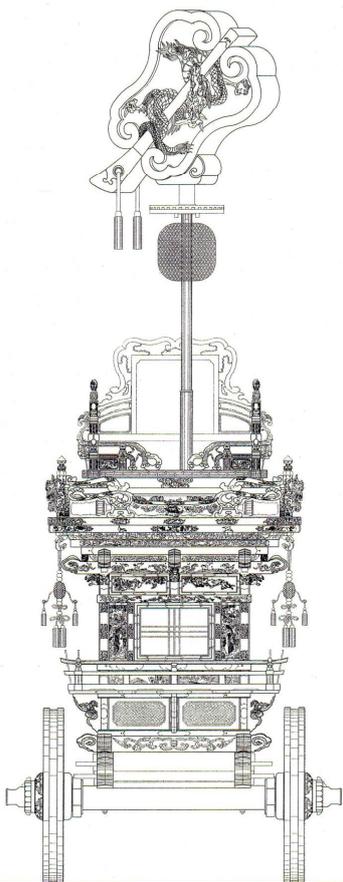
このように、菊屋派の曳山囃子は町を越境した交流のなかで広がっていったといえるだろう。

戦後の曳山囃子の再興と新しい伝承の試み現在の曳山囃子はすべての町で、録音を使わず生の演奏で曳山の巡行を勤めている。しかし、現在の曳山囃子の姿は、戦後の一時期、曳山囃子の伝承の危機があり、それを乗り越えて再興を果たした結果であり、そこには多くの人々の尽力があつてこそのものである。

すでに、荒屋町での曳山巡行中断中から再興後の囃子方の状況について述べたが、ここでは故二口繁治氏の手紙や釣岩由氏、皆川社中、門島義弘氏(紺屋町囃子方)からの聞き取りから再興の状況をたどる。



曳山図面（正面図）



三日曾根は1913年(大正2年)より1949年(昭和24年)まで曳山の巡行が中断していた。

二口氏が、2004年(平成16年)に新湊市教育委員会(当時)へ宛てた手紙には、戦後1946年(昭和21年)紺屋町浅井紙店の店主、曳山総代が私に曳山の囃子方を頼まれて、私も三日曾根に曳山再建(昭和24年)した場合を思ひ、町内から三名と共に古新町の綿谷様に教へて戴きました。とある。

38年間の中断中に、囃子方は他町の曳山に乗る機会があったと同時に、自町の曳山の再建を見通して、曳山囃子再興の準備のために、古新町の綿谷仁三吉へ習いに行っている。

曳山巡行の中断はなかったが、囃子方の人手不足の町では、他町に囃子を頼むことも珍しくはなかった。

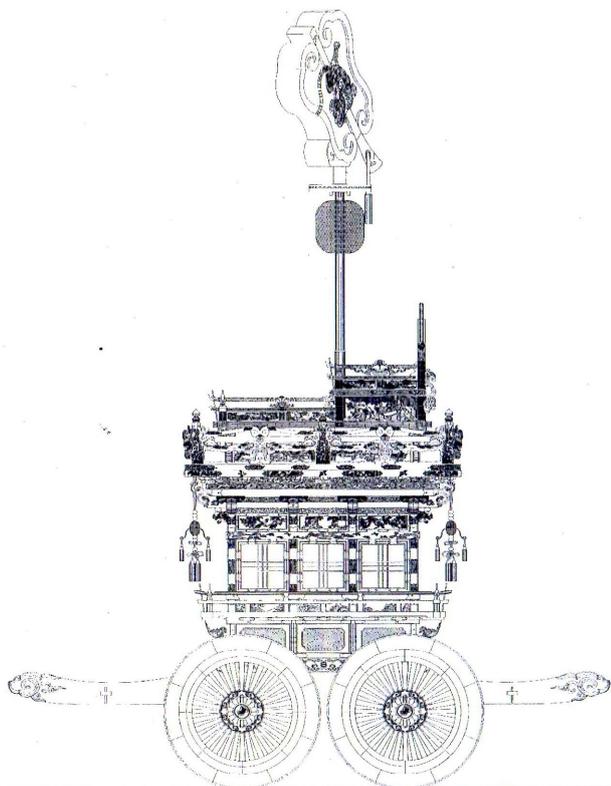
皆川社中は1965年(昭和40年)に皆川竹男氏を代表として結成し、遅くともその頃には新町と紺屋町からの依頼で曳山の囃子方を勤めるようになっていた。

皆川社中はその後も、1965年(昭和40年)代に囃子方不足に陥った東町が、1975年(昭和50年)代に当時の小学生たちを養成して、曳山囃子を再興させた際に、東町の囃子方の指導にあたった。

現在の東町の囃子方は、再興の際に指導をうけた当時の小学生たちが引継ぎ、次の世代へ伝承している。

釣岩由氏によると、釣氏の従兄弟から頼まれて、奈呉町から二人連れて三人で中町に教えに行ったほか、立町から頼まれて、奈呉町の囃子方を二つに分けて、片方を立町の曳山に乗せたこともあったという。

曳山図面（側面図）



側面

現在の紺屋町の囃子方は、皆川社中からのれん分けされた門島義弘氏のグループがつとめているが、門島氏のグループが紺屋町の曳山に乗るようになったきっかけは、1981年(昭和56年)の紺屋町の曳山巡行の復活だった。

義弘氏の父治義氏は、1968年(昭和43年)まで立町の曳山に囃子方として乗り、山を降りた後も、囃子好きだったことから、皆川社中のところに遊びに行っていたという。

紺屋町の曳山巡行が復活するにあたって、皆川社中が新町と紺屋町の両方の曳山の囃子方を勤めることになった。紺屋町の曳山には太鼓と鉦の二人で乗っていたが、笛を吹く人がいなくて、テープにしていた。

しかし、角を曲がる時に、テープでは囃子を急に変えられないので、笛で乗らないか、と治義氏が誘われた。

ただし、治義氏の笛は立町の曳山囃子だったので、合わないからと本囃子はテープだったという。

義弘氏が囃子方として曳山に乗ったのは、小学五年生の頃で父治義氏から誘われてのことだった。

治義氏が紺屋町の囃子方を引き継いでからは、義弘氏と同級生の三人で笛と太鼓と鉦を受け持ち、囃子方を勤めた。本囃子はテープだった。〈お神楽〉、〈チンチコ〉、〈弥栄〉は治義氏が笛を吹き、子供二人で太鼓と鉦を分担していた。

練習は皆川社中でお世話になっていたという。義弘氏は、鉦から始めて、太鼓、笛、三味線を習得し、紺屋町の曳山囃子は再興した。義弘氏が三味線を習得したのが、24才を過ぎてからとのことなので、紺屋町の曳山囃子の再興までに約15年かかっている。

現在、義弘氏を中心に、義弘氏の家族、親戚、同級生で、紺屋町の囃子方をつとめている。

放生津全体で囃子方を養成しようという動きもあった。

二口氏の手紙によると、「1977年(昭和52年)曳山囃子を出来る人が少くなり町々が大変困って居られたので、私が曳山町の囃子方代表者に集ってもらい新湊曳山囃子保存会を設立し後継者の養生に週一回指導したり、明川氏や生地氏、釣氏らが、曳山囃子伝承会(喜友会)を設立して、文化会館で中高校生に教えるなどしたこともあったが、いずれも数年で終わっている。小学校での曳山囃子の教習も始まった。

曳山説明会 (2019年：令和元年)



皆川社中は、1991年(平成3年)に後援会ができ、新湊小学校に太鼓、笛などを購入して、皆川社中が15年ほど子供たちに曳山囃子を教えるなど後継者育成に貢献した。

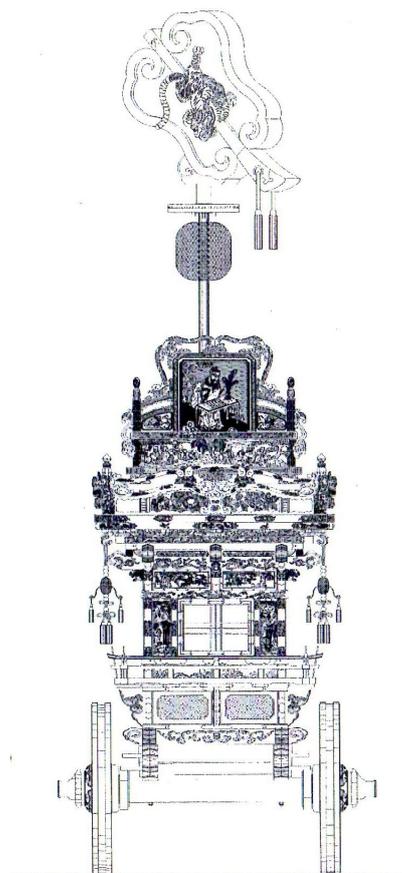
現在の新湊小学校の「曳山囃子クラブ」は、古新町の囃子方が指導を引き継いでいる。

放生津小学校でも「まっつんクラブ」という名で、釣氏が長年、指導にあたってこられた。

追伸

また、各山町にて独自に「曳山と接する機会」を作り「子供達の意識向上に繋げている。今後は、「地域総合型授業時間の見直し」を考えるべきであろう。

曳山図面 (背面図)



背面

7. 曳山囃子曲目名の分析

(1) 曳山囃子名の調査

この調査は、何無く使用している曳山囃子名が「何故こんな名が付いているのか」という単純な疑問から、漢字や読み方・曲のリズム・背景など総合的にあくまで、素人考えでおこなったものであり、歴史的資料や証拠に基づくものではありません。関係のない文章も多くありますが、この中かのヒントと思いき無理矢書いてあります。

調査員の空想・思いつきなどであることを御理解賜りますようお願い申し上げます。

曳山囃子のはじまりは、永安三年(1774年)山王町に太鼓台があり、太鼓山番付鬨取りの記録あり、(久々江屋文書)大太鼓と横笛を基本としたお神楽囃子であったように思われます。

文政のころ(1818年)「瞽女囃子」といわれるものがあり、立町の山王社横に(七間町)瞽女町あり、ここで三味線・笛・太鼓の芸人衆が曳山囃子を育ててきたとされています。

その後「囃子」は、曳山町ごとに楽曲や曲態が多少の相違はあったが、のちに、遊芸の長唄や義太夫を取り入れた賑囃子の研究も進み、擦鉦も加わって今のような囃子に統一されたのは、明治の初期頃と言われている。

① 嘉和羅恵比寿(かわらえびす)

嘉は、よい。めでたい。りっぱな。さいわいする。羅は、網を意味する。

えびすは、七福神の一つであり、恵比寿天は、七福神の中では唯一日本由来の神様となっています。

日本神話の「いざなぎ」と「いざなみ」との間に生まれた子供の蛭子(ひるこ)と言われていました。イラストでは釣り竿や鯛を持つ姿が特徴的です。

この姿から漁民の守り神として崇められてきましたが、商売繁盛の神様としても広がりを見せました。商売繁盛や大漁・豊作の神様です。

恵比須



別の意味では、嘉和羅とは、伽和羅(かわら)＝「保護する」！？

古代の武将が衣(きぬ)、禪(はかま)の上に短甲という日本古来の甲冑を以って武装した姿である。

短甲は古くは伽和羅(かわら)といわれ、日本書紀、古事記等に見え、またその形状は発掘品等により推定することが出来る。

「かわら」とは梵語の保護するという意味で屋根の瓦(かわら)は家屋を保護し、武将の伽和羅(かわら)は人体を保護する意と解される。

短甲は鉄板を横割とし、鋌や組紐、革等で綴合わせたもの。胸腹部の前後を擁護するだけで挂甲に比して短いので、短甲と称されたものと考えられる。東大寺 献物帳にこの短甲の記載がある。胴甲に兜を附し、また胴甲に腰下の小札の草摺(くさずり)、籠手(こて)、頸鎧(くびよろい)、肩鎧(かたよろい)を附属したものが、末永雅雄氏の研究によって復原されたが、これはその形式によっている。

兜は円形でなく前に衝角(しょうかく)があり、頂きに雉の羽等を飾った。また、上位の武将は金銅[銅に金鍍金したものを]を以って製することもあった。

大刀は腰に吊し、片刃の直刀で柄頭が槌のようになっているので頭槌(かぶつち)[頭推(かぶつち)]の大刀という。それに刀子(とうす)という短刀を腰に吊し、梓、槻、櫨などの丸木弓を手に、背には防已(つづらふじ)の蔓(つる)で編んだ胡(やなぐい)を負って、中に柳や竹で製した矢に鏃(やじり)をつけたものをさしている。

左手首につけたのは、鞆という革製の弓弦(ゆみづる)が手首を打つ事をとめる防具。武器にはこの他長い木の柄をつけた鉾(ほこ)があり、両刃の劔(つるぎ)、また防禦の為の楯がある。

「かわら」とは梵語の保護するという意味で屋根の瓦(かわら)は家屋を保護し、武将の伽和羅(かわら)は人体を保護する意と解される。』とあるが本当だろうか？

そうすると、もしかして、金属採取・加工＝カワラ、ではないのかもしれませんが。このあたりのところ、もう少し掘り下げてみたいと思います。

②神楽

神社・祠(ほこら)の前で奏でる。

古事記・日本書紀の岩戸隠れの段でアメノウズメが神懸りして舞った舞いが神楽の起源とされる。アメノウズメの子孫とされる猿女君が宮中で鎮魂の儀に関わるため、本来神楽は招魂・鎮魂・魂振(たまふり)に伴う神遊びだったとも考えられる。

「能および狂言の用語。(1)能の囃子事。巫女や女体の神などが舞う舞事。

笛, 小鼓, 大鼓, 太鼓で演奏し, 笛のリズムは打楽器のリズムに合う。

普通, 前半の純神楽部分と後半の準神舞(かみまい)部分とに分かれるが, その接続のしかたには, 段で接続する(段直り)と, 地で接続する(地直り)の2種がある。純神楽部分では笛は固有の旋律を吹き, 小鼓も(神楽地)という特殊な地を打ち, 多く幣をもって舞い, 優美にリズムカルに演奏される。」

③万歳どんどん

歳(旧字体:萬歳、ばんざい、ばんぜい)とは、喜びや祝いを表す動作などを指している言葉。動作を表す場合は、「万歳」の語を発しつつ、両腕を上方に向けて伸ばす。また、より強調して、「万々歳(ばんばんざい)」と言われる場合もある。

元々は中国に於て使用される言葉で「千秋万歳」の後半を取ったもの。万歳は一万年で皇帝の寿命を示す言葉であり、本来皇帝に対して以外では使わなかった。諸侯の長寿を臣下が願うときは「千歳(せんざい)」を使っていた。

④仮名和(かなわ)

仮名(かな)とは、漢字をもとにして日本で作られた文字のこと。現在一般には平仮名と片仮名のことを指す。表音文字の一種であり、基本的に1字が1音節をあらわす音節文字に分類される。漢字に対して和字(わじ)ともいう。ただし和字は和製漢字を意味することもある。つまり、仮名は、音を表す日本独自の歴史がある。

また、「かなふ」となると、「心にかなふ」「思ふにかなふ」など「…にかなふ」の形で《合致する。適合する。ふさわしい。》とも考えられる。

⑤唐加茂辞(からかもじ)

京都賀茂別雷神社の御厨の地に建てられた神社本殿(三間社)摂社三殿(片岡社太田社、貴布祢若宮社は二間社、榎尾社は一間社)、権殿(一間社)はいずれも正規の流造の形式をもち、材料工作とも優秀である。

賀茂別雷神社の直系としてきわめて貴重な遺構で唐門、回廊も社殿配置を知る上に重要である。

京都最古の歴史を有する一社であり、かつてこの地を支配していた古代氏族である賀茂氏の氏神を祀る神社として、賀茂御祖神社(下鴨神社)とともに賀茂神社(賀茂社)と総称される。賀茂社は奈良時代には既に強大な勢力を誇り、平安遷都後は皇城の鎮護社として、京都という都市の形成に深く関わってきた。賀茂神社両社の祭事である賀茂祭(通称 葵祭)で有名である。また、社報「上賀茂」が年2回発行されている。



唐門とは、日本建築における門の様式の一つで、四脚門の一つ。唐破風(からはふ)(中央部がまるく凸曲線になり、両端部で反転して凹曲線となる破風)をもつ門で、側面の妻の部分に唐破風をもつのを平唐門、背面にもつのを向(むかい)唐門と呼ぶ。三宝院唐門などは前者、大徳寺唐門、豊国神社唐門などは後者の例。

○から-おり【唐織】

- 公家の装束に用いる浮織物(うきおりもの)に対する通称。唐織物。唐綾織。
- 中国渡来の織物。また、それを真似て織った織物。金襴、緞子(どんす)、縞珍(しゅちん)、縞子(しゅす)などの類をいう。唐織物。からの地。
- 虎明本狂言・鍋八撥(室町末-近世初)「後にはきんらんどんすどんきん、からをりにしきなどを、しゃうばいいいたさうと存る」
- 能装束の一種。浮織物で仕立てた打掛の小袖。東北(とうぼく)、夕顔、采女(うねめ)、野宮など、多くは女装束の表衣にし、まれには公達役にも用いる。その紅色のまじっているのを色有(いろあり)唐織といい、若い女役に用い、紅色のないのを色無(いろなし)唐織といって、年寄り用にする。唐織物。

○加文字

加文字とも書くが、髪文字の略。女性が日本髪を結うとき頭髪に補い添えるための髪。『和名抄』に「和名加都良」とあるように古称はかずらといい、入れ毛、入れ髪などともいった。普通使われるものは根かもじ、鬢(びん)みの、髻(たぼ)みの、横みの、ばら毛の5種。根かもじは丸髻(まるまげ)と島田髻に、鬢みのは鬢に、髻みのは髻に、横みのは銀杏返し(いちょうがえし)、桃割れなどに、ばら毛は丸髻、島田髻の上にかぶせるのに用いる。

かもじは、女性が日本髪を結うときに、地髪が短くて結い上げられない場合に使用する添え髪をいう。髷、髪文字とも書く。「もじ」は文字と書き、御殿女中用語つまり女房詞(ことば)で、「か」は髷(かつら)、つまり仮髪(かはつ)を意味する。

平安時代の高貴な女性は髪を身丈よりも長くしていたが、鎌倉時代になると、地髪の短い人たちの間で「入れ毛」つまり「かつら」が盛んに用いられるようになった。

室町時代に入るとこれを「かもじ」とよぶようになり、とくに装束姿の場合には、下げ髪は衣服の丈よりも長くなくてはいけないところから、かもじ利用が多くなった。さらに江戸時代、幕府が浪人取締りのため被(かぶ)り物の禁令を出してからは、素面で歩く風習が一般化して、島田髷(まげ)、兵庫髷、勝山(かつやま)髷がおこった。

これに加えて、前髪を膨らませ、鬢(びん)をとり、髷(たぼ)を出し、これを頭上に束ねて髷をつくるようになって、地髪が足りない女性の間では、かもじが結髪上欠かせないものとなった。

安永(あんえい)年間(1772～81)には『当世かもじ雛形(ひながた)』という書物までが刊行され、さし(づと)、前髪、鬢張り、鬢ずら、長かもじ、中かもじなど、いろいろの種類が生まれた。これは女性の結髪の変化に重大な影響を与えたばかりでなく、日本髪の美しさもその頂点に達した。

結髪にいろいろのかもじを利用したところから、町にはかもじ屋という職業さえできたくらいである。

明治以降、束髪が盛んになり、とくに大正になって断髪が行われて日本髪は衰退し、それに伴ってかもじの利用は激減した。現代ではヘアピースの名で洋髪の一部に用いられ、また頭髪の薄い人や少ない人たちの利用も増えている。

⑥神楽どんどん

a.物を続けざまに強く打ったり大きく鳴らしたりする音を表す語。「扉を乱暴にどんどん(と)たたく」「花火がどんどん(と)あがる」

b.物事が勢いよく進行するさま。また、物事をためらわないでするさま。「仕事がどんどんはかどる」「遠慮しないでどんどん相談に来てください」

c.物事の調子よくはかどるさま。また、ためらわずに事をすすめるさま。「工事がー(と)進む」「一人でー先に行ってしまう」

d.物事や動きの切れ目がなく、次から次と続くさま。「荷物をー(と)運び出す」「ー(と)客が来る」

e.太鼓を鳴らす音、銃砲を発射する音を表す語。強く足踏みをしたり物をたたいたりする音、水が強くぶつかる音などにもいう。「祭りの太鼓がー(と)聞こえる」「ドアをーとたたき続ける」

⑦江戸越後獅子

越後獅子(えちごじし)とは、新潟県新潟市南区(旧西蒲原郡月潟村)を発祥とする郷土芸能である角兵衛獅子を題材とした地歌、長唄、常磐津、歌謡曲の楽曲。または日本舞踊の演目。

概略としては、六斎念仏の演目の一つとしての越後獅子。長唄を元になっている。嵯峨野六斎念仏保存会(京都市)がある。

嘉永年間以前から上方や江戸の市中に流行したらしく、これを題材として、まず天明の頃、大坂の勾当・峰崎勾当により手事物の地歌曲『越後獅子』が作曲された。

同曲は器楽性にすぐれ、三味線の技巧が高度に追求された楽曲。これを元に江戸の9代目杵屋六左衛門が文化8年(1811年)、七変化舞踊『遅櫻手爾葉七文字』(おそざくら てにはの ななもじ)の伴奏曲の一つとして長唄に作曲し、3代目中村歌右衛門により中村座で初演された。

又、常磐津や清元に影響を与えている。

越後獅子



⑨邯鄲(かんとん)

能曲目解説の邯鄲(かんとん)は、后妃たちの声と聞こえたのは松風の音、光輝く宮殿と見えたのは宿屋の風景…。迷える青年の前に現れた、夢と現実とが交錯する世界。

- ・作者 未詳 観世元雅、あるいは金春禅竹か
- ・場所 中国 邯鄲の里 (現在の中国 河北省南部)
- ・季節 不定
- ・分類 四番組物 唐物

能の歴史からは、能楽以前奈良時代、大陸から渡ってきた舞楽や伎楽など様々な芸能の中に 散楽(さんかく)がありました。散楽は現在の大道芸のような、雑芸(手品や軽業、歌、演劇、舞踊など、種々雑多な芸)を主とするものでした。

この散楽が、日本古来の滑稽な演技「俳優わざおぎ」と習合して、猿楽(のちの能)へと発展していく母胎となりました。「散楽」が音便で「さるかく」「さるごう」などと訛り、滑稽な要素も手伝って「猿楽」という字を当てるようになりました。平安時代、こうして生まれた猿楽は、秀句(ダジャレなど)・物まね・寸劇などの滑稽な演技を主とする芸能でした。これが、現在の狂言へとつながっていきます。

鎌倉時代、猿楽が、滑稽な演技だけでなく、ストーリー性のある演劇的な演目をも上演するようになりました。これが、現在の能へとつながっていくこととなります。

また、これと並行して、大寺院の法会のさいの魔除けや招福の芸能をも担うようになり、これが〈翁〉のもととなりました。この芸は、神聖な演技として非常に重視されていました。

一方で、この頃、もとは田植えや稲刈りなど農事に関連した芸能から発達した 田楽でんがくも演劇を上演するようになっており、「猿楽の能」「田楽の能」が併存していました。

邯鄲師という表現があり、

邯鄲とは古くは、宿泊して目覚めたら就寝中に盗難の被害にあっていたという状況を指す。また宿泊施設で宿泊客の就寝中に盗みを働く者を邯鄲師(かんとんし)といい泥棒の一種であり、また枕探しとも言う。

古くから日本では宿屋(旅館)の客室に鍵はなく、また相部屋も多かった。そして習慣として枕の下に金品を隠すことが多く、泥棒も安易に盗みを働くことができた。ゆえにそれを専門とする者を「枕探し」といったのであるが、湯につかり、ご馳走を食べ極楽気分です(とこ)に就いて目覚めたら不幸のどん底に落とされるという体験と正式な題名である「邯鄲の枕」の枕を掛けて邯鄲にあったといい、それを行う者を邯鄲師といった。

能『邯鄲』は、『邯鄲の枕』の故事を元に作られた能の演目である。しかし

道士・呂翁にあたる役が、宿屋の女主人であり、夢の内容も『枕中記』とは異なり、『太平記』巻25などに見えるような日本に入ってから変化した『邯鄲の枕』の系譜上に位置づけられると言えよう。舞台上に設えられた簡素な「宮」が、最初は宿屋の寝台を表すが、盧生が舞台を一巡すると今度は宮殿の玉座を表したりと、能舞台の特性を上手く利用した佳作である。

尚、盧生の性格や描写から憂いを持つ気品ある男の表情を象った「邯鄲男」と呼ばれる能面が存在し、能『邯鄲』の盧生役のほか、能『高砂』の住吉明神などの若い男神の役でも使用される。

芥川龍之介は能『邯鄲』をモチーフにして『黄粱夢』という作品を書いた。また三島由紀夫は『近代能楽集』の中に能『邯鄲』を現代風の戯曲に翻案した作品を書いている。また古井由吉も『邯鄲の夢』をモチーフに『邯鄲の』という作品を書いている。

能『邯鄲』



曲芸「邯鄲夢の枕」とは、軽業師や曲芸師の技の一種。演芸場や見世物小屋などで見られた。「邯鄲は夢の手枕」、「邯鄲の夢」や「邯鄲の手枕」などと呼ばれ、ただ単に邯鄲ともいわれた。

涅槃仏のように肘を突いて手を頭に添え横臥体勢を取り、この状態のまま空中浮遊をするという技である。今は観ることはできないが夏目漱石の『吾輩は猫である』や上方落語の『軽業』の一節に描かれている。(現在この技を伝承する者がいるのかは定かでない)そして手枕をすることが、この曲芸の種の一部であり、枕と寝る姿勢をとることや軽業師の他の芸と比べると軽業より手品に近いこともこの技の命名に一役かっている。

他にも、邯鄲という中国、河北省南部の都市。綿花・落花生の集散地がある。古来、山東・山西を結ぶ交通の要衝に当たり交易が盛ん。戦国時代には趙(ちよう)の国都。能の「邯鄲」に取材した常磐津(ときわす)・長唄・一中(いつちゆう)・河東(かとう)・地歌・箏曲(そうきよく)の曲名がある。。

⑨二つどんどん(佐賀の春)

戦国時代末期、佐賀には、大阪城につぐ規模の大きな城がありました。

豊臣秀吉の朝鮮出兵の起点として築かれた名護屋城です。かつて天守閣が建っていた場所から、初冬には遠く対馬を望むことができます。「名護屋城跡」には往時を物語る石垣などが残り、春になると400本の桜が花を咲かせます。儂美しく咲き満ちる桜。太閤の夢のあとに想いを馳せると、桜はいつそう趣深く心に迫ります。そして、今も残る城の外壁沿いに咲くソメイヨシノが楽しめます。

- a.物を続けざまに強く打ったり大きく鳴らしたりする音を表す語。「扉を乱暴にどんどん(と)たたく」「花火がどんどんあがる」
- b.物事が勢いよく進行するさま。また、物事をためらわないでするさま。「仕事がどんどんはかどる」「遠慮しないでどんどん相談に来てください」
- c.歌舞伎囃子の一つ。ふつう大太鼓を太撥で「どんどんどん」と三つずつを一句切に幾度も続けて打つ。多く捕物の場に用いる。三つ太鼓。
- d.物事が勢いよくとどまることなく進むさま、また、ためらわないで事を進めるさまを表わす語。

⑩開花(かいかい)

- a.草木の花が咲くこと。「梅がいつせいに開花する」
- b.物事が盛んになること。また、成果が現れること。「市民芸術の開花」「日ごろの努力が開花する」
- c.物事が盛んになること。「町人文化が一する」
- d.成果となって現れること。「実力が一した」
- e.物事が盛んになること。女子が女として成熟すること。また、努力などの結果が現われること。物事が成就すること

⑪桜揃いⅠ ⑫桜揃いⅡ

桜は穀物の神が宿るとも、稲作神事に関連していたともされ、農業にとり昔から非常に大切なものであった。

また、桜の開花は、他の自然現象と並び、農業開始の指標とされた場合もあり、各地に「田植え桜」や「種まき桜」と呼ばれる木がある(あった)。これは桜の場合も多いが、「桜」と名がついていても桜以外の木の場合もある。

「万葉集」には色々な植物が登場するが、桜もその一つである。

しかし、中国文化の影響が強かった奈良時代は和歌などで単に「花」といえば梅を指していた。

万葉集においては梅の歌118首に対し桜の歌は44首に過ぎなかった。その後平安時代に国風文化が育つに連れて徐々に桜の人气が高まり、「花」とは桜を指すようになる。

「サクラ」の語源については以下の説がよく知られる:

春に里にやってくる稲(サ)の神が憑依する座(クラ)である。

これは天つ神のニギと木花咲耶姫の婚姻の神話によるものが出どころ。

「咲く」に複数の意味する「ら」を加えたものとされ、元来は花の密生する植物全体を指した。

富士の頂から、花の種をまいて花を咲かせたとされる、「コノハナノサクヤビメ(木花之開耶姫)」の「さくや」とったという意もある。



サクラを意味する漢字『櫻』は元はユスラウメを意味する文字だった。

「櫻」の字は「首飾りをつけた女性、もしくは首飾りそのもの」を意味する「嬰」に木偏を付けたものであり、ユスラウメの実が実っている様子を指した漢字である。

日本にユスラウメが入ってきたのは江戸時代後期頃のため、日本では「櫻」の字はサクラに転用された。

桜は春の象徴、花の代名詞として和歌、俳句をはじめ文学全般において非常によく使われており、現代でも多くの音楽、文化作品が生み出されている。猿楽に「桜揃い」という表現がある、

⑫銀囃子(祇園囃子)

曳山1本で帰るときは、銀ばやし。全体的場合は、戻り囃子を奏でる。祭囃子の一つで、京都八坂神社の祇園会の際に、山鉦(やまぼこ)の上などで、笛・太鼓・鉦(かね)ではやされるもの。

歌舞伎下座音楽で、祇園会の山鉦巡行の囃子の趣になつたもの。「弁天小僧」のつらね、「助六」の股ぐりのくだりなどに使われる。

[祇園祭祇園囃子 祇園囃子]

祇園囃子は室町時代末期に能楽(能・狂言)をヒントに奏でられるようになり、江戸時代に現在のような様式に整えられたと言われています。ちなみに能・狂言はとともに平安時代に起こった猿楽が起源です。

明治維新前までは猿楽と言われていたが、明治維新後は能楽と言われるようになりました。祇園囃子は鉦(かね)・笛・太鼓で編成され、親しみを込めて、「コンチキチン」とも言われています。なお祇園囃子は山鉦巡行や宵山などで奏でられます。

⑬ちゃちゃりこ／⑭ちゃちゃりこくずし

チャチャ登り(大三坂)という表現がある。

どういう意味? ってきたところ、地元民の答えは、おじいさんが腰を曲げて登る急な坂の意とのこと。

確かに急だ。真夏でしたので途中までしか上がりませんが、子供たちが、競争のように駆け上がってくさまで下から見下ろして見下ろす函館の風景は、どの季節も素敵だと思うものです。夏は坂を上る風も心地よいです。

函館の元町地区は坂道だらけだが、その中で異彩を放つのがこの坂道。狭く短いのに結構、有名なのだ。

函館市電の走る道から函館山麓へ通じる道には、それぞれ由緒のありそうな名がついている。護国坂、南部坂、八幡坂、二十間坂、基坂などなど。そのなかで細いチャチな坂なのに、この坂だけは「チャチャ登り」という堂々たる名がついている。

「チャチャ」とは「おじいさんのこと」、急な坂を上る人がおじいさんのように腰を曲げて上るので、こんな名前になったとか。しかし現地に行っても、大して特徴はない。どうして道標まで立っているのかと思うが、まあ、だまされたと思って上まであがってみたら、アジサイの花が迎えてくれた。それに、坂の途中では、ロシア正教会の姿を横から見られるのが良い。

ちゃ-ちゃ【茶茶】の解説

- 他人の話に割り込んで言う、ひやかしや冗談。「まじめな相談に茶茶が入る」
- 茶のこと。
- 「もしお入りなされ。一上がってお出(いで)んかいな」〈滑・膝栗毛・六〉
- ある事がすばやく行われるさま。さっと。

富山の方言の中でも最も有名である「～ちゃ」。語尾に付けて使う言葉ですが、マンガの「うる星やつら」のキャラクター「ラムちゃん」を思わせる方言で、ラムちゃんのかわいさもありがたい印象が強いです。

実際の富山弁ではラムちゃんが使う「～だっちゃ」とは多少イントネーションが違ってきます。富山弁で使用する時は、標準語で「～です」「～だね」と言う時の代わりに使しましょう。

若い人たちの中で「～ちゃ」を使う人は少なく、親世代から上の人たちに多く使われる言葉ですが、大人の人たちと会話する時や富山弁同士で会話する時にわざと取り入れることがあります。「じゃまないちゃ」は「大丈夫」という意味です。

個人的意見としては、「ちゃっちゃ」とも「ちゃっちゃか」とどちらも共通語だとは思っているのだが、存外「ちゃっちゃ」とは方言枠に入れられてる気配がしなくもなく、まあそれならという前提で話しを進めると。遠州弁的における「ちゃっちゃ」と「ちゃっちゃか」はどう違うのかというのを考えてみる。

「ちゃっちゃ」と「ちゃっちゃか」は、例として「ほら、ちゃっちゃか動く。」というのは、「ほら、機敏に動け。」とかいった急かせる物言いであろう。状況としては前から手を引っ張る感じであろうか「ついてこいよ」とか「みんなに合わせろ」みたいな。他の言葉に置き換えるとしたら「はきはき」・「はしはし」・「きびきび」といったものであろうか。

それに対して「ちゃっちゃと動いて。」というのは「とっとと動け。」といった起動・始動を督促している事が多い物言いである。状況としては背中を押してる(もしくは蹴ってる)感じが強い。「とっとと」・「そそくさ」・「もさもさしない」・「さっさと」といった言葉に近いものであろうか。なお、機敏にという使い方もする事があるので使い方によっては「ちゃっちゃか」との違いが無い場合もある。

「いつまでごろごろしてるだあ。ちゃっちゃと仕事に就けやあ。」この場合「ちゃっちゃか」には置き換えられない。「ちゃっちゃかに」としても無理っぽい。「ちゃっちゃかと」なら辛うじてありっぽい。

「いつまでごろごろしてるだあ。ちゃっちゃか持ち場について仕事に就けやあ。」ということならありである。

「いつまでごろごろしてるだあ。ちゃっちゃと仕事しろやあ。」こちらも「ちゃっちゃか」にすると違和感がある。

「ちんたらしてんじゃねえよ。ちゃっちゃか仕事しろやあ。」・「いつまでごろごろしてるだあ。ちゃっちゃか仕事しんと終われねえぞ。」とかならありである。

上記の例文に於いて「ちゃっちゃか」を「ちゃっちゃと」に置き換える事はどれも可能である。「ちゃっちゃと」を「ちゃっちゃか」に単純に置き換える事はできない事が多い。

このように「ちゃっちゃか」と較べると「ちゃっちゃと」は使用範囲が広く、大抵「ちゃっちゃと」で済ませられるので遠州では「ちゃっちゃか」はあまり使わないという傾向があるのかもしれない。

⑮見渡せば

内川の橋を渡る時の橋の上で奏でる。

a. 遠くまで見る。「－・すかざりの大草原」「人目もなくはるばると－・されて／源氏 夕顔」

b. 広く全体を見る。「仕事の流れ全体を－・す」

c. 広く全体を見渡すことを意味する表現。

d. 見つめること、あるいは何もせずに様子を見ていることなどを意味する表現。

⑯おっぴきだいさん

【だいさん【代参】とは、本人の代わりに神社・仏閣へ参詣すること。

⑰チエンチコ

祝儀をもらった家の前で御礼の踊りを奉斎(神仏をつつしんで祀ること)する

⑱弥栄(いやさかえ／イヤサー)

ますます栄えること。「街・地域の国の弥栄を祈る」、繁栄を祈って叫ぶ声。万歳である。

街角を曲がる時演奏する。弥栄、彌榮(いやさか、いやさかえ、やさかえ、やさか、やえい)とは、主に一層、栄えるという意味の単語。また、「万歳」に意味が近く、めでたい意味で使われることもある[1]。

一般的な場合には「やさかえる」と読むが、祝詞では「いやさかえ」が本来の正式な読みである。また神事ではない祝辞の場合には「いやさか」でも間違いではない。「い」は付け語と思われる。

この「イヤサー」とは、「弥栄・いやさか」と書く「ますます栄える」という意味からきているようで威勢よく言えば言うほど「縁起がいい」とされているかけ声だったので。

弥は、あまねし。ひろくゆきわたる。「弥天」「弥漫」②時を経る。ひきつづく。ひさしい。わたる。「弥久」「弥月」③つくろう。とじつくろう。「弥縫」④おさめる。やめる。⑤いよいよ。ますます。という意味があります。

⑱宮づくし

明治後期から昭和時代にかけて、全国で歌われていた手まり歌・お手玉歌のひとつである。曲は明治時代に日本軍隊の指導のために来日したフランス人が作曲した軍歌「抜刀隊」のメロディーを借用したものであるが、リズムは手鞠歌によく見られるピョンコ節になっており、メロディーも歌いやすいように変えられていることがある。

歌詞は、口承による童歌のため、作詞者は未詳で、また、歌詞にいろいろなパターンがある。一般に唄われていたものは、20行からなり、前半は数え歌形式で、この歌では、御利益のありそうな神社仏閣尽くしになっている。後の10行は打って変わって、徳富蘆花の小説「不如帰」をモチーフにしている。本来は10行目までで終わりにになっていたのが、1908年(明治41年)前後から「不如帰」が劇として各地で上演されることが多くなったのを受け、舞台を鑑賞した年かさの女兒が、後を付け足したものと思われる。」

『一番はじめは一の宮』は、明治時代から歌い継がれてきた手まり歌・お手玉歌・わらべうた。軍歌「抜刀隊」のメロディーが転用されている。

わらべうた『一かけ二かけて』も『一番はじめは一の宮』と同じメロディーで歌われるが、両曲の関係は不明。

信長貴富編曲による合唱曲『一番はじめは』としても歌われており、同氏による合唱組曲「7つの子ども歌」の一番最初の曲として所収されている。

代表的な歌詞の一例

信長貴富編曲による合唱曲	小説「不如帰」	
一番はじめは一の宮 二は日光東照宮 三は佐倉の宗五郎(そうごろう) 四は信濃の善光寺 五つ出雲の大社(おおやしろ) 六つ村々鎮守様 七つ成田の不動様 八つ八幡の八幡宮 九つ高野の弘法さん 十は東京招魂社(注:現在の靖国神社)	これだけ心願かけたなら 浪子の病も治るだろう ごうごうごうと鳴る汽車は 武男と浪子の別列車 二度と逢えない汽車の窓 鳴いて血を吐くほととぎす	武男と浪子って誰? 小説「不如帰」のないようであり、「一番はじめは一の宮」の後半の歌詞では、前半の寺社仏閣に関する流れとはまったく異なり、武男(たけお)と浪子(なみこ)という二人の人物が登場する。

この二人は、明治・大正時代の小説家・徳富蘆花(とくとみ ろか/1868-1927)の小説「不如帰」(ふじよき/ほととぎす)に登場する人物。片岡浪子は海軍少尉・川島武男と結婚するが、肺結核を患っていたため、夫が遠洋航海中に姑により離縁されてしまい、悲嘆のうちに血を吐いて亡くなってしまふ。

同小説は明治31年(1898年)から翌年まで国民新聞に掲載され、のちに出版されてベストセラーとなった。戦前は盛んに映画化されたほか、現代ではテレビドラマや漫画化もされている。

手合せ遊び実演『いちかけにかけて』歌詞の一例

一かけ 二かけて 三かけて 四かけて 五かけて 橋をかけ 橋の欄干 手を腰に はるか彼方を 眺むれば 十七八の 姉さんが 花と線香を 手に持って ももし姉さん どこ行くの	私は九州 鹿児島の 西郷隆盛 娘です 明治十年の 戦役に 切腹なされた 父上の お墓詣りに 参ります お墓の前で 手を合わせ 南無阿弥陀仏と 拝みます お墓の前には 幽霊が ふうわりふうわりと ジャンケンポン
---	--

この中で佐倉の宗五郎(そうごろう)というのがある何かと調べてみたら、佐倉惣五郎という人物を知りました。

佐倉惣五郎(本名:木内惣五郎)は藩主(堀田家)厳しい年貢の取り立てを佐倉を代表して将軍に直訴したそうです。

将軍に直訴したため藩主の取立ては改められたが惣五郎夫妻と男子は死罪となったそうです。

(将軍に直訴したとなれば間を飛ばされた中間管理職の立場もあるため直訴した人も死罪になったのでしょうか?)

この話が戸時代中期以降、『地蔵堂通夜物語』や『東山桜荘子』などの物語や芝居に取り上げられ彼は義民として知られるようになったそうです。忠臣蔵と似てますね。京成の宗吾参堂駅近くの東勝寺(成田市)-惣五郎の霊を祀る堂があり、宗吾霊堂と呼ばれています。

⑳戻り囃子

戻り囃子は、誠に勇壮で奈呉の浦に望む放生津の曳山に最も調和する曲である。

8. 放生津について

(1)放生津八幡宮

放生津八幡宮は、天平18年(746年)越中国司大伴家持が、豊前国宇佐八幡神を勧請され、奈呉八幡宮として創建されました。創建以来、連綿と放生会(ほうじょうえ)が営まれてきたと伝えられています。放生会は、鳥や魚を放ち、生類供養を行う神事とされます。古来より、人間は、鳥や魚を生きる糧として食べてきました。

日本人は、生きとし生けるものはすべて神様の命を授かって生きていると考えました。鳥や魚にも神様の御霊が宿っています。

この地域は、古くから漁業で栄えた地域です。放流された魚が、川や海で殖えて豊かな恵みとなって帰ってきてほしいという願いが込められているのかもしれません。

当宮文書には、嘉暦3年(1328)に、奈呉の地名を放生津に改めたという記事があります。当宮の放生会が放生津の地名の由来になったと考えられています。

放生会は、10月2日の例大祭に合わせて行われています。神様の恵みに感謝し、放生の舞が奉納されます。そして、式の終盤で鳥が大空に放たれます。魚は、式後に内川に放流されます。

放生津は、江戸期における加賀藩河北七浦の一つとして北前船が出入りする商港、さらに時代をさかのぼる時代より越中有数の港町として栄えた放生津湊に始まります。放生津の名は今も、奈吾ノ浦に面した町名として残されています。

(2)放生津湊

放生津の名は鎌倉期から見え、奈吾ノ浦の名はそれよりもはるかに古くから呼ばれていました。

庄川の河口東岸に広がる放生津潟。所々に形成された微高地形と海岸線には約5mに達する砂丘があり、そこを伏木から東岩瀬に通じる浜街道が通り、その街道筋に沿って街村の形態をもつ港町が形成されました。

一方、放生津潟に接して広がる低湿地帯は水田に開発され、排水のために縦横に走る水路は「タズル舟」と呼ばれた舟運交通路が発達。それらを後背地にもつ湊である放生津は射水地方における政治経済の中心地として発展します。

現在の放生津小学校は、中世における越中守護所の跡地といわれています。

藩政期には高岡城の建築資材が、能登半島や内陸の五箇山からこの放生津を經由して運ばれました。東西に伸びる浜街道沿いに形成された放生津町の通称名は、東町・中町・奈呉町(西町とも)と称された。

また、四十物町と奈呉町の間には、山王社にちなんで山王町が、奈呉町には恵比寿町が生まれています。

これらの中心である奈呉町・中町・山王町が現在の放生津町であると共に、一部往時の通称名も残されています。

現在の港町付近は始め浜新町と呼ばれ、後に放生津新町の開町によって古新町と改称されます。

港町と放生津町は現在「湊橋」で結ばれていますが、初期には渡し舟が往来し、六渡寺の「大渡し」に対して「小渡し」と呼ばれていました。しかし江戸期に起きた大火によって多くの命が失われた為に、架橋が行われ、長く「お助け橋」と呼ばれていましたが、明治期に湊橋と改称され今に至ります。

江戸期には北前船が数多く出入りする一大商港として賑わった放生津ですが、明治に入って新たに導入が進んだ西洋型汽船は北前船を廃業へと追い込みます。さらに船舶の大型化に呼応して富山県は伏木港の近代化工事を行い、放生津は漁村へと追いやられ表舞台から姿を消しました。

しかし、工場の誘致によって臨海工業地帯化が進むと、今度は伏木港がその限界に直面し、再び放生津潟の近代化計画がスタート。新湊市は再び富山県を代表する海の玄関口へと再び咲きます。

新湊の町並みは内川沿いの風景が知られていますが、残念ながら伝統的な古い家並みは残されていませんでした。かつて長徳寺と呼ばれた在郷町である現在の本町もまた同様で、メインである放生津町から八幡町にかけて旧浜街道沿いに、かろうじて往時を偲ばせる建物が点在して残されていました。

(3)放生津(放生会)・奈呉の由来

「放生会」とは、捕獲した魚や鳥獣を野に放し、殺生を戒める宗教儀式であり仏語であります。仏教の戒律である「殺生戒」を元とし、日本では神仏習合によって神道にも取り入れられた儀式です。

鶴を放す図



源頼朝(1180年/治承4年挙兵)が行なった鶴岡八幡宮の放生会。由比ガ浜で千羽の鶴を放ったと言われる。八幡神は源氏の氏神。

歴史としては、「放生会」は古代インドに起源をもつ行事で中国や日本にも伝えられた。

『金光明最勝王経』長者子流水品には、釈迦仏の前世であった流水(るすい)長者が、大きな池で水が涸渇して死にかけた無数の魚たちを助けて説法をして放生したところ、魚たちは三十三天に転生して流水長者に感謝報恩したという本生譚(ほんしょうたん:仏教でいう前世の物語)が説かれている。

また『梵網経』(ぼんもうきょう:大乘仏教の経典)にもその趣意や因縁が説かれている。

・中国における放生会は、仏教儀式としての形で伝わっている。

「中国天台宗の開祖智顛(ちぎ)が、この流水長者の本生譚(ほんしょうたん:ヒトや動物として生を受けていた前世の物語)によって、漁民が雑魚を捨てている様子を見て憐れみ、自身の持ち物を売っては魚を買い取って放生池に放したことに始まるとされる。

また『列子』(れっし)には「正旦に生を放ちて、恩あるを示す」とあることから、

寺院で行なわれる放生会の基となっている。

列子(れっし)は、中国戦国時代の鄭の圃田(現在の河南省鄭州市中牟県)の哲学者。

日本においては天武天皇5年(677年)8月17日に諸国へ詔を下し放生を行わしめたのが初見であるが、殺生を戒める風はそれ以前にも見られたようで、敏達天皇(びだつてんのう)538年?の7年(578年)に六斎日に殺生禁断を畿内に令したり、推古天皇19年(611年)5月5日に聖徳太子が天皇の遊猟を諫(いさめる)たとの伝えもある。

持統3年(689年)には近畿地方を中心とする数か所に殺生禁断の地が設けられ、定期的に放生会が開かれるようになった。聖武天皇の時代には放生により病を免れ寿命を延ばすとの意義が明確にされた。

現代では収穫祭・感謝祭の意味も含めて春または秋に全国の寺院や、宇佐神宮(大分県宇佐市)を初めとする全国の八幡宮(八幡神社)で催される。特に京都府の石清水八幡宮や福岡県の筥崎宮のもの(筥崎宮では「ほうじょうや」と呼ぶ)は、それぞれ三勅祭、博多三大祭の一つに数えられ多くの観光客を集める祭儀としても知られている。

また、これらの行事にはウナギの取扱業者やフグの調理師などが参加する姿が見られる。

国内の各神社は、それぞれの歴史を持っています。

a.宇佐神宮(大分県宇佐市)

日本における放生会の起源であるとされるが、その内容はいくつかの点で独特である。

正式には陰暦8月15日であるが、現在は体育の日を最終日とする3日間(土曜日から月曜日)に催される。「仲秋祭」という名に改称されているものの、マスコミや観光客に限らず氏子など関係者も「放生会」と呼んでいる。

「放生会」で放されるのは蜷(巻貝)である(通常は演出効果の意味もあり魚や鳥が使われる)。

北九州にある幾つもの神社が神幸に加わり、古宮八幡宮から神体となる銅鏡が奉納されるなど、北部九州の神社が一体となって行なわれる。

b.石清水八幡宮(京都府八幡市)

例年9月15日に石清水祭の中の儀式として執り行われる。

宇佐神宮より八幡神を勧請したのとはほぼ同時期に放生会も伝わり、天曆2年には勅祭として執り行われるようになるなど、京都の年中行事の中でも重要な祭の一つであった。しかし明治期の神仏分離によって禁止され、石清水祭として残るものの、伝統の多くが失われていった。

平成16年(2004年)、「石清水八幡宮放生大会」として有志等の手により137年ぶりに古来からの神仏習合としての儀式が復活し、かつての「放生会」が推測できるような形での祭が行なわれている。

c.筥崎宮(はこざきぐう:福岡市東区箱崎)

読みは「ホウジョウヤ」。例年9月12日から18日に博多三大祭の一つとして盛大に行なわれる。「ナンもカキも放生会」と言われるほど、秋の行事として親しまれている祭である。

d.鶴岡八幡宮(神奈川県鎌倉市)

『吾妻鏡』に文治3年(1187年)8月15日に放生会と流鏝馬(やぶさめ)が行なわれた記録がある。現在では毎年9月の例大祭で、境内の林に鈴虫を放つ「鈴虫放生祭」が行なわれる。

e.その他:放ち亀・放ち鳥等

江戸百景の『深川万年橋』の「放生会」には放ち亀や放ち鳥などの行事が行われる。

「放生会」で亀や魚を逃がすために寺院等に設けられた池を放生池という。

かつては寺社近隣の河川で行われることもあり、亀屋から客が買って川に放した亀を、亀屋が再び捕獲してまた新たな客に売るといった商売が行われていた。

現在の日本では行われていないが、台湾、タイ、インドでは今でも放生用に亀や魚、蛙、貝、鳥などを売る店・業者が存在する。タイ語では人助けを含めて徳を富む行為として「タンブン」と呼ばれる。タイでは放す生き物によりご利益が異なると信じられている。鰻は金運、亀は長寿、小鳥は幸運・幸福などである。

江戸時代の「放生会」は民衆の娯楽としての意味合いが強く、1807年(文化4年)には富岡八幡宮(東京都江東区富岡)の「放生会例大祭」に集まった参拝客の重みで永代橋が崩落するという事故も記録されている。

放生会(魚や鳥を放す儀式(行事)):想像図



また、小林一茶の詠んだ句にも、「放し亀 蚤(ノミ)も序(ついで)に とばす也」は亀の放生を詠んだ句である。

f.放生津八幡宮

社伝によると、746年(天平18年)7月、大友家持が越中国司として赴任し、751年(天平勝宝3年)小納言に昇進、都へ帰るまでの五年間を高岡市伏木の国庁に在任。奈呉浦の勝景を愛し、豊前国宇佐八幡宮(大分県宇佐市)の分霊を勧請して「奈呉八幡宮」とした。

当宮文書には、1328年(嘉暦3年)に、「奈呉の地名を放生津に改めた」という記事があります。当宮の放生会が放生津の地名の由来になったと考えられています。

当時から大祭には放生会が営まれていたことから、1328年(嘉暦三年)地名が放生津と改められた。後、北条時政が再興したと伝えられ、1312年～1317年(正和年間)、放生津城主「名越時有」が社殿を造営、社司(社司:宮司)別当を付し社領八幡田を寄進。

永禄年間、上杉謙信の兵火にかかり焼失したが、放生津城主「神保長職」が再興した。

藩主前田家の崇敬(すいけい)篤かったが、1845年(弘化2年)2月、放生津の大火にかかり社殿、宝物等ことごとく焼失した。

その後、氏子の「大西弥兵衛」等が藩命により社殿を再建。現在の社殿は、1863年(文久3年)七月竣工したものです。

1872年(明治5年)郷社に列し、同三十二年県社に昇格し、1911年(明治44年)現在の放生津八幡宮に改称した。当社の神紋は桐と菊であり、拝殿提灯や神馬像に桐紋と菊紋の合せ紋が付けられている。境内の右手に、境内社が二つあり、火ノ宮社(軒遇突智命)と来名戸社(八衢比古命 八衢比賣命)がある。

築山行事と放生会の神事が毎年「秋の例大祭」に行われ、10月1日の曳山神事に続き例大祭が行われる10月2日には、境内にて古代信仰の形態である築山神事が行なわれる。

放生津の曳山はこの築山神事を移動できるように発展させたものと考えられており、築山の起源はよくわかっていないが、江戸時代初期より行なわれていたことが1721年(享保6年)の「東八幡宮記録」や「築山古老伝記」に記録されている。

また2014年(平成26年)9月には社務所で江戸時代中期の1764年(明和元年)の築山に使用された約2mの表具を施した祝詞の巻物が発見された。88行に渡り祝詞が記されている。

尚、この行事は1982年(昭和57年)1月18日

に富山県の無形民俗文化財に指定されている。また2006年(平成18年)には、「とやまの文化財百選(とやまの祭り百選部門)」にも選定されている。

放生津八幡宮「放生会」



9月30日夕方境内の高い松の木に神霊を海よりお迎えする魂迎式(御魂祭)が行われる。

10月2日の例大祭には境内の高い松の木の西面に、幅7.2m、奥行3.6m、高さ2.7m上下2段の雛壇様式の臨時の築山(祭壇)を設け、下段の四隅には、それぞれ面をつけた仏門守護の四天王、持国天(じこくてん)・增長天(ぞうちょうてん)・広目天(こうもくてん)・多聞天(たもんてん)を配し、上段中央には唐破風屋根の神殿の上に鬼女(狂女)の面に白髪を振り乱し、金欄の内掛けをはおり、御幣を取付けた長い竹竿を持った主神である姥神(オンババともいわれる)を祀る。

築山神事



また毎年「飾人形」といわれる越中にゆかりのある人物人形も飾られ、神霊を松の木より築山に迎え入れ神事が行われる。

社殿ではこの地区の地名の由来となった「放生会」が行われる。尚、築山行事が終わると姥神が暴れるとされる言い伝えにより、築山は大急ぎで解体される。

この「放生会」は2007年(平成19年)に、「とやまの文化財百選(とやまの年中行事百選部門)」に選定されている。

奈呉を解析すると、奈の意味は、「いかん・いかんせん・いかんぞ・なんぞ」という疑問・反語の意味があります。そうすると、「中国の呉・朝鮮方面から波が着てはいかん」となります。

余波(なごり)は、波の立つ原因が去ったあとも残っている波。「台風の余波」で強風の吹きやんだあとでもまだその影響が残っている波である。

放生津は、古くから「寄り回り波」による海岸浸食や高潮被害に悩まされてきた。その波にちなんで「なご」という表現からきているかもしれない。

g. 富山湾の地形と寄り回り波について

富山県の海は、西方に能登半島を控えた袋状のため、北西の季節風が卓越する冬期でも、能登半島が自然の防波堤となり、外海に比べて概して平穏です。しかし、北から北東方向の開口部は、この方向からの高波の侵入が容易であるため、富山県の波浪害の多くは、この方向からの高波によって起こっています。

富山県の波浪害の原因となる高波に、古くから寄り回り波と呼ばれる波があります。低気圧が発達しながら通過した後、風や波が静まり、漁や浜辺での作業を開始しようとする頃に、突如として打ち寄せる波をいいます。

不意をつかれるために被害も大きく、古来より多くの悲惨な記録が残されています。この寄り回り波は、主に北海道西方海上の海域で発生した波浪が、うねりとして富山湾やその周辺の海岸に伝搬してきた高波です。

冬型の気圧配置となり、北海道あるいはその東方海上に非常に発達した低気圧があり、北海道西方海上で強い季節風が長時間続くと、この海域では高波が発生します。この高波がうねりとなって南南西に向かうわけですが、日本海から富山湾の奥にまでのびる海域は1,000m以上の深海域のため、うねりのエネルギーを減衰させることが少なく、その伝搬に格好の条件を備えています

風浪(周期が短い)とは、海で風が吹くと、海面に波が立ち始め、波は吹かれた方へ進んでいきます。この海域の風によって生じる波を「風浪」といいます。個々の波は不規則でとがっており、強い風の場合、しばしば白波が立ちます。発達した波ほど波の高さが大きく、周期と波長も長く、スピードも速くなります。

発達した風浪が風の吹かない領域にまで伝わった波、あるいは風が弱まった場合や風向が急に変化した場合に残された波を「うねり」といいます。

規則的で丸みをおび波の峰も横に長く連なってきます。

沖合では、波はおだやかに見えることがあります。

しかし、海岸付近ではうねりが急激に高くなり、波にさらわれる事故も起こりやすいので注意が必要です。

北海道の西海上や秋田沖で北よりの暴風が吹き、高波(風浪)が発生高波がうねりとして日本海を南へ伝播する「寄り回り波」が海岸に押し寄せる。

寄り回り波

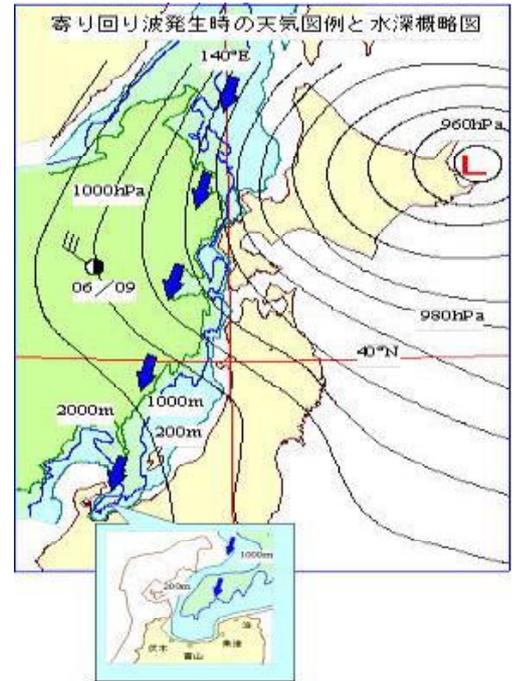
なぜ『寄り回り波』と呼ばれるのか？

寄り回り波とは、うねり性波浪による高波であり、富山県沿岸に従来から多くの被害を生じている。『寄り回り波』と呼ばれる所以は、富山高等専門学校河合雅司教授(河合, 2012)が大変興味深く解説されている。

河合先生は、1864年の古文書から幕末のころに寄り廻り高波という言葉が一般的に使用されていたことや、1935年の「北陸タイムス」の新聞記事で寄り回り波の単語を使用し被害報告がされていたことなどを解説している。

語源に関しては、富山県河川課の瀧内俊朗氏が「富山湾の東部と西部で、大きな波が押し寄せる時間が数時間ずれている。

この時間差攻撃が『寄り回り波』という名前の語源にもなっている」という考えなどを紹介した。また、河合先生ご本人は、「寄る」には波が岸に近づくという意味があり、うねりが沿岸に近づくにつれて方向を変える、つまり「回る」とこと、しかも波高が高くなっていることに気付いた船乗りが、その様子をそのまま「寄り廻り高波」という波の名称にしたのではないかという考えを述べられている。富山湾の海岸で急に水深が浅くなり、波が変形して波が高くなるとしています。



0. 奈呉の浦

「奈呉の浦」(なごのうら)は、富山湾(越中国)と大阪湾(摂津国)の二か所の歌枕があります。

それぞれ万葉の時代から詠まれている。富山の方は大伴家持とその取り巻きメンバーにより秀歌が残されています。

大阪の方は、住吉の海岸のことですが、現在では場所を特定できません。その他「那古の浦」と書いて、四日市の沖合の海を指すことがあり、蜃気楼で有名です。

奈呉の由来としては、名前の由来は、鹿児島で帯のことを「きび」といい、この魚の体に走っている線が帯に見えることから、「きびなご」と付いた。なごは、「小さな魚」という意味だとしています。

「ちめんじゃこ」のような「小さい魚」の呼び名は、1. きびなご(漢字では、黍女子・黍魚子・吉備女子、吉備奈子) いかなご(こうなごとも呼ぶ)は、漢字で書くと「小女子」と書く。

きびなごは、体側に美しい銀色と青の帯をもつ小さな魚で、産卵期である春先に多く獲れたことから、昔は肥料として、またはカツオやタイの一本釣り用の餌として、利用されていました。漢字表現は、それぞれが当て字だと思うが、共通して言えることは、小さな女の子のように、「かわいい小魚」と言う表現では一致します。

また、「那古」の意味でも、「美しい・ゆったりとした・豊かさ」と昔の豊穡の海(放生)の海面に小魚が溢れている様子が目に浮かぶと感じております。

「奈呉の浦」の名前の起源は、定かではないが、私達の先人の思いは、「豊かさ感謝」のような気がします。

また、別方向で「奈呉の意味」は、「奈」は、「からなし」という果樹を意味する漢字です。「からなし」は漢字で「唐梨」と書き、バラ科のカリンの別名とされ、古くはベニリンゴを表す名称としても使われています。

「奈」は本来、「木」と「示」をくっつけてできた「奈(ダイ)」という文字でした。「示」はお祈りなどの神事で使われる文字で、「大(木)」は大地をおおう大きい樹を表すことから、「神事に用いられる果樹」を意味するようになりました。

また、呉市の説明文には、船用材の樽(くれ)の製材を生業する船木郷があったことから「樽(くれ)と呼ばれ「呉」になった!」としています。…

樽(くれ)とは、①東方の日の出る所にあるという神木の名「樽桑」(ふそう:日本歳時記)に用いられる字。②くれ。へぎいた(折ぎ板・杉・檜(ひのき)などを薄く削って作った板。折敷(おしき)・折り箱などを作る。)。また、皮のついたままの丸太を意味します。

「奈」と「呉」を別の字で書くと「奈」・「樽」になるが、「唐梨」(ベニリンゴ)を祭壇にささげ、「樽」(くれ)で造船した舟の安全を祈る「浦」の神社が「奈呉の神」と言うことになる

また、呉市の名の由来は、いくつか由来説があり、その中の一つに、その昔、灰ヶ峰をはじめとする呉市一帯をつつむ連峰を「九嶺(きゅうれい)」と呼び、それがなまって「くれ」になったという説があります。

この「九嶺」というのは、「日佐子山(ひさごやま)」、「八咫鳥山(やたがらすやま)」、「尾島山(おじまやま)」、「石槌山(いしづちやま)」、「大迫山(おおさこやま)」、「傘松山(かさまつやま)」、「大根山(おおねやま)」、「向尾山(むこおやま)」、「灰ヶ峰(はいがみね)」のことです。

この他にも、その昔、灰ヶ峰の中腹から伐りだした、建築や舟用の板材のくれ(樽)が特産品として販売されていて、それが有名になったため時代と共に「くれ」になったという説や、呉周辺に住んでいた古代朝鮮半島からの渡来人を「くれ人」と呼んでいて、それが「くれ」になったという説などもあります。

9. 放生津に関わる古地名調査メモ

(1) まえがき

低湿地帯の中央に放生津潟があり、庄川の乱流と放生津潟に注ぐ「鍛冶川・下条川」は所々に微高地を形成し、海岸線には約5mに達する砂丘がある。庄川河口と放生津潟を結ぶ内川は、古くから湊として利用された。

低湿地帯の殆どが水田に利用され、縦横に水路が通り船による交通路ともなっていた。

新湊町(放生津地区)は、1871年(明治4年)に成立し、2005年(平成17年)合併し射水市となった。

(2) 地名調査

① 放生津

放生津八幡宮「放生会」に由来する地名。

大伴宿禰家持卿が、746年(天平18年)越中国守(越中の長官)として、赴任し「豊前国宇佐八幡大神」を勧請され「奈呉八幡」と称したのが始まりとされている。(宿禰:すくね:武人や行政官を表す称号/卿:きょう:高位の官職)

1772年～1780年(安永年間)に記された「町年寄:松屋(泉田家)の文書(松屋文書)」にも、八幡宮について、「大伴家持」が宇佐八幡神を勧請したこと、729年～749年(天平年間)より連綿と「放生会」が営まれてきたことや、「八幡宮の放生会」が放生津の地名になったこと等が記載されています。

また、1292年(正応5年)「遊行上人縁記絵繪」には、その名がみえます。

「太平記」が語る、鎌倉幕府の滅亡の5日前、放生津城(奈呉城)での「名越時有一族滅亡」を伝える哀史(あいし:悲しい出来事をつづった物語)が残されている。南北朝の動乱で、南朝方の武士を頼って武士を頼って、寺泊から放生津に遷られた(うつる)宗良親王(むねよし)のう:鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての皇族。後醍醐天皇の皇子)。

南朝方に味方した「姫野一族の領地」を取り上げて「石清水八幡宮」寄進した3代将軍「足利義満」。1493年の「明応の政変」で幽閉された10代将軍「足利義材」を越中守護代である「神保長誠」が助け出し放生津を御座所とし「越中公方(くぼう:将軍)」とした。

放生津に小幕府が出現し、「足利義材」を慕って都から公家・武家が集まり、都の文化南北朝時代(1336年から1392年までの57年間を指す)築いた。

足利尊氏が京都で新たに光明天皇(北朝・持明院統)を擁立したのに対抗して、京都を脱出した後醍醐天皇(南朝・大覚寺統)が吉野行宮に遷った時期で、北と南で争った。

「明応の政変」により、将軍は足利義材(義植)から足利義暹(義澄)へと代えられ、以後将軍家は義植流と義澄流に二分された。

1563年(永禄6年)越中平定を目指す「上杉謙信」を放生津で迎え撃ち、一戦を交えた「神保長衡」(じんぼながひら)・椎名泰胤(しいな やすたね)・江波三河守らの武将と一向一揆勢と参戦し、敗北した。

この時、「放生津八幡宮」も焼失し、後に「神保氏」が再建した伝えられる。1576年(天正4年)守山城も平定した「上杉謙信」が、放生津で「十楽の市」(自由市)を開いたと伝えられています。数年後、1581年(天正9年)「神保長住」は、八幡宮領町に商業保護の制札をだしている。

この時、「神保長住」は、織田信長の家来になっていたが、やがて追放され、放生津城は、前田利長公の家来「山崎長鏡」の居城となる。(放生津八幡宮社殿再建150年記念小誌より)

② 法土寺町

町名は、元の「法土寺村」からきており、放生津内川南辺の二の丸地区を含んだ地域で、久々湊・石丸・放生津の入会地字今堀に鎌倉時代末期に栄えた。当時の「時宗」の放生津道場「報土寺」に由来する。

中世期には、報土寺(のちの専念寺)・光正寺(石丸山)が領内にあり、放生津守護所(放生津城)も近かった。「村名名附帳」(前田家文書)によれば、対岸の荒屋村と共に金屋村(牧野)の枝村とあり、正保4年(1647年)前田家古絵図には、村高34石が記入されている。

1714年(正徳4年)に現在地(立町)へ移転し、享保年間(1716年～)山王社(日吉神社)と曼荼羅寺との間に「七間町」が出来、現在の法土寺町の原型が出来たのです。

時宗は、鎌倉時代末期に興った、日本仏教浄土教の一宗派である。開祖は「一遍上人」であり、鎌倉仏教の一つでもある。(総本山は神奈川県藤沢市の清浄光寺:通称遊行寺)

踊り念仏の様子

「一遍上人」も真教上人も教団に所属している僧尼を「時衆」と呼んでおり、時衆が時宗に変化していったのです。

報土とは浄土を意味し、報身仏の住する世界。阿弥陀仏の極楽浄土もその一である。

仏語あり、一切の煩惱(ぼんのう)やけがれを離れた、清浄な国土。仏の住む世界。特に、阿弥陀仏の住む極楽浄土である。

浄土宗は法然によって開かれた仏教の一宗派であり、称名(しょうみやう)念仏(南無阿弥陀仏と口に称える)によって、阿弥陀仏の極楽浄土へ往生することを期す。

踊り念仏と一遍上人の「一遍聖絵」によれば、1279年(弘安2年)一遍上人の一行が善光寺への遊行の際で長野県・佐久地方で踊り念仏を行なう姿が描かれています。

そこに法衣に身を包んだ僧侶や武士たちが輪になり念仏を唱えながら踊る姿が描かれます。

これが一遍上人の一行が踊り念仏を行なった最初とされます。なかでも一遍上人を一躍有名にした「踊り念仏」がありました。

この「踊り念仏」が現在夏踊りとしての「のじた踊り」と考えられます。

当地域の開拓は、「時衆」に負うところが大きく、放生津湊岸の設定や街道の改修なども教団の集団作業によったという(新湊市史)。かつて地内には、報土寺のほか光正寺(現本町2丁目)があった。

江戸の初期(1603年 - 1700年ごろ)に東橋が架けられた結果、東内川沿いの法土寺町の家並みが東に延び「法土寺出町」と呼ばれた。

また、山王社(日吉社)の横を抜けた横通りは、「七間町」と呼ばれ、同町南辺には、三軒町の名もあった。(曼陀羅寺文書)

1792年(寛政4年)立町焼け、1810年(文化7年)法土寺焼け(曳山も焼失)があり、1845年(弘化2年)法土寺町を火元とする「放生津大火」により、放生津八幡宮・東町神明宮・勝光寺・光明寺・本誓地・光山寺などの他民家490余戸を焼失した。この後1866年(慶応2年)に「法土寺町愛宕社」が創建された。

③四十物町

1688年～1704年頃の古文書に四十物町と標記されている。

町名の由来は、海産物の加工製造等に従事する人が多かったことに由来する。

「あいもの」とは、魚の「生物」と「干物」の「間物:あいだの物」のものを意味する。全部で「四十種類」あったので「四十」と書いたとされる。また、乾物は年中(始終→四十)食べられることから「四十」と書いたともいう。

また、東町と山王町の間(あいだのまち)の由来を表現する話も伝わっている。

④紺屋町

町名は、北の山王町から内川を隔てて「向い町」と呼ばれていた。(1624年寛永～1658年 明暦)室町末期1548年(天文17)頃に「紺屋座」があったことに由来する。紺屋(こうや/こんや)とは江戸時代に染め物屋をさした言葉。もしくは、その店の主人を指す。「むらさき屋」とも言う。

もともと、「紺屋」は中世に「紺搔き」と言われた藍染専門の職人を呼んだものだが、非常に繁盛したため、江戸時代には藍染に限らず染物屋全般の代名詞となった。

日本中に点在していたが、1615年には大坂、1721年に江戸、1756年に京都で、それぞれ紺屋仲間が成立する。天保の改革のときには株仲間禁令によって一旦、途絶えたが、1850年ごろの嘉永の再興令によって復活した。

絵心や色彩感覚が必要な職業からか、しばしば紺屋から著名な絵師を輩出した。代表的な絵師として、長谷川等伯、曾我蕭白、亜欧堂田善、小田海僊、鈴木其一、歌川国芳、大橋翠石などが挙げられる。

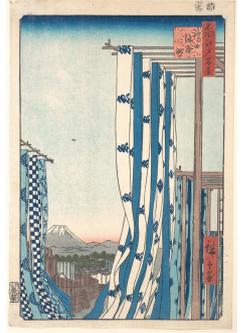


江戸時代の紺屋



関西では染物、洗い張り、湯のしなど一切を引き受ける職業を悉皆屋(しっかいや)と言い、染物屋は紺染屋、茶染屋、紅染屋と分業的な名称で呼んだ。両毛地方では藍染以外の染業者を「合雑紺屋」と俗称した。

江戸時代の染色工は使用する染料の種類によって四つのグループに分かれた。特に染色の困難な紫草を扱う紫師、冬季に染色を行う紅花を扱う紅師、矢車や椽などを扱い茶色系の多彩な中間色を染め上げる茶染師、長年の研鑽によってスクモ玉の発酵を調節しさまざまな布製品を染める藍を扱う紺屋である。



阿波の栽培農家が夏に収穫した蓼藍の葉を発酵させ乾燥させたスクモという原料を作る、これを搗き固めてボール状の塊である「藍玉」として海路で京坂や江戸へ運ぶ。紺屋はこれを藍甕に入れて木灰や石灰、ふすまを加えてその上で水を加えて加熱することによって酵素を活発にし染料を作る。この一連の作業を「藍を建てる」という。

⑤立町・南立町・西立町・獅子絵田町

町名は、南北に延びた町筋であることに由来する。(北陸浜街道に対して縦にある)

1684年(天和4年)から町名が記録されている。

1781年～1789年(天明年間)には、長朔寺の地子地(じしじ:土地を貸す)に「新規町」が出来、「地子新町」・「十銭町」・「西立町」が開かれた。

また、南にも広がり「南立町」が1862年(文久2年)に開かれた。西神楽川は、度々洪水を起こしていたので、直川にて内川へ流すことを願ったが、放生津周辺の村の反対で実現しなかった。

1861年(文久元年)の出水後ようやく西立町南端から直川され、滞水地帯は整地されて1875年(明治8年)東側を「江柱」とし西側を「獅子絵田」と呼んだ。

町の中央に鎮座する「日吉社」は、元は山王社・山王権現と称し「山王町」に鎮座した社であった。1714年(正徳4年)現在地に遷座され明治に入り「日吉社」となる。

⑥三日曾根町・四日曾根町・善光寺町・長徳寺町

「吾妻鏡」(鎌倉時代に成立した日本の歴史書)によると、1239年(延応元年)越中国東条・河口・曾根・八代(現在の氷見)の4箇保地頭らは、九条道家に対して、京都東福寺領地として、京上年貢100石の地頭請所契約でその所職を寄進している。

その後九条家の支配は不安定化し、南北朝期(室町時代1368年-1392年には、幕府と深い関係をもつ「奈良西大寺末善興寺」(現廃寺)が曾根地内に在った。

いろいろな時代変遷があるが、今も「善光寺」としての地名が残っている。

また、「奈良西大寺末善興寺」の尼坊を「長徳寺」と言い、紺屋町の「大楽寺」は元「長徳寺」と称した。長徳寺は、「南長徳寺」に寺地があったと言われている。

「三日曾根村」は、大村で後に「四日曾根村」を分村したと言います。1648年～1652年(慶安年間)には、放生津町寄りに集落が出来「三日曾根出町」と呼ばれた。

同町の東部に「横町」、「横町」と連なる豎(たて:上下方向)の町に「やくわん町」の地名がのこる。もともと、「曾根・曾根(そね)」とは、日本の苗字、地名である。

「ソネ」の語は、河川の氾濫などで伸びた高地を意味し、自然堤防を指した。また、塙(そね:石の多い、やせた土地)と書き、石の多い痩せた土地を指す。このことから、この放生津に流れるの「上牧野川・牧野川・前田川・田町川・大石川・西神楽川」などの内川支川が作り出した地域であり、地名であると思います。

⑦六渡寺町

「六渡寺村」には、「六道寺」という大きなお寺があったことに由来する。

六道(ろくどう)とは、仏教において衆生(人間)がその業の結果として輪廻転生(人が死ぬと新しい生命に生まれ変わる)することの「6種の世界」のことです。

a. 天道(てんどう)

太陽が天空を通過する道をさすが、天体の運行には一定の規則性があるため、転じて天然自然の摂理、天理を意味するようになった。

b. 人間道(にんげんどう)

人間道は人間が住む世界である。四苦八苦に悩まされる苦しみの大きい世界であるが、苦しみが続けばかりではなく楽しみもあるとされる。また、唯一自力で仏教に出会える世界であり、解脱し仏になりうるという救いもある。

c. 修羅道(しゅらどう)

修羅道は阿修羅の住まう世界である。修羅は終始戦い、争うとされる。苦しみや怒りが絶えないが地獄のような場所ではなく、苦しみは自らに帰結(きけつ:最終的に行き着くこと)するところが大きい世界である。

d. 畜生道(ちくしょうどう)

畜生道は牛馬など畜生の世界である。ほとんど本能ばかりで生きており、使役されるがままという点からは自力で仏の教えを得ることの出来ない状態で救いの少ない世界とされる。

e. 餓鬼道(がきどう)

餓鬼道は餓鬼の世界である。餓鬼は腹が膨れた姿の鬼で、食べ物や水を口に入れようとすると火となってしまう餓えと渇きに悩まされる。他人を慮らなかつたために餓鬼になった例がある。

f. 地獄道(じごくどう)

地獄道は罪を償わせるための世界である。地下の世界。

このうち、天道、人間道、修羅道を三善趣(三善道)といい、畜生道、餓鬼道、地獄道を三悪趣(三悪道)という。

小矢部川河口には、六渡寺湊があり、北前船の拠点として栄えた。渡船場は、現在の庄西町の1丁目の「八嶋倉庫付近」に位置し、江戸時代上流の上渡し(能町渡)に対し下渡しと称し、また、「大渡」とも呼んで放生津湊口の小渡しに対称された。

六渡寺湊から小矢部川をさかのぼり、砺波・石動方面へ、千保川・野尻川に通ずる舟運が開かれていた。1609年(慶長14年)前田利家が高岡城を構築した時も、資材運送に利用された。また、能登方面の物資の多くは、六渡寺湊で中継されて内陸部に運ばれました。

⑧山王町

山王社(現日吉社)が鎮座したことに由来する。1581年(天正9年)神保長住は、放生津の八幡領町・同三宮方に制札を発給しており、山王社は、三宮方に含まれたと考えられる。1714年(正徳4年)には、立町へ移ったとしています。

安永年間以前には、曳山を有していたが、破損し、後には鉾を出した。1854年～1860年(安政年間)には、放生津町の「町年寄り役」の「大西家」が放生津八幡宮祭礼で奏でる「太鼓台」を寄進し、後に曳山の列にも加わり「大旗台」と愛唱された。(現存)

⑨中町

奈呉町の東に位置し、東は山王町、浜往来が通る。北は富山湾に面し砂浜が続く。大通り(浜往来、中町通り)の奈呉町境には放生津町の「高札場」が立っていた。大きさは、高さ1丈5尺(約4.5m)／長さ3間5寸(5.15m)／幅6尺(1.8m)(新町万覚帳:近岡文書)であった。高札場南の内川には放生津新町へ至る「中橋」が架けられていた。

1692年(元禄5年)八幡宮祭礼時の曳山を「御神楽山」として再建し、1765年(明和2年)には板車の太鼓山に改良し、更に、1796年(寛永8年)放生津町の町年寄り役で「四十物問屋の松屋武兵衛」が「御神楽式回転山」という特殊な構造をもつ「通称:廻りズッコ(老人)」と言われる曳山を作成した。

⑩奈呉町

町名は「万葉集」にみえる「奈呉の浦」に由来する。町中央には内川をせにして「気比神社・住吉社（現気比住吉神社）が鎮座している。中世当地一帯は、越前敦賀の「気比神宮領」であった。気比宮の門前地は「宮町」、後の「恵比寿町」と称され、西方を「大奈呉」と呼んでいた。

内川の湊口には、「魚場」があり栄えた。

しかし、1821年（文政4年）放生津町大火で逃げ道を失った多くの人達が焼死した。そこで内川の湊口に「長さ32間（57m）」の湊橋が架けられ、浜往来は古新町から湊橋を渡って中町を通ることになった。内川の「中橋」は、1650年（慶安3年）に架けられたが、1688年（貞享5年）に中町の境目に架け替えされた。

放生津八幡宮祭礼時の曳山は、1692（元禄5年）に創建された。

「気比住吉神社」は、1880年（明治13年）住吉社が炎上し、以後、「気比神社」（気比宮）に仮鎮座したが、1928年（昭和3年）両社が合祀（ごうし）され現社名になっている。

住吉社の祭神は、奈呉の浦海中より迎えた神「表筒男命・中筒男命・底筒男命」とされ、気比神社の祭神は、「仲哀天皇」である。気比神社が勧請されたのは、鎌倉時代初期以前（1185年以前）で、奈呉の浦一帯が越前敦賀の気比神宮の神領であったことによる。

鎌倉後期（1192年-1333年）から室町期にかけて（室町時代1338年-1573年）越中では、放生津を中心に「時衆」の発展が目覚ましかったが、時衆がこの越前・越中の気比神社の発展に深く関わっていたことが、気比社の発展の背景にある。

魚場（市場）は、1715年（正徳5年）に、これまでの「特権的40集商人制度の6人間屋」から、新しく生魚魚場改所を設立し、1717年（享保2年）には、仕法書12ヶ条が定められ魚吟味6人によって運営されることになっていった。

魚場は、「魚売り場・算用場・魚改場」からなり、改所では「突棒・槍・長刀・十手・差網・手枷（てかせ）」などを常備していた。また、魚場への出入りは登録制で「魚商鑑札」を受けた。

1715年（享保の頃）の鑑札所有者は、70人～80人で200人程の手合（下買）がいたが、1781年～1789年（天明の頃）には、鑑札所有者は130人と増えていった。

また、四十物商売（塩干物）35人／行商23人を数えた。

1821年（文政4年）3月28日の放生津大火は、瞬間に1150戸を焼き払い、湊口に逃げた住民は橋がなかったため、48名も焼死しました。この地獄絵さながらの光景は加賀藩検視役人の同情を呼び、長さ30間（55m）、幅9.5尺（2.9m）の板橋が架けられ、俗に「おたすけ橋」と呼ぶようになりました。古新町と奈呉町を結ぶ唯一の橋となりました。明治28年「湊橋」と改称しました。

⑪東町

荒屋村の北に位置し、西境は東町大通りに面して鎮座する「神明宮」。北は富山湾で砂浜が続く。町東方に「放生津八幡宮」が鎮座する。放生津町の浜往来は、八幡宮を門前に面し、同社横を通して放生津潟の北、明神新村へ延びていた。

当町の浜は、「東浜」と呼ばれ「東浜納屋」1,673歩余りがあった。

（1歩（日本では伝統的に長さとしては6尺、面積としては6尺平方である。つまり、長さとしては1間、面積としては1坪に等しい。）

また、同地の大松は、放生津沖の「台網敷設」の目印となっていた。

1848年～1854年（嘉永年間）放生津八幡宮北の砂浜べりに放生津台場を築く計画があった。（放生津八幡宮社地絵図：高樹文庫）。

当町在中の御用木材商の「木屋弥兵衛」は、放生津町の初代町年寄役を勤めた。木屋が自前で出した豪華な曳山は、放生津八幡宮祭礼における東町曳山のはしりとなった。曳山は、1718年（享保3年）の創建であった。

⑫古新町

1649年（慶安2年）放生津新町町立以前は、「浜新町・西の浜」と呼ばれていたが1661年～1673年頃から「古新町」と称されるようになった。（新湊市史）湊口に面して潤改所（まあためしよ：税関）が置かれ、住吉社（現観音堂）がその南に鎮座していた。

湊口は、「小渡」と称され、1821年（文政4年）に湊橋が架けられた。

当町の「尾山屋久右衛門」は、有力な魚問屋で、1650年（慶安3年）に放生津八幡宮の祭礼に自前の曳山を仕立てて西放生津を曳き回った。これが放生津町における初めての曳山で、「じ抜け1番」として各曳山の先頭に曳かれるようになった。

⑬新町(字:市町村内を小区分した地名表示)

町名は、「放生津新町」に由来し、単に「新町」とも通称される。

1649年(慶安2年)内川縁の三日曾根村字稲荷の五千歩と四日曾根村字来光寺川田割五千歩と合わせて一万歩を割って成立した町である(野村屋日記)。

1656年(明暦2年)には、地子米皆済状(上納米)や銀納(年貢の代わりに銀上納)をする際、大石川を境に東新町・西新町と区分され、それぞれに二人の組合頭を置き、町肝煎り(世話代表方)が統括した。

1748年(寛延元年)放生津湊の給人米(武士に支給される米)11,600石の出津米割出表によると、3軒の蔵宿を始め、「渡海船の船持・網元・酒・醤油・味噌などの醸造業があり、諸雑貨品を販売する商店が建ち並ぶ、放生津町と共に射水郡の商業の中核をなしていた。(新湊市史)

1844年(天保15年)江戸城本丸焼失に際し、80,000両の上納割当金を受けた加賀藩は、領内の富裕商人から銀2,970貫を借銀したが、「新町の綿屋彦九郎」が150貫目を上納した。1848年～1854年(嘉永期)の発行とされる「見立角力三ヶ国長者鏡」によれば、「放生津新町の綿屋彦九郎」は、「西方関脇」と記載されている(石川県史)。

銀:150貫目 銀一貫は現代で約1,250,000円です。 1,250,000×150貫=1億8750万円 金1両:銀貨60匁(もんめ):75,000円 銀:150貫目:2,500両
--

⑭荒屋町・倉屋敷・神保寺

1663年(寛文3年)には、加賀藩の御蔵5棟、大作食米御蔵1棟の他、御蔵番屋敷2棟が建てられた。後に大作食米御蔵は廃され、内川対岸の放生津城跡に新設された放生津御蔵に合併された。

また、塩問屋松屋定次郎が御塩中出蔵3棟を村北辺に建てた。1778年(安永7年)の家数は58軒、1833年(天保4年)94軒、1859年(安政6年)145軒を数えた。

1835年(天保6年)の放生津の大火で荒屋村及び御塩中出が蔵類焼し、その後整地され跡地に「倉屋敷」が建てられた。1845年(弘化2年)の大火でも荒屋村、放生津東町東部が全焼し、東町光明寺横道の東裏通りかけて、荒屋村の新規町である「今町」ができた。

荒屋の「不動はん」と通称される「曹洞宗西福寺」は、1900年(明治33年)に宮城県仙台市から移ってきた。「鎮守は、荒屋神社、倉屋敷町は、東町神明宮」としている。

町中央を東町西部へ通じる通称した「倉屋敷道」が南北に貫き、この道の北端砂浜沿いに、かつて倉屋敷の鍵を管掌したことにちなむ「倉ノ丁」の地名が残る。

当地の神保寺地内内川縁に、富山商船学校が誘致された。富山商船学校は、全国に5つある商船高専のうち唯一日本海側にあり、百年の歴史の中で、数多くの国際航路の船長、機関長を輩出した。1985年までは全寮制で、女性は入学できなかった。現在は「射水市立新湊中学校」となっている。

1906年(明治39年)7月3日 - 新湊町立新湊甲種商船学校として創立。

1909年(明治42年)4月1日 - 富山県へ移管、富山県立商船学校となる。

1925年(大正14年)4月1日 - 機関科設置

1939年(昭和14年)8月19日 - 文部省へ移管、富山商船学校となる。

2006年(平成18年)7月3日 - 創立100周年を迎える。

2009年(平成21年)10月 - 富山工業高等専門学校と統合し現在は、「富山高等専門学校」(射水キャンパス)となっている。

平成21年10月に富山工業高等専門学校と富山商船高等専門学校の統合・高度化再編によって誕生しました。

工学系4学科、人文社会系1学科、商船系1学科の計6学科及び4専攻から成る専攻科があり、多様な教育研究分野を有していることが大きな特徴です。

「創意・創造」、「自主・自律」、「共存・共生」を教育理念に掲げ、分野間の連携と2キャンパス間の距離を超えた融合を図って、教育・研究・地域貢献活動を行っています。

本郷キャンパスと射水キャンパスの2キャンパスを有する統合・高度化再編校です。

全国51の国立高専のうち4校しかない統合・高度化再編校の1つである本校では、単に業務を的確に行うのみならず、柔軟性と実行力をもって他の教職員と協同して、より質の高い教育・研究支援や地域貢献を推進していく力となる職員の育成を目指しています。

⑮放生津城・二の丸・二の丸本町

名越流北条氏(なごえりゅうほうじょうし)は、鎌倉時代の北条氏の一族。鎌倉幕府2代執権・北条義時の次男・北条朝時を祖とする。名越の地(鎌倉)にあった祖父・北条時政の邸を継承した事により名越を称し、母方の比企氏(ひきし)の地盤を継いで代々北陸や九州の国々の守護を務めた。

鎌倉幕府の滅亡に繋がる1333年(元弘3年)「元弘の乱」では、名越流最後の当主・北条高家が六波羅探題救援した。(六波羅探題:ろくはらたんだいは、鎌倉幕府の職名の一つ)

承久3年(1221年)の承久の乱ののち、幕府がそれまでの京都守護を改組し京都六波羅の北と南に設置した出先機関。探題と呼ばれた初見が鎌倉末期であり、それまでは単に六波羅と呼ばれていた。

その後、足利高氏と共に上洛し、後醍醐天皇方と戦って討ち死にした。

越中守護であった名越時有(北条時有)は越中守護所(放生津城)で戦ったが反対派の御家人にに囲まれて敗れた(この様子は『太平記』にも悲話として伝わっている。)反幕府側の御家人に囲まれて落城する際の光景は『太平記』に記述されるものとなった。

鎌倉幕府の越中国守護所として、正応3年(1290年)に執権北条氏の命を受けて北陸道の守護職として越中国に赴任した名越時有(北条時有)がこの地に城を築いています。

それまでの放生津城付近には、鎌倉中期(1222年～1287年)に守護所(行政機関)が置かれ、北条一族で守護職を勤めておりました。

足利義材(よしき) 像

その後、室町期(1336年～)には、畠山氏が守護となると、1443年(嘉吉3年)「神保氏」が、婦負・射水の二郡の「守護代」を勤め、「放生津城」を居城(きよじょう)とした。

1493年(明応2年)足利義材が細川政元によって将軍を廃されると(跡目相続争い)、京都を脱出して、放生津の神保長誠(じんぼ ながのぶ)のもとへ逃れ、同7年まで滞在しました。



この地で「越中公方」として放生津政権を樹立しています。

「越中公方足利義材」のもとへは、公家・大名が出仕し、禅僧、歌人ら多くの文化人も訪れるようになり、これにより放生津は北陸の政治・経済・文化の中心地として栄えています。

この地は海に近く港があり、交通の便も良く、京都から船で移動するにも便利だったことが背景にあるでしょう。

この頃は、神保氏が極めて強勢だったと言えます。そうでなくては将軍がこの地へ逃れてくるとは思えませんので、将軍が越中に逃れてきたのはもう一つ理由があり、神保氏の主君である畠山政長が細川政元に滅ぼされていて、それを恨みに思っている神保氏であれば、快く自分をかくまってくれるであろうという読みがあったのだと思われます。

後に足利義材は将軍職に復帰しますが、管領細川高国と対立して、再び逐電することになり、大永3年(1523年)4月9日(4月7日とも)に阿波撫養(現在の鳴門市)で死去しています。享年58才でした。

戦国時代は、神保慶宗(じんぼ よしむね)が当主となり、1520年(永正17年)神保氏は越中へ侵攻した「長尾為景」(越後国の戦国大名。越後守護代・越中国新河郡分郡守護代。上杉謙信の実父。米沢藩初代藩主・上杉景勝は外孫に当たる。)に敗れ、富山の新庄で戦死した。

「放生津城」も長尾軍の攻撃で落城し、焼失してしまいます。

このため、神保氏は一時衰退するものの、神保慶宗の子、長職が神保氏を再興して1543年(天文12年)には富山城を築城して拠点をここに移しています。

放生津城も神保氏の手によって再建されたと思われます。しかし越中国は、この後は上杉軍と一向一揆勢、さらには織田軍の草刈り場と化していました。

法土寺町曳山

放生津城は、神保氏時代は守山城の支城となっていたと思われていますが、守山城主「神保氏張」(うじはる)は上杉軍が侵攻してくると、これに降り、織田軍が侵攻してくると、佐々成政に降ると、どちらもうまく立ち回っていたので、放生津城も落城の憂き目には遭わなかったのかもしれませんが。

その後、天正9年(1581年)に織田軍の攻撃により落城し、佐々成政が重臣・佐々平左衛門や佐々源六(勝之)、直属の馬廻り衆を入れて守っていた。(越中 放生津城-城郭放浪記)

天正13年(1585年)には佐々成政が豊臣秀吉に降伏して、越中国は前田氏の領地となり放生津城も前田氏の持ち城となります。

1585年(天正13年)「羽柴秀吉」による佐々成政攻めに際し、前田氏の武将「奥村永福」が能登の末森城(押水町)から移って浜往来の押さえとして「放生津城はとても重要な城だ」としています。

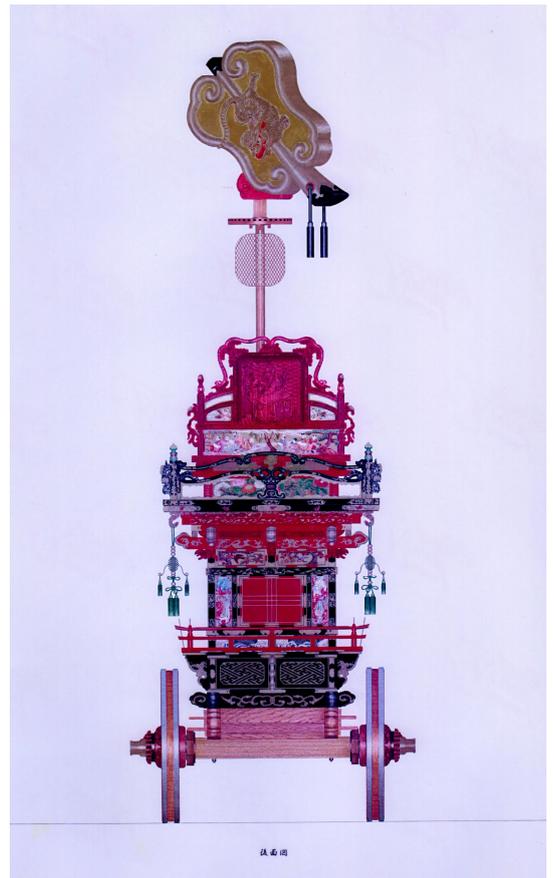
「前田家」治下には中川光重、山崎長鏡が城代を務めたが、元和一国一城令により廃城となったとみられる。しかし、放生津城は江戸時代の初め頃までに廃城となっています。

この時点では、既に戦略的価値がなくなっていたと思われるので城としては廃城になったと思われていますが、この城は海に近いので舟を城の内部にまで引き入れて荷物を搬出入するには便利だったので、城跡は明治時代まで前田家の米蔵屋敷として使われていたようです。

二の丸は、城の本丸の外側を囲む城郭を指すものであり、外敵を防ぐための防御施設である。

城内は、本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸・北ノ丸等と表現され、その周辺には、藩主の住まいや政務の場としての中枢的場所を占め、重臣たちの邸宅があった。

江戸時代の「柴家の放生津城総絵図(部分)」では、「御蔵」を中心に「二の丸割・二の丸後割」の記載がある。



10. 法土寺町曳山各部名称:彫刻・鍔金具

(1) 雷文

「雷紋(らいもん)とは、模様(幾何学模様)の一種である。雷紋は、直線がつぎつぎと曲折していく幾何学的模様で、中国では3千年以上の昔から青銅器陶器、漆器、金工、木彫、建築などに用いられている。

ラーメン器模様



雷紋(らいもん)



稲妻紋(いなづまもん)ともいう。組み合わせたり、重ねたり、電光をなかにはさんだりして用いられることもある。

万物、田畑を潤す雷雨を表す紋様のため、豊作、吉祥の象徴と考えられている。」

(2) 雲文(うんもん)

雲形文様のこと。中国の美術工芸品に広く用例があり、形状により宝雲文、雲雷文、流雲文、靈芝(れいし)雲文などという。単純な曲線で雲を象徴的に表わし、漢代の奔放で変化に富む形、唐代の靈芝の形のように時代によって形に特色が生じた。雲文は日本にも伝来し、古くは正倉院の工芸品をはじめ各種工芸品に使われている。

雲がたなびいている様子を線や色で表したものです。千変万化する雲の形に吉凶の意味を託すことは古くから行われており、文様としても様々な形で表されてきました。

雲形文様



吉祥文様としても多用されています。また、他の文様と合わせて意匠化されていることも多いです。現代も様々な着物の柄や地紋に活躍しています。日本では正倉院宝物中に西方から伝えられた多くの唐草文様がみられる。

中国では唐代に雲唐草文と呼ばれるものが流布した。これは殷・周代以来の?竜(きりゆう)文のS字形モチーフが発展し、漢代には波形のリズムを持つ流雲文となり、さらに六朝時代に西方から植物文様があれば、これが流雲文と複合して雲唐草文となったと考えられる。

(3). 唐草

「唐草文様(からくさもんよう) 唐草文(からくさもん)[2][3]とは、葉や茎、または蔓植物が伸びたり絡んだりした形を図案化した植物文様の、日本での呼称である。唐草と言う植物の呼称ではない。」

「ザイン・アッディーン(Shah Jahan)の銘入りの香炉。銀象嵌の部分に葡萄唐草文(三尖端の葉)が使われる。ペルシア(?), 15世紀(ウォルターズ美術館所蔵)唐草模様は、複数の曲線や渦巻き模様を組み合わせることで、つるが絡み合う様子を表す。

唐草文様(からくさもんよう)



写実的な物も見られるが、図形的に描いたものでは、左右対称の渦巻き模様などに簡略されたり、多種多様の唐草模様が存在する。古代ギリシアの神殿などの遺跡でアカイア式円柱などに見られる草の文様が唐草文様の原型であり、メソポタミアやエジプトから各地に伝播したと考えられている。

アラベスク文様

また、古代エジプトの睡蓮にも起源があるとされ、イスラム美術の一様式におけるアラベスク文様にも関係する。唐草模様は中国の唐王朝支配下のシルクロードを経由して、日本に伝わったとされている。モチーフになった植物としては、スイカズラ(忍冬[にんどう])をかたどった忍冬唐草(にんどうからくさ)や、ブドウを主題とした葡萄唐草、またパルメット意匠を用いた物がある。

ギリシアの壺絵に例が見られる。イスラームでは食器、陶板など釉薬でデザインに描かれたり、建築美術でもモスクの天井、壁面の装飾によく用いられる。アラベスクという語は、狭義では唐草文系の意匠を意味するが、広義では、文字系や幾何学系も含むものである。



唐・朝鮮から日本へ伝来した仏教美術、透かし彫りなどに見られるのが、ハス、ボタン、宝相華(ほうそうげ。想像上の花)を唐草と合わせた、蓮華唐草、牡丹唐草、宝相華唐草である。

ツタをかたどるものは、蔦花文様(ちょうかもんよう)、蔦蔓文様(つたかずらもんよう)などとも呼ばれる。

日本では、奈良時代に渡来した様式から、次第に和様式となった物が好まれるようになり、有職文様に用いられた。

中世を境に、キリ、フジ、松竹梅など身近な種類の植物に変化し、染織、織物、蒔絵などに用いられた。

名物裂(めいぶつぎれ)にも、金蘭唐草文などの例が認められる。

21世紀初頭現在、一般に「唐草模様」として認識されることが多いのは、緑地に白の唐草模様がある風呂敷のそれで、獅子舞のかぶり物としてお馴染みであり、漫画やコントの中では泥棒の小道具としての印象もある。

唐草模様銚金具



図案化が進み、葉に当たる部分などは簡略化され、ほとんど原形を留めていない。

日本の唐草模様にはこれら曲線模様の物か、花文中心の物が多い。蔓草の生命力を発展に結び付けて一種の吉祥文様として日用品などに使用されることが多い。

「唐草」と言いますが、実際には「唐草」という植物はありません。中国から渡来した「蔓草(つるくさ)」がもとになっています。つまり、中国から渡来したという意味から「唐草」と呼ばれました。唐草模様は、四方八方に伸びていく「つるの図柄」が特徴です。この模様は、吉祥文様とされ長寿や延命を象徴し、ひいては子孫繁栄につながるという意味から、大変縁起の良い模様として広く庶民の間に浸透しました。

江戸時代では、庶民は「風呂敷」を常用していました。そこで縁起がいいという意味から、「唐草模様」をあしらった「風呂敷」が流行します。

麻の葉模様とは、正六角形を基本とした幾何学模様です。着物や建具、工芸品でよく見られます。大麻(おおあさ)の葉に似ているという意味から、その名が付けました。

とくに、邪気を払う力があるという意味から、「魔除けの模様」とも呼ばれています。大麻(おおあさ)の葉は、まっすぐに伸びることから子供が健やかに育つようにという意味と、魔よけの意味から麻の葉模様を赤ちゃんの産着に用いたりもされました。

「麻の葉模様」のような完全な形や美しい形には魔除けや厄除けの意味があり、その集合体にはより強い力を持つという意味があります。

(4) 大輪菊

「輪菊の歴史菊はキク科キク属の植物で、学名を「Chrysanthemum(クリサンセマム)」といいます。

日本では一般的に菊、海外では「マム」と呼ばれています。菊は日本皇室の紋章ですが、鎌倉時代に後鳥羽ごとは上皇が用いたのが、その起源であるとされています。

古来より、菊は不老長寿の神秘的な力を持ち、高貴な姿と芳香を発し、「百草王」と呼ばれ、大変貴重なものだったと言われています。

大輪菊



「重陽の節句」は、五節句の一つで、9月9日のこと。旧暦では菊が咲く季節でもあることから「菊の節句」とも呼ばれています。

邪気を払い、長寿を願って菊の花を飾ったり、菊の花びらを浮かべた酒を酌み交わして祝ったりしました。

「また前夜、菊に綿をおいて露を染ませ、身体を拭うなどの週間がありました。」
菊が邪気を払う菊の花は、その高貴な花姿と気高い香りで邪気を払うといわれています。

古くは平安時代から、宮中の厄を払うために菊の花が用いられていたといわれています。

風水でも健康運をアップさせるといわれていて、菊の節句といわれる9月9日に枕カバーに菊の花弁を忍ばせて眠ると、体の中の厄を払ってくれるというおまじないもあるそうです。」

(5)蝶(縁板:下裏)

「チョウは、美しく無害な生き物との感覚があり、その他の虫一般と区別されかねないくらいの評価がある。画題や意匠としてもチョウはよく使われる。花札の図柄に「牡丹に蝶」がある。」

伝承世界各地にチョウが人の死や霊に関連する観念が見られる。キリスト教ではチョウは復活の象徴とされ、ギリシャではチョウは魂や不死の象徴とされる。ピルマ語に至っては〈チョウ〉を表す語 レイツピャーがそのまま〈魂〉という意味で用いられる場合もある。

日本でも栃木県宇都宮市で、盆時期の黒いチョウには仏が乗っているといひ、千葉県でも夜のチョウを仏の使いという。チョウを死霊の化身とみなす地方もあり、立山の追分地蔵堂で「生霊の市」といって、毎年7月15日の夜に多数のチョウが飛ぶという。

蝶の形



(6)「宝珠柱 ほうしゅばしら」・擬宝珠柱

柱に・雷文・雲文／柱頭にザクロ

「宝珠(ほうしゅ)を頭部につけた柱。擬宝珠(ぎぼし)のついた柱。

擬宝珠(ぎぼし、ぎぼうしゅ)は、伝統的な建築物の装飾で橋や神社、寺院の階段、廻縁の高欄(手すり、欄干)の柱の上に設けられている飾りである。

ネギの花に似ていることから「葱台(そうだい)」とも呼ばれる。

擬宝珠が取り付けられるのは親柱(両端および一定の間隔で並ぶ主要な柱)であり、「という。親柱が木製の場合、擬宝珠は銅、青銅などの金属製である場合が多く、雨水などによる木材の腐食を抑える役目もある。親柱が石の場合、擬宝珠も含めて石造りになっている場合もある。

まれにすべて木製のものもある。より古い時代の瓦製のものも見つかっている。紛らわしいものとしては五重塔、五輪塔などの仏塔の先端に飾られるもので、これは擬宝珠ではなく宝珠である。起源起源は諸説あり、一つは仏教における宝珠から来しているとするものである。

宝珠は釈迦の骨壺(舍利壺)の形とも、龍神の頭の中から出てきたという珠のこととも言われ、地蔵菩薩などの仏像が手のひらに乗せているものである。

この宝珠を模した形から模擬の宝珠という意味で擬宝珠とつけられたというもの。もう一つはネギのもつ独特の臭気が魔除けにもなると信じられ、その力にあやかって使われるようになったとする説であり、擬宝珠という用字は葱帽子、葱坊主に後から付けられた当て字であるとするものである。橋や神社など仏教建築以外でも使われることの説明にもなる。

擬宝珠柱(花卉月付き宝珠)・擬宝珠(臍差し:ほぞさし)という形のものもある。古い例としては中国、漢代の画像石や敦煌の壁画にそれらしいものが見られる。

日本での例では平城京跡の二条大橋のものとされる、瓦のものも見つかっている。

擬宝珠(臍差し:ほぞさし)



神社では伊勢神宮正殿の高欄の五色の宝珠型の飾りが原型とされ、当初は朝廷と関わる建造物にのみ存在したらしい。橋の擬宝珠には、その由来が刻まれている場合もある。

銘があり現存するものとしては京都 三条大橋の一部残っているものが古く、天正年間に豊臣秀吉の命で改築した際のものとしてとされる。

同じく京都五条大橋の一部に残るものも近い時代(正保2年)の銘があり、橋に用いられた最初期のものとされる。他に、それを模したのものとして江戸時代初期の盛岡の「上の橋・下の橋」のものがある。

江戸市中で擬宝珠を持っていた橋は、日本橋(東京都中央区)と京橋(東京都中央区)、新橋(東京都港区)のみである[1]。形状、各部名称鎌倉型(奈良矢田寺)先端の宝珠状の部分のみをさして、「擬宝珠」という場合もある。

お椀を伏せたような部分を「覆鉢」、間をつなぐくびれた部分を「欠首」という。さらにその下、覆鉢の下の円筒形部分を「胴」という。擬宝珠は時代により形状が変化しており、一例として高さに比べ直径の大きく頭の宝珠状部分が小さいものを「鎌倉型」という。この宝珠部分の大きさは概ね時代と共に大きくなっている。

宝珠柱



擬宝珠



(7) 蘭亭曲水(らんていきょくすい)

蘭亭とは、中国の浙江(せつこう)省紹興(しょうこう)(ジャオシン)市の蘭渚山麓にあり、東晋の書家王羲之(おうぎし)が文人を集めて宴を開いた際に詠んだ詩を集め、「蘭亭集序」を書いた場所。鷺池の石碑に刻まれた「鷺池」の文字は、王羲之の直筆と言われている。越王勾踐がこの一帯に蘭の花を植えたと言えられることから、「蘭亭」の名称がついたという説もある。

蘭亭曲水の宴

「曲水の宴」は、水の流れのある庭園などでその流れのふちに出席者が座り、流れてくる盃が自分の前を通り過ぎるまでに詩歌を読み、盃の酒を飲んで次へ流し、別堂でその詩歌を披講するという行事である。



流觴(りゅうしょう)などとも称される。略して曲水、曲宴ともいう(『広辞苑』第2版)。

中国においては、古い時代から上巳に水辺で禊を行う風習があり、それが3月3日に禊とともに盃を水に流して宴を行う。

蘭亭曲水の宴 (中国画)

(流觴曲水=盃を曲水に流すようになったとされる。)

中国古代、周公の時代に始まったとも秦の昭襄王の時代に始まったとも伝えられている。

永和9年(353年)3月3日、書聖と称された王羲之が蘭亭で「曲水の宴」を催したが、その際に詠じられた漢詩集の序文章稿が王羲之の書『蘭亭序』である。



「曲水の宴」に参加する者は、瞬時の「表現力・言語力・決断力・知識力」が求められることから、日頃から「学ぶ意識」が必要で在ることを示唆しているようにも感じられます。

私達の近くの「富山市婦中ふるさと自然公園・各願寺ふちゅう曲水の宴」として、4月中旬に実施され、公卿・文人姿の地元民が、庭園の川辺に座し、羽觴に酒盃を浮かべ、流れてくる杯が自分の前を通り過ぎる前に詩歌を作り、詠ずる行事が、平安時代に各願寺で行われています。この宴を古式にのっとり平成の世に復活したものです。

(8) 紅葉に鳥(上山蹴込板)

紅葉・もみじ(紅葉、黄葉)は、主に落葉広葉樹が落葉の前に葉の色が変わる現象のこと。ただし、単に赤変することを紅葉(こうよう)と呼ぶ場合もある。概要一般に落葉樹のものが有名であり、秋に一斉に紅葉する様は観光の対象ともされる。

紅葉・もみじ

カエデ科の数種を特にモミジと呼ぶことが多いが、実際に紅葉が鮮やかな木の代表種である。

また、秋になると草や低木の葉も紅葉し、それらを総称して「草紅葉(くさもみじ)」ということがある。



狭義には、赤色に変わるのを「紅葉(こうよう)」、黄色に変わるのを「黄葉(こうよう、おうよう)」、褐色に変わるのを「褐葉(かつよう)」と呼ぶが、これらを厳密に区別するのが困難な場合も多く、いずれも「紅葉」として扱われることが多い。また、同じ種類の木でも、生育条件や個体差によって、赤くなったり黄色くなったりすることがある。

「日本では、紅葉の季節になると紅葉を見物する行楽、紅葉狩りに出かける人が多い。

紅葉の名所と言われる場所、例えば奥入瀬(青森県)や日光(栃木県)、京都の社寺などは、行楽客であふれる。

紅葉をめぐる習慣は平安の頃から始まったとされ、特に京都市内では多くの落葉樹が植樹されている。

狩りという言葉は「草花を眺めること」の意味をさし、平安時代には実際に紅葉した木の枝を手折り(狩り)、手のひらにのせて鑑賞する、という鑑賞方法があった。

(9)金鶏(上山蹴込板後方)

「天上に住むという想像上の鶏。この鶏が鳴いて暁を知らせると、天下の鶏がこれに応じて鳴くという。転じて、暁に鳴く鶏。あけのとり。

錦鶏とも言われ、学名:Chrysolophus pictus)は、キジ目キジ科に分類される鳥類の一種である。

分布主に中国南西部からミャンマー北部にかけて分布。標高900 - 1100mの山地に棲息し、住環境としてササやシャクナゲの密生した藪のような場所を好む。

形態メス(手前)、オス(奥)黄金キンケイ全長はオスで90cm前後。メスは50 - 60cmほど。オスは赤と金属光沢のある黄色を基調とした派手な色彩をしている。



網目模様が入った褐色の尾羽、毛髪状の金色の冠羽、襟首の日本兜のしころ状を呈する明るい黄色と黒の飾り羽が特徴。全身が明るい黄色を呈する飼養品種があり、俗に「黄金キンケイ」と呼ばれる。メスは他種のキジ類同様褐色に黒っぽい斑模様で比較的地味である。

生態・その他用心深く身を隠すのが巧いため、派手な色彩とは裏腹に、棲息地でも野外で見かけることは困難である。

そのため、野生下での繁殖行動や食性については不明な点があるが、飼育が容易で動物園や個人で飼育される機会が多く、ある程度のデータは判明している。

発情期になるとオスは金属的な声をあげて他のオスを牽制し、同時にメスを呼ぶ。また、メスの前に立ったオスは尾羽を広げる、襟の飾り羽を広げるなどの求愛行動を示してメスの気を惹く。前述の通り飼育が容易であるため、1740年頃から海外に愛玩目的で輸出されていた。原産地では古くから知られ、装飾品や絵画の題材にされていたが、西欧の学者間ではあまりにも豪華な体色から実在が信じられず、長らく想像上の鳥とされていた。

なお、『山海経』の記述によると古代の中国では、この鳥類の羽毛を火伏せの護符として用いていたらしい。

また、中国が明の時代、災いを防ぎ、不老長寿、秦の始皇帝に出されたとされて、その明国の使者に料理を用意する話が、韓国ドラマ『宮廷女官チャングムの誓い』6話に出てくる。明国の皇帝陛下自ら使者に託した。それを使っての料理という話があるので、特権階級の薬膳料理としての使われ方もある模様。

更に日本でもそのキンケイを使った料理、金鶏のクリスピー揚げなる料理がある事から、極一部の高級料理食材としての一面がある。利用」

(10)牡丹(上山蹴込板)

「牡丹につけられている花言葉は「王者の風格」「富貴」「恥じらい」。

原産国の中国では、観賞用の花として牡丹が大人気。唐代の詩人・白居易は牡丹の人気を「街中の人が狂ったようだ」と記しています。

その人気ぶりと大きく鮮やかな花姿から、牡丹は「花王」「花神」とも呼ばれ、中国でもっとも格式の高い花とされました。

そこからつけられたのが「王者の風格」「富貴」の花言葉です。「恥じらい」の由来は諸説ありますが、花の中央にある芯の部分を隠すような花姿が恥じらっているように見えるから、という説がよく知られています。」



「牡丹」は原産国である中国の漢語で、「牡」はオスを意味し、雄しべや雌しべが花弁になることからつけられたとされています。「丹」は赤色の意味。色の種類が豊富な牡丹ですが、赤色が基本とされたことから「丹」がつけられ、「牡」と「丹」を合わせて「牡丹」になったといわれています。一方、名前の由来には別の説も。牡丹の原産国は中国とされていますが実はブータン原産で、「ブータン」が訛り、やがて「ポタン」になったともいわれています。」

「牡丹」というと、「立てば芍薬、座れば牡丹…」という美人を例える言葉が有名ですね。ここに出てくる芍薬(シャクヤク)は同じポタン科ですが、牡丹が「落葉低木」であるのに対しシャクヤクは「多年草」で、違う属植物になります。

ただ、花の見た目は見分けるのが難しいほどそっくり。そのため、英語では「peony」の名でひとくりにされています。

見た目も華やかで花言葉も高貴な牡丹は贈り物にもおすすめの花。

美しい女性を例える「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」の言葉にちなんで、牡丹、芍薬、百合の花をまとめてブーケにして贈るのもすてきですね。」

千鳥唐草文様

(11)千鳥唐草

千鳥とは、ひよこのようにぶっくりとした姿が愛らしい千鳥のこと。

ずいぶん前、京都へ旅行に出かけた際に、千鳥柄のハンカチや靴下、お菓子までもが土産物店に並んでいたのを思い出す。この文様が昔からあるものだと知ったのは最近のことで、キャラクターとまではいかないけれど、それに近いものだと当時は思っていた。

曳山千鳥唐草文様



を込め、それを「絵」や「形」によって鎮めようとしたことが始まりとされています。



昔から親しまれている千鳥は、ゆかたや手拭いなどに多く見かける。なかでも波や水と一緒に描かれた「波千鳥」は、波間を世間にたどって「ともに荒波を乗り越える」という意味から夫婦円満、家内安全などの縁起のよい文様とされている。また「千鳥」と「千取り」の語呂合わせから勝運祈願、目標達成の意匠としても。

のんきに見えて、実は人々の願いがギュッと詰まっていて、かわいらしいだけのキャラクターとはひと味もふた味も違うのだ。

模様の起源は古く、原始の時代に、恐れや不安を祈り

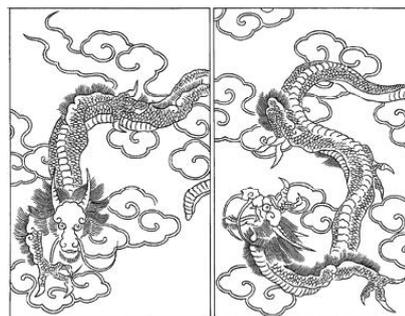
「模様」をあしらった「物」は多いです。「絵」にして表現されたものや、「物」として表現されたものがあります。それぞれについて紹介していきます。

(12)雲龍

雲に乗って昇天する龍。雲の中の竜。また、竜が雲に乗って昇天するさまを描いた絵。

曳山雲龍文様

雲龍文様



(13)木鼻(拳鼻唐草:拳鼻:こぶしばな)

「曳山には、多くの種類の彫刻を作成しますが、木鼻山車を装飾するものは一番たくさんあります。

木鼻(拳鼻唐草:拳鼻こぶしばな)

知多型の山車には30個近くの木鼻が付けられています。木鼻とは元々「木端」で木の端を意味します。

山車彫刻では柱と柱の上部をつなぐ虹梁の端、十文字に組み合わせた突き出た部分に付けられます。

古くは虹梁と一体になっていましたが、現在では別々で虹梁の端に取りつける形の木鼻がほとんどです。

古い一体型の木鼻は塗の物が多く唐草を図案化した文様が彫られ、中には牡丹や波、雲もあります。

こうした木鼻を拳鼻「こぶしばな」とも呼ばれます。現在多く見られる木鼻は唐獅子が彫られ、獅子鼻「ししはな」とか、木鼻獅子「きばなじし」とか呼ばれます。



また、山車によっては猿と言う霊獣が彫られ、猿鼻(ばくばな)とも呼ばれます。

獅子や猿の木鼻は素木の物が多いですが塗の彫刻の山車にも見られます。さて、こうした獅子の木鼻は装飾としての意味もありますが、守りとしての霊的な意味合いもあると思います。

悪いことは外から来る悪霊によってもたらされるという考え方がありました。

魔がさすなんて言葉もありますが、神聖な山車を悪霊から守るため四方八方に取りつけられ睨みをきかせているのが獅子鼻だと思います。神社にある狛犬、獅子と同じ様なものではないでしょうか。

神社の狛犬、獅子ではないですが山車によっては口の開いたものと閉じたものと違った表情の獅子鼻が取り付けられています。阿吽(あうん)と呼ばれる左右対称の表情で力神などにも見られます。一つ一つの獅子の顔の表情を見て回ってみるのも面白いかもしれませんね。」

(14)波と兎

一般に、月と兎、梅と鶯、もみじと鹿、竹と虎、波と千鳥、雲と龍など組み合わせの決まった図柄は、人々に広く好まれて、様々な場面に用いられてきた。「波と兎」もそのひとつである。

「波と兎」で、波は水なので火防・火除けの守りとされ、月の精である兎は子孫繁栄や豊穡をもたらすめでたい瑞獣とされた。

「波と兎」は倉の縵絵(コテエ)や古伊万里・着物・家紋の文様などにも見られる。

この図柄の由縁として、出雲神話の「因幡の白兎」からとの説もあるが、「跳ねたのは鰐鮫(わにざめ)の背の上で、波の上ではなく、「鰐鮫を騙したずるい兎」を「波と兎」の「火防の波」と「慶事の瑞獣たる兎」に当てはめるには無理があり、さらに「月」に直接結びつかない。

「瑞獣(ずいじゅう)とは、古代中国でこの世の動物達の長だと考えられた特別な4つの霊獣に代表される、瑞兆として姿を現すとされる何らかの特異な特徴を持つ動物のこと。」

曳山の「波と兎」

むしろ謡曲の「竹生島(チクブジマ)」の下記の詞に基づいた由縁とする説の方が妥当に思える。「月と兎」にも直結する優雅な由縁である

兎が月の精とされ、不老不死、豊穡など慶事の瑞兆とされていたことと相俟って、江戸の初・中期にかけて、「波と兎」の図柄は庶民の間に広まった。

「波と兎」は、「月と兎」を映したもので、両者は同意ともいえる。

「兎(うさぎ)は多産であることから繁栄の象徴、その威勢よく波を飛び回る姿から飛躍の象徴とも言われています。」

「波と兎」の彫刻



繁栄、飛躍の図柄「波兎」なみうさぎは縁起物の図柄として古くから親しまれていますが、もともとは醍醐天皇の時代を描いた謡曲「竹生島ちくぶしま」に由来しています。

兎は多産であることから繁栄の象徴であり、その威勢よく波を飛び回る姿は飛躍を象徴する縁起物の図柄として、現在でも人気の高いモチーフです。」(いわき絵のぼり吉田)より

「謡曲「竹生島」の一場面 <以下 筆者(福田博通)意識>」

「竹生島も見えたりや緑樹影沈んで魚木に登る気色あり月海上に浮かんで八兎も波を奔(カケ)るか面白の島の景色や」

「(竹生島もまじかに見えてきましたね)(緑の木々が陰影も濃く湖の中にまで映っています…湖水の中を泳いでいる魚がまるで木に登っているように見えますね)(月が湖面に映えて浮かんでいるように見える時には、きっと月の兎も湖面の波の上を駆け跳ねているのでしょうね)(竹生島の景色は趣があつて素晴らしいものですね)★

竹生島「竹生島」は滋賀県琵琶湖の中の島で、弁才天を祀り、江ノ島、巖島(宮島)と共に日本三大弁才天とされる。

謡曲「竹生島」のあらすじ「竹生島参詣に出かけた人物が琵琶湖湖畔で、老人と女の乗った舟に同乗させてもらって、春の湖上を眺めながら竹生島へ着くが、老人と女は人間ではなく、琵琶湖の龍神と竹生島の 弁才天だった。弁才天は神徳を説き、龍神は宝珠を授ける。」

謡曲「竹生島」は広く知られた曲で、長唄、箏曲、常磐津などで庶民の間でも演じられた。上記の詞の情景表現はその秀逸さから好まれ、その情景を軽妙に図案化した「波と兎」が狂言装束の肩衣の図柄ともされた。

兎が月の精とされ、不老不死、豊穡など慶事の瑞兆とされていたことと相俟って、江戸の初・中期にかけて、「波と兎」の図柄は庶民の間に広まった。「波と兎」は、「月と兎」を映したもので、両者は同意ともいえる。

また、「内川に写った月は、水波動けども、月動かず」と感じるのは、私だけではあるまい。

「波と兎」の図



(15)獅子の子落とし

「わが子に厳しい試練を与えて才能をためし、りっぱな人間に育てあげることのたとえ。

獅子は、生まれた子を深い谷へ投げ落とし、生き残ってはい上がってきたものだけを育てるといふ言い伝えによることば。中国から伝わったもので、日本では、歌舞伎舞踊「連獅子」で知られますが、中世にはすでに広まっていた。

ことわざを知る辞典について 情報デジタル大辞泉「獅子の子落とし」の解説獅子の子こ落おとしは、獅子は、子を生むとその子を深い谷に投げ落とし、よじ登って来た強い子だけを育てるといふ言い伝えから》自分の子に苦難の道を歩ませ、その器量を試すことのとえである。

曳山 獅子の子落とし



(16)ザクロに「胡錦鳥」(こきんちょう)

胡錦鳥は、オーストラリア北部から北西部にかけて雨期に南下し、冬季に北上する個体群もいる。

胡錦鳥



「全長12.5-14センチメートル」。幼鳥は頭部の羽衣が灰色で、背の羽衣や翼は黄緑色で、尾羽が非常に短い。オスは頭部の羽衣が主に黒(約75%)だが、赤(25%)やまれに黄色の個体もいる。

中央尾羽が長い。メスは中央尾羽が長くない。生態樹木が点在する乾燥した草原に生息するが、水辺の草原やマングローブ林、低木林に生息することもある。

雨期になると下草が繁茂した草原、スピニフェクス属が生えた森林や低木林に生息する。非繁殖期には大規模な群れを形成することもある。危険を感じると尾を動かし、驚くと茂みの中に隠れる。

食性は雑食で、主にイネ科の種子を食べる。乾季は主にモロコシ属の種子を食べる。雨期になると昆虫も食べる。繁殖形態は卵生。1-4月に樹洞やシロアリの蟻塚に、直接4-8個の卵を産む。抱卵期間は12-13日。雛は孵化後21日で巣立つ。

「分布・生育地西南アジアや中東の原産といわれ、原産地については、トルコあるいはイランから北インドのヒマラヤ山地にいたる西南アジアとする説、南ヨーロッパ原産とする説およびカルタゴなど北アフリカ原産とする説などがある。

ザクロの栽培は、世界各地でトルコから中東にかけては特にポピュラーである。日本における植栽範囲は東北地方南部から沖縄までである。

日当たりが良い場所を好む。増やし方には、挿し木、取り木、種まきがある。若木は、果実がつくまでに10年程度要する場合もある。病虫害には強いがカイガラムシがつくと「スス病」を併発する場合がある。

ざくろの実



伝播新王国時代にエジプトに伝わり、ギリシア時代にはヨーロッパに広く伝わったとされる。

東方への伝来は、前漢の武帝の命を受けた張騫が西域から帰国した際に、パルティアからザクロ(安石榴あるいは塗林)を持ち帰ったとする記述が『証類本草』(1091年-1093年)以降の書物に見られるため、紀元前2世紀の伝来であるとの説があるが、今日では3世紀頃の伝来であると考えられている。

日本には923年(延長元年)に中国から渡来した(9世紀の伝來說、朝鮮半島経由の伝來說もある)

曳山ザクロに「胡錦鳥」



また、古代イランと中国の文化交流を研究したベルトルト・ラウファーは、若榴の中国語読み「zak-lau」に由来するとの説を唱えている。

また、有力な原産地のひとつと考えられるティグリス川およびペルシア湾の東方にそれに平行してザグロス山脈がある。ザクロの呼称は、ザグロス山脈を現地音に近い「石榴」の字で音訳したともいわれている。

観賞用花木として愛でられ、果実が熟して割れる美しさが好まれる。

日本では庭木、盆栽など観賞用に栽培されることが多く、矮性のヒメザクロ(鉢植えにできる)や八重咲きなど多くの栽培品種がある。

ただし、果実が結実するのは一重の花である。江戸時代の園芸書である『花壇地錦抄』などに記載の見られる古典園芸植物のひとつでもある。縁起のよい木として昔から庭に植えられ、熟した果実に多数の赤い種子が入っていることから、子孫繁栄の意味をもち、世界的にも子宝のシンボルとされる。

(17) 紗綾形(サヤガタ)

卍(まんじ)の形をくずしてつづり連ねた模様の名。紗綾の織り模様によく用いられる。紗綾形文様は、卍(万字)という漢字を斜めに崩して連続的に繋げた文様です。そのため紗綾形というよび名のほかに「卍(万字)崩し」や「卍(万字)繋ぎ」と呼ぶこともあります。

文様の由来となった卍という漢字は、寺院のマークにもなっていて、日本の地図を眺めていると、寺院の場所にこのマークが記されています。

このことから想像できるように、卍は仏教と深いつながりがあります。卍は仏教用語で「万」の字の代わりに用いられます。「万」とは「よろず、すべて」という意味合いをもち、宇宙、無限などをあらわします。

また、仏教だけではなく、キリスト教では、卍と十字が組み合わされたマークもあります。そして、キリスト教でも、卍は幸福や力をもたらすものとされているのです。

卍の歴史は大変古く、印度では紀元前8,000年前の地層から、卍が記された遺跡が発掘されています。その当時から、卍は宗教的な意味合いをもつシンボルだったようです。

紗綾形(サヤガタ)の文様



曳山紗綾形(サヤガタ)



(18) 結び唐草

曳山結び唐草



縁起物の結びを構成した唐草模様。

(19) 車輪の菊花弁

「菊花紋章(きくかもんしょう、きつかもんしょう)は、キク科キク属のキク(菊)を図案化した菊紋のうち、特に花の部分を中心に図案化した家紋のことである。

菊花紋(きくかもん、きつかもん)、菊の御紋ともいう。単に菊紋(きくもん)と言う場合は葉、茎、花を組み合わせるか、いずれかを図案化したものも含める。

大日本帝国憲法や日本国憲法の原本を納めた箱の蓋にも刻まれている。」

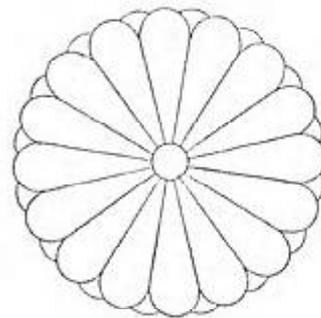
「菊紋のうち、八重菊を図案化した菊紋である十六葉八重表菊は、天皇および皇室を表す紋章である。

俗に菊の御紋とも呼ばれる。親王などの皇族は、この紋の使用が明治2年(1869年)の太政官布告をもって制限され、1926年(大正15年)の皇室儀制令(大正15年皇室令第7号)13条により「十四葉一重裏菊」が皇族の紋章とされた。

伏見宮家など)や、「十四葉一重裏菊」を小さな図案に用いたもの(秩父宮家・三笠宮家・久邇宮家など)となっている。」

各宮家の紋は、この「十四葉一重裏菊」や「十六葉一重裏菊」に独自の図案を加えたもの(有栖川宮家)。

菊花紋章



第二章 紋章及康章
第十二條 天皇天皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃ノ紋章ハ十六葉八重表菊形トシ左ノ様式ニ依ル

曳山菊花紋章



(20) 隅提灯の牡丹と岩の色絵

「牡丹の花は、日本やアジア地域では古くから「花の王様」「百花の王」と称され、なじみ深いお花として扱われてきました。

一輪で存在感があり、あでやかでボリュームある花姿は生け花でも良く利用されています。

日本を代表する歌人と謝野晶子は、牡丹の花を「神秘の花」「熱の花」と呼び、歌をいくつも詠んでいます。原産地の中国では「花神」「花王」という別名を持ち、楊貴妃のシンボルとしても知られています。

その他、多くの皇帝や皇后から愛されてきました。岩牡丹としての構図は、古くから陶器の絵模様として使われています。

(21) 隅紐「花結び」

瓔珞(ようらく)仏像の天蓋、宝冠などに付ける垂れ飾り。」

天蓋(てんがい)とは、天に懸(か)けられた蓋(がい)の意で、仏像や導師の上にかざす装飾的な覆いをいう。

古来からインドでは強い日射しを避けるため、貴人の外出にはつねに傘蓋(さんがい)で覆う習慣があり、これが仏教の荘嚴具(しょうごんぐ)として用いられるに至ったとみられる。」

瓔珞(ようらく)とは、菩薩や密教の仏の装身具、または仏堂・仏壇の荘嚴具のひとつ。古くはインドの貴族の装身具として用いられていたものが、仏教に取り入れられたもので、菩薩以下の仏像に首飾り、胸飾りとしてもちいられている。

瓔珞は、お仏壇を美しく装飾するとともに、魔除けの役割も果たすと言われている仏具です。

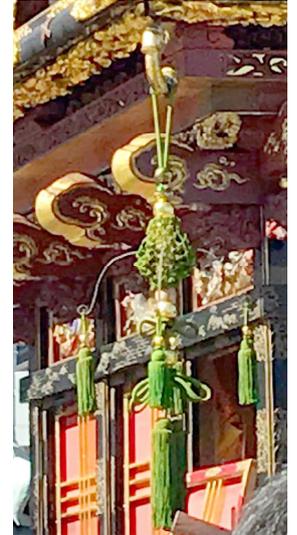
元々は、古代インドの王族たちが手首や頭部、腰などに身に着ける装身具でした。

後に仏教文化に取り入れられ、寺院やお仏壇の荘嚴具となりました。

また、「花むすび」としては、楽器などの飾り紐を美しく結んだ形です。この結びには編む要素も加わって、手工芸的に見事な作品となっているものも多いです。

又、明治時代の婦女子は貴重品を納めるのに、他の人が真似できないよう「花結び」を多様に工夫しました。そんな中から紐結びが文様にもなっています。

曳山 隅紐「花結び」



(22) 彫金の「松・雲・鶴」

「縁起物である松、長寿の例えにも使われる鶴、雲の構図」は、これまでに着物の柄や陶器の図柄として人気がありました。

また、雲の活用例としては、船乗りや漁民たちが空模様を見て天気の変化を予測していました。

曳山彫金の「松・雲・鶴」

富士山が見える駿河(するが)湾沿岸の漁民は、この山にかかる雲の形で天候の変化をよく予知し、カンヌキ雲が出るとナライの風が吹くとか、笠(かさ)雲には十数種もの名前があって、ハナレ笠は日和(ひより)、ヒツ笠は雨、レンズ笠は風雨、ヨコスジ笠は風という具合に、雲の形態的特徴に対応させて天気を予知している。



富山湾では、立山に雲が坊さんの三角襟の法衣のように見えると、漁師たちはホークが立ったといい、大時化(おおしけ)の前兆とみた(『能都(のと)町史』)。

越後(えちご)(新潟県)長岡在では、弥彦(やひこ)山に雲がかかったら翌日は雨、雲がとれたら晴れ。紀伊鬼ヶ城(三重県)付近では、春季に那智(なち)山に雲がかかったら雨が降る(川口孫治郎『自然暦』)などと伝えられている。

このように「放生津奈呉の浦」の状況を形にし、「暮らしの豊かさへの祈りをこめて、無病息災・不老長寿・子孫繁栄を願う」構図でありましょう。

11.法土寺町曳山車輪修理

現在の車輪は、1952年(昭和27年)に新調されたもので、この作は、井波の「久村角平の作」であり、寸法は、径153cm・厚さ18cmであります。2015年(平成27年)10月に「車輪中心部などに割れが発生」し、翌年28年9月に藤岡寺社建築に全面修理を依頼する。

車輪全面修理状況写真報告

	亀裂・割れ状況	車軸中心部～外輪部 作成	車軸中心部～外輪部 作成
車軸中心部			
車軸放射棒			
車軸放射棒			
車軸放射棒			
外輪部			



12. 曳山作成に影響した漢籍

(1) 有象列仙全伝(ゆうしょうれっせんぜんでん)

中国古来の仙人497名の伝記、逸事を厚め、図像を附した本。明の末の刊本と思われるが、図は刻線が細く美しい。

(2) 芥子園画伝(かいしえんがでん)

中国・清代に刊行された彩色版画絵手本。古くからの歴代画論に始まり、山水、花鳥などの技法を解説した絵画論として広く普及した。

「芥子園画傳1集2巻」・「芥子園画傳1集5巻」・「芥子園画傳2集扉」・「芥子園画傳2集竹譜概要全四集」で、内容は絵を描くに当たっての精神、哲学、に始まり、筆や墨や紙の扱い方、色の付け方、そして山水、樹木、岩石、雲、滝、人物、畜獣、建築物、橋梁などの描き方が著名な画家の作品とされた作品を多色版画として引用しながら載せてある。

絵画の教科書、詩画譜として流行した。芥子園画伝は、清代の康熙帝の時代に、発案・審定者である李漁の意向をうけ、娘婿の沈因伯によって出版された絵画技法の教科書である

(3) 儒学書

儒学の解説中国古代の儒家思想を基本にした学問。孔子の唱えた倫理政治規範を体系化し、四書五経の經典を備え、長く中国の学問の中心となった。

自己の倫理的修養による人格育成から最高道徳「仁」への到達を目ざし、礼楽刑政(※れいがけいせい)を講じて経国済民の道を説く。

「礼楽刑政」の意味は以下の通りです。古代中国で国の秩序を保つために必要とされた四つで、礼儀・音楽・刑罰・政令の事。・礼儀・音楽・刑罰・政令は(中国)社会を維持する為に最も重要な要素である。

「礼」は「礼儀」「礼節」、”楽”は「音楽」「娯楽」、”刑”は「刑罰」、”政”は「政令」「法律」となり、古代中国で用いられてきた社会を保つ為に最も重要とされる四つの基本です。

「礼」は礼儀や礼節や節度であり、人々に対して常識や秩序を守る様に求めています。

「楽」は音楽や娯楽で、仕事や礼儀だけでなく時には遊びや余暇で楽しむのも重要として、「刑」は犯罪予防であり罪を犯した者には罰を与える事で国の体制を守ります。

そして政は法律やルールを人々が守る事で社会秩序が保たれるのです。このような仕組みを成り立たせる為に、古代中国ではこれらから一文字を取って「礼楽刑政」として定着を図ったのです。よって、意味はまったく違いますが「土農工商」「風林火山」などと同じ理屈で成り立っている四字熟語となります。

自己の倫理的修養による人格育成から最高道徳「仁」への到達を目ざし、また、礼楽刑政を講じて経国済民の道を説く。のち、朱子学・陽明学として展開。日本には4、5世紀ごろに「論語」が伝来したと伝えられ、日本文化に多大の影響を与えた。

「儒教は、五常(仁・義・礼・智・信)という徳性を拡充することにより五倫(父子・君臣・夫婦・長幼・朋友)関係を維持することを教える。

「仁」は、人を思い遣る事。白川静『孔子伝』によれば、「狩衣姿も凛々しい若者の頼もしさをいう語」。

「説文解字」は「親」に通じると述べている。「論語」の中では、さまざまな説明がなされている。

孔子は仁を最高の徳目としていた。

「義」は、利欲に囚われず、すべきことをすること。

「礼」仁を具体的な行動として、表したもの。もともとは宗教儀礼でのタブーや伝統的な習慣・制度を意味していた。のちに、人間の上下関係で守るべきことを意味するようになった。

「智」は、ただ学問に励むだけでなく道徳的認識判断力であることともされている。

智は『論語』では知と表記され意味としては聡明、明智などの意味がある。

「信」は、言明を違えないこと、真実を告げること、約束を守ること、誠実であること。

この他にも、忠義、孝、悌という教えもある。

「孔子は紀元前552年(551年とも)、魯の国(現在の中国・山東省)に生まれました。

3歳のときに父を亡くした孔子は巫女だった母の仕事を見て育ったこともあり、遊びでも祭器を並べて礼法の真似事をするような礼儀正しい子どもだったと言われています。

孔子



孔子が17歳のときに母も亡くなり、孤児として育ちながら勉学に励みます。

20歳を過ぎたときには魯の役人として、貨物倉庫の出納係を立派に勤め上げ、後に牧場を管理することに。そして30歳を過ぎたときには周の都に行って、勉強に打ち込みます。

その後、孔子は貴族の横暴な政治が横行していた魯の政治を立て直そうと励みますが、あえなく失敗。再び政治の世界に舞い戻る……ということではなく、諸国を遊説して回るようになります。この時に孔子を慕う弟子が続々と現れ、最終的には3,000人も弟子がいたとも言われています。

孔子はそれほど多くの人々の心をつかむ哲学者として、現代にも通用する考えを説き続けたのです。

13. 漆工芸/鍔金具の技法

(1) 堆朱

「堆朱(ついしゅ)は、彫漆の一種である。彫漆とは、素地の表面に漆を塗り重ねて層を作り、文様をレリーフ状に表す技法を指すが、日本では表面が朱であるものを「堆朱」、黒であるものを「堆黒(ついこく)」、黄であるものを「堆黄(ついおう)」と呼ぶ。

中国では、黒漆の層に文様を彫り表したものを「剔黒てきこく」、朱漆の層のものを「剔紅てきこう」といい、中国漆器を代表する技法とされる。通常の漆は硬くて彫刻が困難だが、発展経緯とその継承から技法も様々となる。

堆朱の製作には、まず素地を作成する事から始まり、土台に漆を塗っては乾かす作業を繰り返す。

通常は一番下のベース部分の漆製の板を作成し、ベース部分が完成すると土台を外す。日本では彫る際の事を考えながら様々な色の漆をベースの上に塗り重ねることから、堆朱は非常に時間が掛かる技法とされている。

中国で剔紅「てきこう」と呼ばれ宋以降盛行した。

日本には平安時代末から鎌倉時代初頃に伝来し、室町時代頃本格的に製造が始まった。」

中国から伝わり日本の「本堆朱」は、独自の進化を遂げた。この本堆朱は、「漆をを250回塗り重ねて約3mmの厚さになる」これを彫刻し仕上げていく手法である。

(2) 擬堆黒(朱)と辻丹甫

「高岡漆器は、江戸時代の初めに、加賀藩の藩主前田利長が、現在の富山県高岡市に高岡城を築いた時、武具や筆筥、膳等日常生活品を作らせたのが始まりです。

その後、中国から堆朱(ついしゅ)、堆黒(ついこく)等の技法が伝えられ、多彩な色漆を使って立体感を出していく彫刻塗、鍔絵(さびえ)、螺鈿(らでん)、存星(ぞんせい)等多彩な技術が生み出されました。

高岡漆器が、町人文化の中にしっかりと根つき栄えてきたことは、高岡の祭で使われる絢爛豪華な御車山(みくるまやま)にこれら漆器の技が集められていたことから伺えます。

「特徴長い伝統に培われ、伝えられた技の代表的なものとして、うるみ色の地に玉石を貼り、鍔絵(さびえ)を描く「勇助塗(ゆうすけぬり)」、多彩な色漆を使って立体感を出していく「彫刻塗」、あわびや夜光貝等、虹のような輝きをもった貝殻を使って、山水や花鳥等を表現する「青貝塗」があります。

「辻丹甫」の本名は、「伊右衛門」といい、砺波屋伊右衛門丹楓の出身。1722年(享保七年)に生まれ84歳で没している。

丹甫は、高岡工芸漆器の元祖といわれ、明和年間(1764年～1771年)頃に京都で修業して帰高し、擬堆黒(朱)、存星など唐風の漆器技法を伝えたというが、経歴についての確かな記録はない。

京都は京漆器といわれる蒔絵物や茶道用漆器の名品が多く作られ、工匠もかなりいたようだが堆朱物は少なかったようだ。しかし、明治初年に黒川真頼が発刊した「工芸志料」には享保の頃、京都に堆朱をなす工人も相当いたと記されており、丹甫はこの工人たちの流れを汲むと思われる。

現在、丹甫作といわれている作品は、漆を何回も塗り重ねて彫った堆朱・堆黒ではなく、木地を直に唐堆朱風に彫って下塗りした後に、黒あるいは朱漆を塗り、乾燥後に灰墨様の古味を入れて仕上げられている、擬儀堆朱(黒)である。

擬堆朱は、堆朱に見えるように木地を彫り、その上に堆朱をして仕上げたものです。

擬堆黒も同様の手順で堆黒をしたものです。存星(ぞんせい)は中国の漆塗の一種です。

漆面に針彫で模様を彫り漆を擦りこんで金箔を置いた「鍔金(そうきん)」や「描金(びょうきん、蒔絵)」を用いた技法で、模様の外形を区切り、色漆などで着色したり刻文に色漆を象嵌して研ぎ出したものです。」

「彫刻塗は江戸中期に活躍した名工、辻丹甫の技法を元祖としており木彫、堆朱、堆黒などによる雷文や亀甲の地紋の上に、草花や鳥獣、青海波、牡丹、孔雀などを彫り出したものが多く、立体感と独特の艶があるのが特徴です。

擬堆黒総盆(高岡市立博物館所蔵)



(c)Takaoka Municipal Museum

この技法は19世紀はじめ、板屋小右衛門らに受け継がれ現在、高岡の彫刻漆器は色漆による色彩技法や皆朱塗などによって再現されています。」

もうひとつは、型紙・型材を使って漆鑄型抜き技法で薄肉模様を表現して、これを前述と同様の工程で仕上げた擬堆朱黒や擬堆朱である。以来、高岡では「丹甫塗」という名称で唐風の漆器技法が行われた。

現在でも高岡御車山(通町の高欄や硯屏、木舟町の大黒天、唐子、高欄、硯屏など)で見ることができる。丹甫塗に似た木彫堆朱・擬堆朱は、新潟県の村上木彫堆朱や香川県の玉楮象谷などに見られる。

中でも村上木彫堆朱は、古くからの伝統がそのまま受け継がれ、現在では丹甫に最も近い仕事をしているといえる。一方、現在の京都漆器にはこのような技術は残っていない。

丹甫塗の技術は砺波屋桃造(文化、文政頃の人)、伊勢領屋桃二(天保頃の人)や仏師などによって伝承されたようで、このような土壌が明治後期の彫刻漆器の萌生えに大きく影響したと思われる。

(3) 村上木彫堆朱

村上木彫堆朱は、木地に彫刻をし漆を塗り重ねる漆器です。堆朱には、漆を幾重にも塗り重ねるという意味があります。

堆朱は中国の唐の時代に始まった技法で鎌倉時代に日本(京都)に伝わりました。古くから天然漆の生産地として知られた村上地方へは約600年前京都から寺院建築に來た漆工が伝えたとされています。

その後、歴代藩主がこれを奨励し、江戸詰めの藩士が名工に彫刻を習いそれが藩内に広がり、やがてそれが町方の職人にも伝わったとされています。

堆朱は、艶消しという技法で仕上げられていますので傷が付きにくく丈夫な漆器です。始めは艶がありませんが、使い込むほどに色・光沢が増します。多少傷がついても使ってこそ「良さ」が分かる品です。

新潟県村上市で受け継がれてきた伝統の漆器は、新潟県無形文化財「村上堆朱」、および経済産業大臣指定伝統的工芸品「村上木彫堆朱」として認定されています。

村上木彫堆朱の代表的な塗り方で指頭塗又はタンポを用いて彫刻を埋めない様に塗る技法が必要です。

出来上がりは黒味がかかった朱の色ですが年数が経つにつれ艶が出て、透明に輝く朱の色に変化します。

堆黒(ついこく)は、下塗りから漆に黒の漆を使い塗ります。塗り方は堆朱と同様ですが仕上げに磨き上げます。

堆朱塗りで仕上げた後に、全体にむらなく溜漆を2~3回塗り磨き上げたものです。[三彩彫(さんさいぼり)]堆朱は彫刻をした上に漆を塗り重ねるのに対して三彩彫は、木地に色漆(朱、黄、緑)を塗り重ね最後に黒を塗り磨き上げます。そこに文様に応じて色が出るように彫刻をしています。

写実的な図などが多く用いられ繊細な彫刻と色漆の華やかさが特徴です。

村上堆朱



(4) 鑄絵(さびえ)

漆芸の技法の一つ。生漆(きうるし)に砥粉(とのこ)を混ぜた鑄漆で、やや水分を多くしたものを日本画用の筆につけて絵や模様を描き、十分に乾かないうちに綿で磨いて光沢を出す技法。描いた絵が乾いてから、彩漆(いろうるし)で彩色したものもある。

石川県山中、静岡などで行なわれ、高岡の勇助塗にはこれを応用した独特のものがある。

(5) 存星(ぞんせい)

存星は、中国で明(みん)代初期(15世紀ころ)に創始された填漆(てんしつ)という漆器技法の日本における呼称である。

存清とも書く。室町時代の中国美術鑑賞、書院の座敷飾りに関する秘伝書である『君台観左右帳記(くんだいかんそうちょうき)』の中国彫漆器を記したうちに、「存星と云(い)ふものあり赤も黒もあり剔金(てききん)の様(よう)に彫りたるものなり稀也(まれなり)」とあり、わが国で遅くとも16世紀初めには舶来品として尊重され、茶器に用いられていたことがわかるが、存星の呼称の出自は不明である。

この技法は、漆塗りの面に色漆で文様を描き、文様の輪郭線に沿ってやや太く、文様の上は細く、刀で線彫りを施すものであるが、現在の中国には残されていない。

我が国では、江戸末期に高松藩の玉楮象谷(たまかじぞうこく)が、この技法を模した象谷塗を開発し、香川漆器がその伝統を受け継いで、盆、菓子鉢、茶道具、花いけ、座卓などを産している。

中国の漆芸の一種で、彩漆で文様を描くか、彩漆を嵌(は)めこんで、輪郭線や細部に沈金を施したもの。この呼称は中国にはなく、日本で唐物鑑賞にあたって用いた名称と思われる。

また、一説に、人名ともいわれ、存清、存成の文字も当てられる。日本では、中国の技法を模して、江戸末期に香川県高松、富山県高岡などで行なわれ、象谷塗(讃岐漆器)、高岡漆器などにその伝統が受け継がれている。」

(6) 螺鈿(らでん)

「螺鈿(らでん)は、広義には貝をもって飾ること(貝飾り)をいうが、狭義には貝片を器物等の木地や漆面に装着して施す装飾法をいう。

使用される貝には、ヤコウガイ(夜光貝)、シロチョウガイ(白蝶貝)、クロチョウガイ(黒蝶貝)、カワシンジュガイ(青貝)、アワビ、アコヤガイなどがある。

歴史貝片を用いた装飾法は古代メソポタミアや中国の殷周時代にはみられた。

中国貝片を用いた装飾法は中国の殷周時代には見られ、螺鈿工芸は周代に流行したという。

唐代には螺鈿法が著しく発達したが、発見例は少ないものの、日本の正倉院宝物からは厚貝(後述)の螺鈿法や多様な装着法などをみることができる(正倉院宝物として伝来する螺鈿紫檀五絃琵琶、螺鈿紫檀阮咸(げんかん)など)。

ただし「螺鈿」の語が何によって記録されたか問題点があるとされており、唐代の記録には「寶鈿鏡」や「寶鈿枕」の用例はあるが、「螺鈿」は見当たらないとされる。

螺鈿の技術は宋代にはほとんど継承されず衰退してしまい、日本や高麗の螺鈿が中国でも評価された記録が残されている。元代になると薄貝による新たな螺鈿法が出現し、発生伝来の経路は不明とされるが、以後中国では薄貝螺鈿法が主流になった。

「日本黒蠟色花丸紋蒔絵螺鈿鞘大小拵」は、蒔絵と螺鈿で豪華に装飾された大小(打刀と脇差)の拵(こしらえ)。日本では、螺鈿は奈良時代に唐から持ち込まれた。

平安時代になると、螺鈿の技術は急速に発達し、中国や高麗への贈物として螺鈿器が選ばれている。

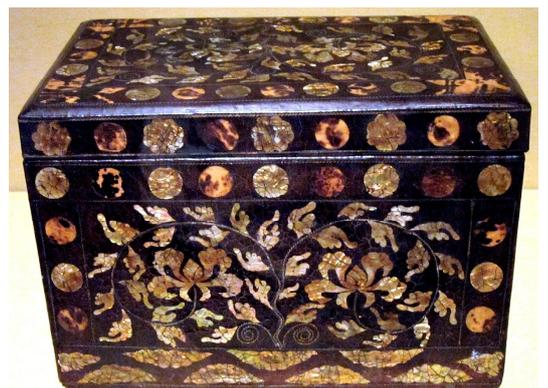
生地螺鈿とその簡略法が引き続き行われる一方で、平安時代には当時の日本の代表的な工芸品となった黒漆螺鈿や螺鈿と蒔絵との併用などもみられるようになった。

中国の元明螺鈿や朝鮮半島の高麗・李朝螺鈿の輸入もあり「唐物」と称された。

龍存星盆 - 東京国立博物館



螺鈿細工の施された漆器、朝鮮時代
18世紀中葉。ホノルル美術館、



16世紀半ばにはヨーロッパとの交易の影響を受けて、ヨーロッパ風の模様の漆芸品が作られたり、彼らの注文に応じて大量に漆芸品が輸出され、南蛮漆芸(南蛮漆器)と呼ばれている。

これらの品物はヨーロッパでは一つのステータス・シンボルとなる高級品として非常に人気があった。江戸時代になっても螺鈿は引き続き人気を博したものの、鎖国政策によってヨーロッパとの貿易は大幅に縮小されたため、螺鈿職人は必然的に日本向けの商品に集中することとなった。

江戸時代の螺鈿職人としては生島藤七、青貝長兵衛、杣田光正・杣田光明兄弟などが名高い。本阿弥光悦の光悦蒔絵や尾形光琳の蒔絵など厚手の貝を用いた螺鈿も現れた。

螺鈿細工の原料となるヤコウガイは、かつて琉球弧の先史時代から古代(沖縄貝塚時代～グスク時代)にかけて、日本本土との交易品として重要なものであった(「貝の道」の交易)。

15世紀から16世紀になると螺殻(夜光貝の殻)や螺鈿器が多く輸出されるようになり、15世紀の琉球の螺鈿法は明らかではないが、16世紀後半には貝摺奉行が設置され琉球の主要な工芸品となった。

琉球螺鈿は中国の薄貝螺鈿法が強く影響しているが、一方で紅漆螺鈿のように琉球螺鈿に独特の技法も生まれた。朝鮮半島螺鈿工芸は唐代に統一新羅時代の朝鮮半島に伝わった。

正倉院で保管中の百済の木?紫檀碁局、蒲柳雑樹水禽文螺鈿描金香箱、螺鈿漆花文箱などの作品がある。高麗の時代には薄貝螺鈿を特徴とする高麗螺鈿がみられるが、技法の発生や伝来は不明で、遺例から中国の元代螺鈿よりも遡る可能性もあるとされている。

李氏朝鮮でも重要な漆工芸の技術だったが、高麗螺鈿を継承した形跡がなく、初期の李朝螺鈿はやや厚手の貝片を用いて独特の曲線をもつ牡丹唐草が主流であった。

(7) 勇助塗(ゆうすけぬり)

高岡漆器 勇助塗(ゆうすけぬり)は、江戸末期、初代石井勇助が当時、唐物として珍重されていた中国明時代の漆器に憧れ、その研究を重ね生み出した漆器の技法です。

特徴としては唐風の雰囲気をもつ意匠に花鳥、山水、人物などの鏤絵を描き、青貝、玉石、箔絵などを施す総合的な塗りの技法です。

茶盆、器物など格調高く、繊細かつ趣に富んだ作品が県内外から高い評価を得ています。

(8) 彩色(さいしき)

「日本では古くから「岩絵具(いわえのぐ)」という、天然の鉱物から作られた絵の具が使われてきました。

昔は世界中でも用いられてきた岩絵具ですが、実は最近まで日本でしか使用されていませんでした。

これは、常に伝統を重んじてきた日本だからこそ残され、その材料や技法の継承の裏には、仏教美術によって受け継がれてきたという背景があります。

近年では人工で作られた安価で色数も多い「新岩絵の具」が登場し岩絵具が身近になりましたが、自然から色を分けてもらうような天然の岩絵の具は、人工のものにはない微細な風合いの発色があり、何億年もかけて精製されてきた色の魅力があります。

希少な材料を、熟練の職人が丹念に塗りこめていく作業は、本当に贅沢なことかもしれません。

しかし、「仏の教えを具現化している」といわれるお像にこそ、そのような材料・技術がふさわしいのではないかと私共は考えます。

岩絵具の接着剤として用いられてきた膠(にかわ)は、動物の皮から抽出されたものが広く使われています。これは千年前の文化財が受け継がれてきていることから解るように、膠が安定した接着剤であるためです。

勇助塗



(9) 蒔絵

「蒔絵の技法は日本独自のもので、およそ1200年前から行われてきました。蒔絵の漆器は海外にも数多く輸出され、現在でも「Makie」と呼ばれ親しまれているそうです。

まずは蒔絵1200年の歴史について紐解いてみます。奈良に始まり平安に花開いた蒔絵文化蒔絵のもとになったものは、奈良時代・正倉院の唐大刀(金銀鈿莊唐大刀/きんぎんでんかざりのからたち)のさやにある「末金鏤(まつきんる)」だといわれています。

「末金鏤」とは、金粉に漆を混ぜて絵柄を描き、その後に透明な漆を塗って木炭で研ぎ出したもの。現代に伝わっている「研出蒔絵(とぎだしまきえ)」とほぼ同じ技法でつくられています。

文箱 秀衡紋様×蒔絵

その後、平安時代になるとさまざまな蒔絵の技法が誕生。貴族たちに好まれ、家具調度品として用いられるようになりました。

更には寺院の内装としても使われるようになり、描かれるものも松竹梅など日本風のものへと変化。京都・宇治にある平等院鳳凰堂や、岩手・平泉にある中尊寺金色堂などはその代表的なものといえるでしょう。

将軍家に抱えられた鎌倉・安土・桃山時代の蒔絵師鎌倉時代になると、蒔絵は武士にも愛されるようになり、鎧・兜なども漆塗り・蒔絵が施されるようになりました。

鎌倉時代には蒔絵の技術も向上し、現代に伝わる平蒔絵や高蒔絵、研出蒔絵といった技法ができたのもこの時代です。

国宝である鶴岡八幡宮の籬菊螺鈿蒔絵硯箱(まがききくらでんまきえずすりばこ)、武器や神社で催事などに使われる神宝などにもこれらの技法が用いられるようになりました。



室町時代になると、足利家は蒔絵を施した多くの調度品を蒔絵師につくらせました。腕のよい蒔絵師は足利将軍の庇護を受けるようになり、華やかな調度品がつくられるようになったのもこの時代です。

高蒔絵と研出蒔絵、それぞれの技術を合わせた豪華な肉合蒔絵(ししあいまきえ)なども生まれました。

このころの蒔絵や漆塗り職人には、現代とほぼ同じ程度の高い技術があったようです。安土桃山時代、豊富秀吉の正室おねが、秀吉の霊を祀るためにつくった京都「高台寺」にある蒔絵は、「高台寺蒔絵」としてあまりにも有名。秀吉夫妻が使ったとされる茶道具や筆筥などの調度品に施された蒔絵は、この時代の最高峰といわれています。

一般庶民に広がる江戸の蒔絵文化江戸時代は、新しい蒔絵の図柄が次々に生まれた時代です。その背景として、裕福な町人・商人たちが蒔絵を施した漆塗りの調度品、アクセサリーなどを生活に取り入れたことがあげられます。

当時の人々は、一風変わったものや新しいデザインなどを好み、それを身につけ、自らのセンスをアピールするようになりました。

江戸中期以降になると、町人・商人たちが蒔絵師たちの庇護者となったこともあり、蒔絵にギヤマンやべっこうなどを用いた今までにない芸術的な蒔絵もつくられました。当時の商人たちは、文化の一翼を担うといった気持ちがあったのかもしれませんが。

また、これらの蒔絵を施した漆器は、ヨーロッパなど海外にも輸出されるように。日本の独自技術である蒔絵は、ヨーロッパの人々にとって、珍しく美しいものとして人気を集めました。

一口に蒔絵といってもさまざまな技法があり、主なものとしては平蒔絵、研出蒔絵、高蒔絵などがあります。それぞれどんな技法なのか、またどんな特徴があるのか、探ってみましょう。

漆で描き、金粉で彩る蒔絵漆の役目としては、木を補強し丈夫にすること、艶を出すこと、モノを接着させることなどが挙げられます。

そのうち蒔絵は、漆の接着剤として役目を活用したもの。漆塗りの表面に漆で絵柄や文様を描き、漆が乾かないうちに接着剤として金・銀・錫など金属粉を付着させてつくり出す。

まず、色漆・透明漆を使って筆で絵を描き、少し漆が乾いたところで金属粉を蒔きます。漆で描いてすぐに蒔くと漆に粉が沈んでしまい、乾いてから蒔くと粉が接着しないなど、なかなかコツが必要です。蒔絵は立体的な絵柄が特徴でもあり、いくつも絵柄を重ねるため、蒔絵の完成だけで1カ月以上の時間がかかる作品も多いそうです。

蒔絵職人たちの丁寧な手仕事によって、繊細で豪華な蒔絵がつくりだされているのです。磨き方で異なる平蒔絵と研出蒔絵平蒔絵と研出蒔絵の技法の大きな違いは、磨き方にあります。平蒔絵は漆で描いた図柄・文様などの上に金属粉を蒔き、乾燥した後に透明漆を塗って磨いて仕上げたもの。蒔絵の中でも最も一般的な技法だといわれています。

それに対し、研出蒔絵は金属粉を蒔いて文様・絵柄をつけた後に漆を塗って乾燥させ、下の蒔絵の絵柄の層まで木炭で研ぎ出す技法です。

2つの見分け方は、蒔絵部分が高くなっているか、それとも平たいかどうか。平蒔絵は下地よりも蒔絵部分が少しだけ高くっており、研出蒔絵は下地と蒔絵部分が滑らかな同じ高さになっています。

また、平蒔絵は蒔絵部分がはっきりと明るく現れているのに対し、研出蒔絵は淡い華やかさがあります。蒔絵を浮き立たせる高蒔絵高蒔絵は下地よりも蒔絵部分が高くなった蒔絵のことをいいます。

高く盛り上げる方法には、漆を塗り乾燥させた蒔絵部分にさらに漆を厚く塗った「漆上げ」や、蒔絵部分に炭の粉を蒔いて高くする「炭粉上げ」、蒔絵に錆漆を塗る「錆上げ」などがあります。

さらに高蒔絵は高とした部分に、平蒔絵や研出蒔絵などを行いますので、高い技術とかなりの労力が必要とされます。高蒔絵は、平蒔絵・研出蒔絵に比べ、多くの工程を経て作られており、蒔絵部分に厚みがあり立体的かつ遠近感があるのが特徴。さらびやかで重厚感がある高級な蒔絵技法といえます。」

(10) 鍍金具青銅鍍金(かざりかなぐ・せいどう・ときん)

金属工芸の製作技法のうち、本体を形づくるのは、銅板を鋳起(ついき)して成形する「鍛造(たんぞう)」と、鋳型に熔銅を流しこむ「鋳金(ちゅうきん)」による方法があります。

表現のために最も重要なのは、次の行程、「彫金(ちょうきん)」であり、彫金には「地彫り」「毛彫り」など様々な技術があります。俄には、江戸時代から七代に渡り彫金技術を受け継ぎ、日本にも十数名しかいない彫金職人が在籍しています。

① 鍍金(ときん)

塗金とも書き、滅金(めつき)ともいう。銅または銅合金の製品の表面に金や銀などを付着させる金工加飾技法の一つで、中国では戦国時代以降に盛行し、日本では古墳時代以降にみられるが、これは金アマルガム鍍金である。水銀が鉄、白金、コバルト、マンガン、ニッケル以外のすべての金属と溶けあって合金をつくる性質を利用したものである。

金または銀を水銀に混ぜてアマルガムをつくり、これを磨きあげた銅の表面に塗布したのち、炭火で加熱して水銀を蒸発させ、金または銀を定着させる、いわゆる(けしめつき)(金消)である。

めつき【鍍金 metal plating】(ときん)ともいう。材料の表面を薄い金属の皮膜でおおう金属表面処理法。装飾、防食、表面硬化、機能付与などさまざまな目的で使われる。

② 宝相華文 蹴彫り魚々子地(ほうそうげもん けりぼりななこじ)

扁平になった鑿をタテに使い、角を活かした蹴るように打ち込んでいく線刻法で、楔(くさび)の形をした三角形の点の連続ができます。

楔形の線刻を施すことで、表現したい意匠と地金面の境界線がより分かりやすくなります。この作品も宝相華文と地金の魚々子地の境に蹴彫りを施しています。

宝相華文は、唐草文様のうち、あたかも花を思わせるような豊麗な形のものを一般に宝相華文様と呼び、古くは唐代の中国から日本に伝わりました。」

宝相華文 蹴彫り魚々子地 - 蹴彫り

「地彫り」(じぼり)とは、平面に表した文様全体を浮き立たせて見せるのに、鑿で地金を透いて形を作っていく技法です。

型に流したものと、一つ一つ手で彫ったものは、彫りの繊細さ、躍動感が異なります。例えば、獅子を彫ったものは、そこにまるで生命が宿ってるかのように、生き生きした表情が生まれます。」



鉄線唐草文 薄肉地彫り魚々子地 - 魚々子地



「透し彫り」とは、金属板を切り透かす技法です。鋳物(いもの: 鋳造されたもの)や打ち物(金属を打ちたたいて作った器具)などの素地に鑿や糸鋸(いとのこ)で模様を切り透す技法で、文様を浮き立たせるため、文様を残し他の部分を切り透かしたものを「地透し」、文様を切り透したものを「文様透し」と言います。」

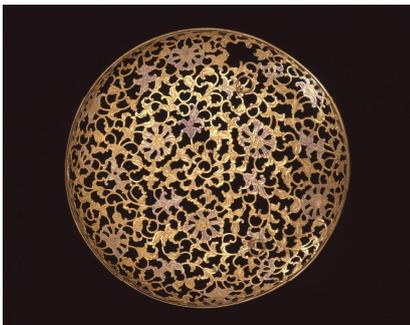
「肉合彫り」(ししあいぼり)とは、地金面を肉付模様の頂点とし、更に地金面を掘り下げて肉取りをする薄肉彫りです。装剣彫金の隆盛した江戸時代に始まるもので、鎧・小道具をはじめ、煙草入れ・煙管の彫刻にしばしば見られます。

「薄肉彫り」とは、模様や形を比較的薄く板面に浮き上がらせて彫る方法。薄い範囲の中で、文様や形を表現するので、高い技術が必要といわれています。

地彫り素魚々子地金具



金銀鍍宝相華文透彫華籠



「高肉彫り」とは、立体的な彫金技法である。金属を彫りくずし、立体的表現をする丸彫りと、金属板を裏から打出して高肉とし、表面から細部を彫刻したものがあります。

肉取の高いものを「高肉彫り」といい、薄いものを「薄肉彫り」といいます。高肉彫りの作品」

「魚々子地」とは、圏点状の刃となった鑿を打ち込み、細かい粟粒を置いたようにみせる技法。連続して打ち込み、粒を密に敷き詰めたようにすると、ちょうど魚の卵のように見えることから、この名があります。

奈良時代には、魚々子打ちの専門工がいたことが伺え、正倉院には当時用いられていた魚々子鑿が現存しています。

「蹴彫り」とは、先が扁平になった鑿をタテに使い、軽く浮かせ、角を活かした蹴るように打ち込んでいく線刻法で、その刻線は楔(くさび)の形をした三角形の点の連続によってできています。古くは平安時代によく用いられた技法と言われます。」

14. 法土寺町曳山王様(曳山に関わる神様一覧)

曳山の王様である、祭神人形は、神格として曳山にお迎えしたものであります。高山高欄をの鏡板を見返りとし、安置されています。それは法土寺町の守護神として、現在関羽・張飛の2神を配し前人形として猿公を供奉しています。

前人形は、神に対する奉納であります。新湊曳山のもは、「神興渡御」に供奉する神事としての役割があり、奉祝芸能に合わせて王様に代わり御礼を奉斎するのが特色であると伝えています。

諸葛亮 孔明	劉備 玄德	関羽 雲長
		
<p>中国三国時代の蜀漢の政治家諸葛亮の天下三分の計に基づいて益州の地を得て勢力を築き、後漢の滅亡を受けて皇帝に即位して、蜀漢を建国した。</p>	<p>蜀漢の初代皇帝黄巾の乱の鎮圧で功績を挙げ、その後は各地を転戦した。諸葛亮の天下三分の計に基づいて益州の地を得て勢力を築き、後漢の滅亡を受けて皇帝に即位して、蜀漢を建国した。</p>	<p>中国後漢末期の将軍蜀漢の創始者である劉備に仕え、その人並み外れた武勇や義理を重んじた彼は敵の曹操や多くの同時代人から称賛された</p>
張飛 益徳	猿 公	鏡 板
		
<p>三国時代の蜀の将軍後漢末の群雄の1人である劉備の挙兵に当初から付き従った人物で、その人並み外れた勇猛さは、大いに称えられ、その武勇は後世三国志で賞賛される。</p>	<p>法土寺町は、日吉社を町の鎮守の一つとしています。このため曳山の前人形は、日吉社の神の使い「猿」の姿をしています。 古来より、魔除けの象徴として「神猿」(まさる)として大切に扱われてきました。</p>	<p>鏡板には、中国那殷時代「父康鼎」なる者が【鐘鼎文】(しようていぶん)を調査する様子を刻むとあり、油屋仁左衛門(当時の宮源の家で山王町在中と記)の寄付と記録されています。</p>

※上記の「劉備玄德」の写真は、三国志の蜀の国、現在の「中国四川省成都」のお墓の横に安置されている等身大の人形を撮影したものであります。

15.法土寺町曳山の彫金と彫刻

主な物のまとめ一覧

部位名称	彫金・彫刻の内容	各部位写真
上山高欄	朱塗り唐草紋で堆朱彫り 花鳥彫刻四隅に配置 	
中山高欄 中山高欄彫金 ③ 中山高欄下桁	黒塗り彫金仕上げ 透かし金具唐草文様 黒塗り彫金仕上げ	
殊連黒塗り 殊連彫金(面側)	花鳥組み合わせ彫金 	
殊連黒塗り 殊連浮彫金箔 (下面側)	漆塗りで、金箔の波濤文が 浮彫り	
横欄間 ①・②	金地で「実ざくろと胡錦鳥(コ キンチョウ)」を彫り	
下の桁 ④ 黒塗り	、それぞれに格調の高い絵 柄であります。	
堅欄間 ⑤	正面の赤格子横の堅欄間 は、「獅子の逆落とし」の彫 刻	
腕木 ③ 	腕木は、朱塗りの「唐草文」 の金箔仕上げ、そのまわは、 朱塗りの「唐獅子」である。 ③	
下座	下座は紹張り(絹織物)の赤 格子の戸張で、前後2枚、側 面6枚、総て8枚入りである。	
下山高欄	朱塗り面金・四隅真鍮角 棒8本差し	

名 称	表現内容の説明
①胡錦鳥(コキンチョウ)	小鳥のなかで最も美しい鳥で極彩色である。子供の時の色から大人の美しい色へと変身成長していく。
②実ざくろ	種子が多いことから豊穰や子宝に恵まれる吉木とされる国や地域が多い
③唐草文	蔓(つる)草の生命力を発展に結び付けて一種の吉祥文様として使用される。
④松・雲・鶴	暮らしの豊かさへの祈りをこめて、無病息災・不老長寿・子孫繁栄を願う。
⑤獅子の逆落とし	わが子に厳しい試練を与え、その器量を試し一人前に育てる。

法土寺町曳山 彫金・彫刻の表現(作者の願いとは)

放生津からくる感謝の心と、町の人々の生活安定を願い、基本的に美しさ・安らぎ・いたわりの願いを、曳山に込めて、人々の豊かさを促す意図があるような気がします。日々の生活を祭りの神々に祈り、健康と子孫繁栄を願い、町民に勇気を与える曳山として作成したと考えられます。

16. 裃・法被

赤い綿入れ裃(はんでん)とは、羽織に似ているが、わきに襦(まち)?がない、丈の短い上着。胸ひもをつけず、襟を折り返さないで着るもの。裃天、半纏、絆纏とも書く。

江戸時代、特に18世紀頃から庶民の間で着用されるようになった。主に職人や店員など都市部の肉体労働者の作業着として戦後まで広く使用され、労働者階級を示す「半纏着(の者)」という語もあった。

種類については袖の形による広袖裃、角袖裃、筒袖裃、デザインの面では定紋や屋号などを染めつけた印裃などがある。印半纏は雇い人に支給されたり、出入りの職人などに祝儀に与えられることも多く、職人階級では正装として通用し、俗に窮屈羽織とも呼ばれた。

更に防寒着の「綿入れ裃」があるが、同じ裃と言っても印裃とはまったく違う用途と発祥文化がある。よく知られている綿入れ裃は、袷(あわせ、表地と裏地の二重)にしてその間に綿を入れたもので、衿は黒縹子をかけたものが一般的である。

主に室内用の防寒着として用いられ、男性・女性に限らず着用される。裃と法被の違い法被と絆纏の違いは服装の歴史から見てもあまりはっきりしない。

江戸時代、法被は民間のものとして発達してきたものではなく、武家社会で生まれ伝えられてきたもので、それが明治時代になっても官員などの生活の中に受け継がれてきた。

絆纏は逆に庶民・町民・職人を中心に日常生活で着用された。江戸時代に一般庶民は羽織禁止令が出たため、襟を返す羽織(当時の法被も襟を返して着用)の代わりに法被が形を変え、その末端で絆纏との混同が始まったようである。

羽織と法被では襟と袖が異なる。襟を折り返すのが羽織で返さないのが法被、羽織の袖は袂(たもと)袖となり、法被は筒袖と違いがはっきりしている。脚注]

「法被(はっぴ)とは、日本の伝統衣装で、祭などの際に着用し、また、職人などが着用する印半纏のことである。半被とも表記する。概要一般に、腰丈または膝丈の羽織の形式で、襟の折返しも胸紐もなく、筒袖または広袖の単純な形をしているのが特徴である。

法土寺町曳山格納庫完成



元々、武士が家紋を大きく染め抜いた法被を着用したのに始まり、それを職人や町火消なども着用するようになった。本来の法被は胸紐つきの単(ひとえ)であるのに対し、半纏は袷(あわせ)であるが、江戸時代末期に区別がなくなった。襟から胸元にかけて縦に文字(襟文字)を入れることで着用している者の所属や名、意思を表したりすることができる。「大工留吉」「め組小頭」(以上2つは左右に分割されている場合もある)「いらっしゃいませ」など。

祭礼に用いる法被には、それぞれ所属や年齢などから「御祭禮」、「若睦」、「中若」、「小若」などの襟文字が入られる。消防団では現在も消防団員の制服であり、出初式の梯子乗りなどでも見かけられる(総務省消防庁の「消防団員服制基準」では「乙種衣」と呼称している。

ただし全ての分団に貸与されるわけではない。これは消防の興りである町火消から続く伝統である。最近では、消防団や祭礼のみならず、プロ野球などのスポーツの応援や百貨店などのセール時に店員が着用する衣装などさまざまな用途に使われている。

「半纏とは江戸時代の防寒着のこと、半纏とは江戸時代に着られるようになった上着のことです。半纏は主に庶民が着たもので、表地と裏地の2枚の布からできています。

また、間に綿を入れた半纏を「綿入れ半纏(わたいはんでん)」と呼び、防寒着として着用されました。

半纏の形は羽織と似ています。羽織は武士が鎧の上から着用した「陣羽織(じんばおり)」が由来となっている上着で、主に男性が着用しました。明治以降は女性も羽織を着るようになりましたが、男性が羽織を着るのは正装としての意味合いがあるのに対し、女性はカジュアルな上着として着ることが一般的です。

袖が通常の半分(半丁)であることに由来する半纏は、袖が通常の半分(半丁)であることから名前がついたとされています。その後、纏う(まと)の漢字を組み合わせ、半纏と書くようになったようです。

尚、「纏」と書いて「てん」と読む例は少なく、仏教関連の言葉で煩惱を意味するときのみと言われていました。

また、半纏を「半天」と書くこともあります。これは特に意味はなく当て字です。一反の半分で作れることに由来するとの説もある半纏の由来として、一反(着物1着分の布。36~38cmほどの幅で12m以上程度)の半分で作れるからというものがあります。

通常、着物を作るのには一反必要ですが、半纏の場合は2着作れたので、半反(はんたん)や半反物(はんたんもの)と呼ばれ、なまって半纏となったようです。

尚、半反物は元々は丁稚奉公のための服装だったとされているので、半纏は作業着ともいえます。

火消したちが着用した「火消し半纏」江戸時代は「火消し」と呼ばれた消防団員たちが活躍した時代でもあります。火消したちはそれぞれの組に属し、火事と聞くとすぐさま飛んで行って消火活動にあたりました。

火消したちが消火活動に向かうときは、「火消し半纏」を羽織っていたようです。

「法被(はっぴ)と半纏(はんてん)の違いは？」と聞かれたらどのように答えますか？一見同じように見える法被と半纏ですが、実はそれぞれに特徴があります。

今回はその特徴を比較しながらみていこうと思います！形がちがう！法被と半纏はそもそも形が異なります！

形状の詳細は、

○丈の長さ、つくり法被→お尻くらいまであり、少し長め。裾が広め。半纏→お尻の上あたりまでで、短め。また、防寒用のものには綿(わた)が入っています。

○袖法被→袖が長い。半纏→袖自体小さめで短い。

一見同じような形に見えますが、比較してみると相違点がありますね！法被と半纏の歴史法被は、大工職人や火消しなどのユニフォームやお祭りなどのイベントで着るイメージがありますが、もともとは、家紋などを染め抜いたものを武家が着用し始めたのが起源とされています。

○胸紐法被→胸紐がある。半纏→胸紐

一般庶民の間でも格好良いと憧れを抱く存在であった法被ですが、当時の身分制度により、武家よりも下の身分の者には法被の着用は許されておらず、似た形の半纏を着用するようになったそうです。

放生津の曳山



「はっぴ」には、今回使用している「法被」と、それ以外に「半被」と漢字で表現されることがあります。

実は「はっぴ」に関しては、半纏と違い、それぞれの漢字の成り立ちに違いがあります。

「はんてん」には「絆纏」、「半纏」、「半天」、「袷天」、「袷纏」と様々な漢字が使われていますが、どの漢字が正しいかは定かではないようです。

「法被」と「半被」の違いももとはっぴは、古代の袖なしの胴衣「はんび」が転じて「はっぴ」となりました。

2018年法土寺町曳山提灯



法土寺町祭り袷纏



17. 法土寺町曳山年表①

実施年	場所・名称	事業内容・世情	職人
1676年(慶安3年)		古新町曳山創設。(柴屋文書)	
1676年(延宝4年)		放生津八幡宮祭に「法楽の引く山」として、曼荼羅寺から曳き出される。	
1764年～1772年 (明和年間)		法土寺山曳く。(太鼓山を地車で曳く)	
1773年(安永4年)		太鼓山を地車で曳く。	
1775年(安永4年)	曳山騒動	曳山騒動時には、山車は魚津代官所に没収されたが、吟味の上、町方に返された。(曳山車申御裁判之事)	
1785年(天明5年)		放生津町曳山開発留帳によれば、「法土寺曳山出初、天明5年也」曳山は、新たに整備され、彫り・塗りとも曳山として完成する。	
1810年(文化7年)	大火	12月23日の夜・「法土寺焼け」の大火にて法土寺町は全焼し、山車も焼失した。 (野村屋旧記)	
1825年(文政8年)	躯体(本体)	新調・設計・製作	棟梁 高瀬竹次郎(放生津) 塗り師: 板屋小左衛門(高岡)
	上山彫刻	新調	高瀬竹次郎(放生津)
	上山彫刻・鏡板	新調	辻 丹甫(2代目高岡)
	鍔金具	新調(中高欄彫金)	安川屋三右衛門(高岡)
	軍配	新調	高瀬竹次郎(放生津)
	王差人形 前人形	新調	高瀬竹次郎(放生津)
1845年(弘化2年) 愛宕社建設	大火	放生津八幡宮・光明寺等の寺社の他、法土寺町、東町、荒屋町の民家490戸余りが焼失した。法土寺町が火元であったため「火伏せの神「愛宕神」勘定し「愛宕社」建設した。1866年(慶応2年)	高瀬輔太郎(放生津)
1911年(明治末)?		曳山の高さを調整する。 王様は、元々、玄徳・関羽・張飛の3体であったが、この時、低く切り下げたことから1体を下ろしたのだろう。?	
1889年(明治22年)	新湊町誕生	これまでは、町年寄り・組合頭(江戸時代)、副戸町(明治時代)が神興渡御・曳山巡行を取り仕切った。この年4月「町村制施工」以降、本曳きの運営に行政職の関与は見られない。	
1915年(大正4年) 1918年(大正7年)?	放生津潟	京都で行われた大正天皇即位大礼(御大典)を記念して、「荒屋町曳山・法土寺曳山を船に乗せて放生津潟に浮かべて、御大典を祝った。	
1937年(昭和12年)		日華事変から太平洋戦争へ突入し、戦後昭和22年までの10年間は、曳山は中止となり、この間、山宿だけは毎年開いて、王様や前人形を飾って供養し、「入魂の御祭り」とした。	
1937年 (昭和12年～15年)	大修理 上中下山塗り	新調(追加・一部更新:下山鍔金具)	竹内武吉・羽広義佐 鳥崎政吉・桧物松蔵 (塗り師:放生津)
1948年～1951年 (昭和23年～26年)	曳山保存会 発足	曳山町13町で初めての組織。	
1959年(昭和34年)	協議会発足	曳山保存会を母体にした「新湊曳山協議会」発足。	
1950年(昭和25年)	長手	新調 町内青年団より多額の寄付有り。	

法土寺町曳山年表②

実施年	場所・名称	事業内容・世情	職人
1952年(昭和27年)	車輪	新調 これまでの車輪は、「板車」であったが、今のものは、32本後光型の差車である。寸法は、径153cm・厚さ18cm。	久村角平(井波)
1962年(昭和37年)	曳山格納庫	7月に立町日吉神社敷地内に建設。	
1962年(昭和37年)	王様顔	修理	北本清三(高岡)
1973年(昭和48年)	軍配	新調	木工:加門甚一(放生津) 金箔:桧物 弘(放生津)
1977年(昭和52年)	前人形衣装	新調	
1979年(昭和54年)	前人形	新著:本体機構部	加治甚一(放生津)
1980年(昭和55年)	王様顔	差修理	黒川孝一(下村)
1965年(昭和40年)	愛宕社	8月に創建100年祭を挙行了した。	
1986年(昭和61年)	中山・殊連	殊連・殊連長押し・障子・中山高欄を中心に塗箔し、下山・中山銚金具も修理した。	塗箔:桧物 弘(放生津) 木工:加門甚一(放生津)
2010年(平成22年)	新湊・大門海老江	射水市曳山協議会設立。	
2014年(平成26年) 2015年(平成27年)	愛宕社修復	屋根・外周り修復 創建150年祭を挙行了した。	
2016年(平成28年)	車輪大修理	中山高欄一部新調	藤岡和嘉(氷見)
2019年(令和元年)	曳山格納庫	新しく東橋向かいに建設する。	塩谷建設(高岡)
2020年～2022年 (令和2年～3年)		コロナウイルスの為、巡行一部中止。	
2017年(平成29年)	保存会	4月1日「放生津八幡宮築山・曳山保存会」の発足。	
2020年(令和2年)	電球LED	新調	
2021年(令和3年)	文化財	3月11日「国指定重要無形民俗文化財」となる。	
2022年(令和4年)	王様	関羽・張飛顔面補修	南部白雲(井波)
2022年(令和4年)	提灯	新調	

18. 曳山の由来

曳山は、元々神輿の渡御に随行するもので、祭神の畏敬に合わせて庶民の楽しみとして受け継がれてきた物である。安永4年(1775年)、放生津町は、魚津奉行所の問合せに対して、築山と共に天正年中(1573年～1579年)から行ってきたと主張している。

各山町創設(出来)時期

	町名	創設時期	出来時期	江戸時代将軍
1	古新町	慶安3年 1650年創設	元禄10年 1697年再出来	3代:家光
2	奈呉町	元禄5年 1692年出来		5代:綱吉
3	中町	元禄5年 1692年出来		5代:綱吉
4	新町	正徳5年 1715年創設	安永3年1774年出来	7代:家継
5	東町	享保3年 1718年出来		8代:吉宗
6	四十物町	享保3年 1718年出来		8代:吉宗
7	三日曾根	享保6年 1721年出来		8代:吉宗
8	立町	享保6年 1721年出来		8代:吉宗
9	荒屋町	明和7年 1770年出来		10代:家治
10	長徳寺	安永2年 1773年頃出来		10代:家治
11	法土寺町	天明5年 1785年出来		10代:家治
12	紺屋町	寛政元年 1789年出来		11代:家斉
13	南立町	文久2年 1862年出来		14代:家茂

神格として曳山に迎えた「祭神人形」の王様は、いずれの山も上山高欄の内側に鏡板を見返しとして安置されている。この王様は、それぞれの山町守護神として、日本の祖先の神・神道の神・中国の武将・儒教の開祖・福の神などが祀られています。

柳田国男の「日本の祭り」によると、マツリは、「マツラウ」(神の御前に居て何でも仰せごとがあれば皆承り、神の思召しのままに勤仕する)という、信者の心の内なる素朴な在りようが本来の姿であって、それが次第に見物を意識した美々しく、華やかで楽しみの多い「祭礼」という現象を生むようになった。

「日本語のマツリは、マツル、マツラフという動詞で上位の者に奉仕する意味の語の名詞形とみられる。語源的にはマツとマチは同根で、見えないものが見える場所、接触しうる場へ来るのを歓待する意味をもつ。…」

柳田は、「まつり」は、古来その日の境、今なら前日という日の夕御饌から始まって、次の朝御饌をもって完成したのであった。

つまり祭りは、夜分祭り場に行って籠もって行う(「籠る:コモル)ことが本来の形であったと言われている。

曳山に込められた基本的概念や、それに基づく題材の選定、形象や彫刻の配置などの知的な部分と絵師や工匠に対しての条件・情報の提供、現場での検分など主導的役割を担ったのは、町衆といわれる回船問屋、町役、村役などの有力者で、財政面も含めて地域の年配者の文化力によって造られ継承されてきた。

また、江戸時代初期に京都で出版された和刻本「有象列仙全伝」などが曳山装飾の種本であったとされ、漢籍(中国大陸において著された書籍)・美術品の図案なども参考にした。



その背景には、江戸時代の「儒学の隆盛」があった。

江戸や大坂はもとより、越中においても、富山・高岡・石動・城端・放生津にと寺子屋や郷学で盛んに儒学が教えられた。(放生津八幡宮祭曳山行事・築山行事総合調査報告書より)

このことが後の「放生津小学校・新湊小学校」へと繋がっていくと思います。

19. 愛宕社

(1) 鎮座愛宕社御神像について

本殿内奥に厨子が安置されており、その厨子内にさらに小型の厨子があり、その中に梅鉢紋の入った綿の袋に覆われた御神像が安置されております。御神像には、半球状のガラスの蓋がかぶせてあります。

御神像と外気が触れないように工夫されていると考えられます。

御神像は、黒みがかった青銅色あり、中心の像が馬に乗った甲冑姿の仏体像で、その左右に二体の甲冑姿の仏体像が脇を固めています。高さ10cmの御神像ではありますが、大きさの割に重量感があり金属製かと思われる。

(2) 愛宕大権現の御神体とは

愛宕大権現の御神体とは、勝軍地藏菩薩と言い「勝軍の神」として武家社会において尊崇され、地藏尊とは言っても身に甲冑を着け右手に錫杖、左手に如意宝珠を載せ軍馬に跨がり勇ましい姿をしているそうです。

その両脇には、不動明王と毘沙門天が祀られており、その三体を合わせて愛宕権現と称したそうです。

この大権現に鎮西八郎為朝公が、城の鬼門に安置し安泰を祈願したと伝えられています。

「勝軍の神」ということから、縁起のよい神として、火災消除・学業成就・家内安全だけではなく、地藏尊ということから「安産の神」として親しまれているそうです。

(3) 棟札について(むねふだ)

棟札(むねふだ、むねふだ)は、寺社・民家など建物の建築・修築の記録・記念として、棟木・梁など建物内部の高所に取り付けた札である。典型的には、木の札または銅の板に記して釘で打ち付ける。

中には建物の部材に直接記されることもあり、これを梁上銘(りょうじょうめい)と呼ぶこともあるが、趣旨は同じである。

愛宕社棟札の内容(むねふだ)は、宮大工「藤原姓高瀬射水輔短嗣:高瀬祐太郎」が建てたものであります。

今回の工事(修理工事)による遷宮において、御神体の傍より発見されました。

このことは、愛宕社創建時の正規の記録として、貴重な文化財であります。

内容については、誰が建てたのか！誰が遷宮されたのか！など貴重な事実が確認されます。

棟札に出てくる宮大工棟梁「藤原姓高瀬射水輔短嗣」は、当時の宮大工棟梁「高瀬祐太郎矩嗣」(たかせ すけ たろう のりつぐ)のことであります。

「高瀬祐太郎」は、「射水補・助太郎・輔太郎・長瀬震輔」と名を持つ宮大工であり、四代前の初代「高瀬仁兵衛」の直系で五代目にあたります。

尚、法土寺町曳山設計施工した「高瀬竹次郎」とは同門であり、正確ではありませんが叔父・甥の関係ではないかと思われます。

父の4代目「高瀬仁兵衛」(仁平)は加賀藩絵図師として、専念寺・気比社・長栄寺・新町曳山・立町曳山などに関わる名工でありました。

尚、「高瀬祐太郎矩嗣」の墓は、京都嵯峨の臨濟宗本山:大覚寺境内にあり、墓名に「長瀬庵震輔」(ながせあん しんすけ)と刻してあります。

高瀬祐太郎の業績は、文久3年(1863年)放生津八幡宮・弘化2年(1845年)大阪城修復肝煎・新町諏訪神社・大楽寺・本江加茂神社・曼荼羅時御経堂など、数々の業績を今に伝えています。

(4) これまでの愛宕社修復工事

昭和31年(1956年)8月24日世話人会において愛宕社の社殿修築を決議する。

同年9月15日工事に着手し、同月30日工事完了する。

10月3日遷座祭執行し、10月4日慶賀祭執行する。棟梁は、「二上久雄」、大工は「加道徳三」外2名

昭和40年(1965年)8月には、愛宕社鎮座100年祭を記念に「記念石碑建納」する。

昭和47年(1972年)9月には、右大臣・左大臣を新調し放生津八幡宮よりお迎え納める。

平成26年(2014年)9月には、鎮座150年祭に合わせて、愛宕社社殿・屋根など修理する。

9月28日遷座祭を挙げる。(公民館より)

(5) 法土寺町愛宕神社由緒並古老伝説

愛宕神社は、「迦具土神を祭祀(さいし)し、その勧請は、町内年老家「四柳氏」が天正年間(1573年～1591年)に上京し、山城国愛宕郡愛宕神社に参拝し、神霊を拜載(はいたい)して帰国する。

その後、吾廷内に安鎮するが、神威を恐れ「一宮気多神社内」に建築し尊敬する。しかし、弘化2年(1845年)放生津町大火が発生し、それがきっかけとなり、愛宕社社殿建設となったと下記の「愛宕社御由緒書」に記してあります。

1866年(慶応2年)10月に町内総代「室屋久助外3名」の発起により、各町有識者より寄付を募り、翌年11月中旬造営落成する。(木札日 11月12日)同月23日に遷宮の式を挙げる。

その遷宮導師は、「一宮の慶高密寺 権律師法印 法海(ほうかい) 白蕭(はくしょう)によって行われる。

天正元年(1573年)に京都から勧請して、慶応弘化2年(1867年)に建設したしたとすると、約272年間「伏木一宮気多神社内」慶高密寺に仮安置されていたこととなります。

愛宕神社由緒覚え書き(原本)



古老伝説

愛宕神社は、「軻遇突智の神」を祭祀し、その勧請請は「法土寺町年老:四柳氏」が、天正年間(1573年(天正元年)～ 1592年(天正20年))に上京し、山城国愛宕郡愛宕神社に参拝し、神霊を拝戴して帰国した。

吾が邸内に安鎮したが、神威を恐れ「伏木一宮:気多神社堺」に建築尊敬した。

しかし、1846年(弘化2年)に法土寺町に大火災が発生し、放生津町が全焼した。

その後、その原因は「遠い一宮に、愛宕神を放置してある」からとして恐れた。そこで、法土寺の火元に愛宕神社を建設して、「火の神」を祀るとしたのである。

1866年(慶応2年)10月に法土寺町総代「室屋久助 外3名」が発起し、各町有志の者から寄付を募り、11月中旬御造営落成し同月23日「御遷宮の式」挙行する。

春季祭は、正月24日・秋期祭は、8月24日に執行と定める。その後、年々歳々寄付があり、財産豊帳を調制するほどであった。3代目 室屋久助は、(桜井清介の父なり)1年数ヶ月の間大変苦心をしたので、盛大な式典を挙行し、記念として正殿内に御神鏡を奉納する。

(6) 150年の時代の流れと信仰

愛宕社創建後時代の変遷に崩壊することなく、先人の手によって守られて来ました

「愛宕社」は、これからも恒久的に伝えて行かなければなりません。

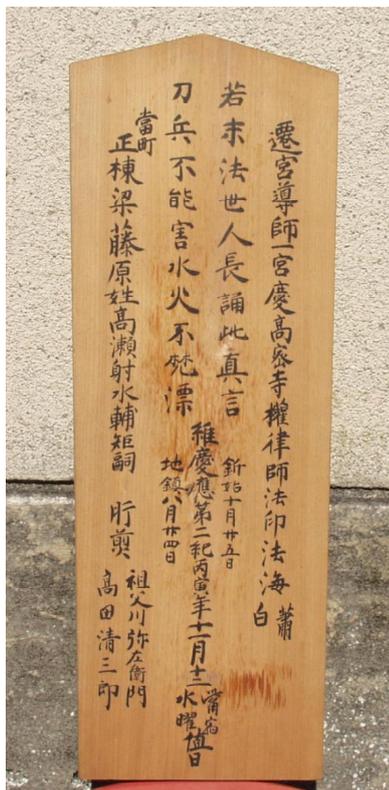
しかしながら、愛宕社に係る歴史的な意味合いも語り伝える義務があります。

今回、愛宕社に関するほんの一部ではありますが、歴史の記録として保存したいと思っております。

迦具土神(かぐつちのかみ)は、「古事記」では火之夜藝速男神(ひのやぎはやをのかみ)・火之炫毘古神(ひのかがびこのかみ)・火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ;迦具土命)と表記され、「日本書紀」では、軻遇突智(かぐつち)・火産靈(ほむすび)と出てきます。

迦具土神の迦具(かぐ)は現代語で「輝く」を表す。又「(においを)かぐ」、「かぐわしい」という意味にもつながります。土(つち)は「つ」と「ち」に分けられ、「つ」は「日本の神話」などの表現として用いられる「の」の古語であり、「ち」は神などの超自然的なものを表す言葉であります。

愛宕社棟札裏



つまり迦具土神は、「輝く(火の)神」、「ものが燃えるにおいする(火の)神」という意味であります。

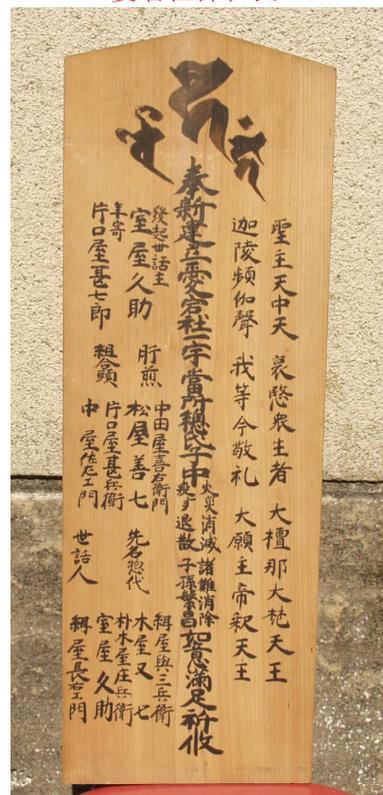
神仏習合(しんぶつしゅうごう)は、日本にもともとある神の信仰(神道[しんとう])と仏教の信仰が1つになった宗教の考えを言います。

奈良時代には始まっていました。天満宮(神道)の土地に寺(仏教)があったのもその1例です。

「神仏混淆」(こんこう)とも言い、日本宗教史上、神道と仏教との交渉・関係を示す語です。

神は神化して仏になり、仏の本地は神であり、神と仏は一体であるとの思想でありました。

愛宕社棟札表



(7) 愛宕神社由緒覚え書きと神仏分離

神仏分離(しんぶつぶんり)は、神仏習合の慣習を禁止し、神道と仏教、神と仏、神社と寺院とをはっきり区別させることであります。

その動きは早くは中世から見られますが、一般には江戸時代中期後期以後の儒教や国学や復古神道に伴うものを指し、狭義には明治新政府により出された神仏分離令(正式には神仏判然令)があります。

慶応4年3月13日(1868年4月5日)から明治元年10月18日(1868年12月1日)までに出された太政官布告、神祇官事務局達、太政官達など一連の通達の総称)に基づき全国的に、公的に行われたものを指します。

「愛宕神社由緒覚え書き」は、こうした背景から、作成されたものであります。
江戸幕府崩壊に伴い「宗教界」にも変化が起こります。

棟札に出てくる「一宮の慶高密寺 権律師法印 法海(ほうかい) 白蕭(はくしょう)」の記述は、仏教の名であり、由緒書きの富山県への公文書提出は、「神仏習合」から「神仏分離」の国策によるものであったのです。

1866年(慶応2年)10月に造営されて以来、今回の修復工事までの150年間、この棟札は、表に出ることなく、唯々「古老伝説」のみ言い伝えられ真実ではありませんでした。ここに「この伝説」真実であることが証明されたのです。

(8) 火伏せ・防火の神社としての役割

私たちの先人達は、「火」を真の災害として恐れ、大切に日常生活と共に「信仰」に導いたと思われます。

神の助けを借りなければ、災害としての力を抑えることが出来ないと考えたのか！

私はそうではなく、神の力を「愛宕社」を創建し祀ることで 法土寺町民の意識を高めることが目的のように思えてなりません。火迺要慎(ひのようじん)の心情を勧請した先人の思いをしっかり受け止めながら、真の「火の用心」に努めねばなりません。

愛宕社御神体



20. 曳山巡行・祭り事業への提言(今後の課題)

2021年(令和3年)3月11日に、「放生津八幡宮祭の曳山・築山行事」が「国の重要無形民俗文化財」に指定されました。とても素晴らしく、ここまでの御努力に対し、関係各位に衷心より感謝と敬意を評します。全国的に「祭り環境」は、これまでとは異なり大変厳しい状況にあることは御周知のとおりであります。

これまでに、観光資源として、記念行事やイベント・映画撮影の脇役として数々の場所で活躍してきました。確かに、少子高齢化の中、これまで以上の「保存活用」に向けた取り組みが推進されています。

- (1)2010年(平成22年)には、「射水市曳山協議会」を設立し、情報交換・曳山文化向上に寄与する。
- (2)2014年(平成26年)には、「富山県山(車)・鉦・屋台・行灯祭交流会議」参加。
- (3)2004年(平成16年)～2008年(平成20年)には、曳山実測図作成を行う。
- (4)2009年(平成21年)～2010年(平成22年)には、「放生津八幡宮・築山行事・曳山行事調査報告書」を作成。

このように、保存・活用にに向けた取り組みは、これからも着実に進んでいくことでしょう。

しかし、これまで「観光資源」としての「地域ブランディング」の観点から見ても、「ポスター配布・カレンダーの作成・HP発信」がなされています。

折角の文化遺産を最大限に発信する必要性を強く感じます。そして「地域ブランディング」を成功させるためには、魅力ある観光資源の掘り起こしが必須です。そこで地域の魅力をより輝かせるには、「曳山がどれだけ重いのか体験するコーナーの設置・1300年継続されている「放生会」などの「神事体験・歴史説明会の開催・海王丸・大友家持・松尾芭蕉などの海の接点事業」としての「ふり返る未来」としての「総合観光事業」として考えていくべきではないか。

現実的は、曳山巡行には、多額の費用が必要となり、各山町の大小に関わらず負担金・補助金も同額であり、現在は、世帯数少ない山町では、高齢者の年金で運行されていると思います。

各山町での「1世帯あたりの負担額には大きな格差があり、「曳山格納庫建設」という大きな償還金を抱えてることも見逃せません。

行政・保存会・協議会が素晴らしい活動をしたとしても、曳山の維持管理は山町であること忘れてはなりません。法土寺町の高齢化率約60%を超えようかという中で、普段の自治会活動だけをを考えても不安があります。ましてや、曳山の運営となると「町外ボランティア活動」が8割と、今や自町だけでは運行することはできません。

曳山囃子の保存・育成についても、法土寺町は、このままでは後継者が育たない 状況から、30年前より「育成費を自治会より補助し、「町内外問わず・年令問わず・男女問わず」の3原則を基本に育成しております。

各山町それぞれの手法でなされていますが、今後の対応が難しく感じられます。

「地域資源としての活用」も考えると、「行政との接点」が難しい状況にあります。

これからの「曳山保存活用計画」に期待したいところです。是非、現場の意見・情報・収集をするべきであります。

「地域ブランディング」では、その地域の違いを明確化し、地域の中心的事業を地域が一体となり打ち出すことでその地域ならではの強みを醸成し、地域ブランドとして発信する取り組みです。

「地域ブランドの形成」にはブランド形成からブランド発信、そしてブランド浸透まで一朝一夕には成らず、物理的に多くの時間を必要とします。

全国各地で地域活性化を目的としたイベントが多数開催されていますが、一過性のイベントは瞬発的な観光客誘致はできても、地域ブランドの形成には至りません。

地域ブランディングにおいて大切なのは、その地域ならではの違いを見つけ、定め、デザインすること。そして、デザインされた地域ブランドを継続して発信し続けることに他なりません。イベントは地域ブランドを発信する機会として企画し、恒例化することで地域に根付かせ、認知拡大を図ることが大切です。

関係者各位の今後の奮闘を期待したい。

21. 編集後記

嘉和羅恵比寿(かわらえびす)を初めとする「曳山囃子」の名前が、どんな意味があるのかな！という素朴な疑問から始まった今回の文書作成は、とても感動的で学ぶこと多き時間でありましたし、曳山の魅力を改めて感じる時間となりました。

しかし、「何故こんな名をつけたのか」分からないことばかりでした。

放生津の永い歴史の一端を垣間見て、先人の思いは、正に「ふり返る未来」であることが強く感じる事が出来ました。「奈呉の浦」から「放生津」へと時代が流れ、「殺生禁断の地」から「曳山」へと「生き物を放す海辺、水辺」への「感謝」の精神は、今も受け継いでいるのでしょう。

また、この地は、大友家持が越中国守として赴任し、「宇佐八幡宮」より「八幡神を遷宮」したのは、738年(天平10年)としたとしても、初めて曳山を出した、古新町曳山創設は、1676年(慶安3年:柴屋文書)との年代差は938年ということになります。放生津の歴史だけでも1284年、曳山歴史346年の時間、私達の先人は、しっかりと守ってきたのです。

「築山行事」は、八幡神の行事であり、その中へ曳山巡行が組み込まれたと考えます。

「築山」も「曳山」も神を祀る事に変わりはありませんが、歴史的背景・流れはしっかり把握しておくべきでしょう。

勿論、「放生津八幡宮祭曳山行事・築山行事総合調査報告書」との出会いもあり、大変参考になり勉強にもなりました。改めて執筆された各位に感謝申し上げます。

私の身体が現在「要介護3」で歩くことが出来ない環境での入力でした。指先もままならぬ動きで、調査活動も制限されながらの作成となり、間違った情報や記述が多々あると思います。

どうか御容赦ください。

少しでも地域発展の一助になればの思いからの作成です。まず、地域の皆さんに「先人の思いを伝え、理解しなければ」全国や世界の人々の心には響きません。

最後になりますが、2019年(令和元年9月)に「法土寺町曳山格納庫」が完成いたしました。数多くの皆様より多額の御寄付を賜り、改めて衷心より厚く感謝申し上げます。今後はこの格納庫を生かし、保存継承に努める所存です。来町の際は是非一声かけてください。

まずは、地域の中で、お互いに「大いに語り合い・祭り情報発信」し、盛り上げていきましょう。

皆様の御活躍を祈念申し上げます。

2022年(令和4年)10月1日 桧物和広

参考文献.....

1. 日本歴史地名大系(平凡社)
2. 放生津八幡宮社殿再建150年記念小誌／新湊博物館資料
3. 射水市資料「放生津八幡宮祭曳山行事・築山行事総合調査報告書」:射水市教育委員会
4. 「見る新湊近代百年小史」新湊市役所
5. 「新湊市史」新湊市史編さん委員会
6. 「放生津城を掘る」:久々忠義
7. 「コトバンク」(NET:PC)
8. リー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』
9. 日本国語大辞典精選版 日本国語大辞典について
10. ブリタニカ国際大百科事典
11. 「新湊の曳山」:新湊市教育委員会
12. 株式会社イノーパhp
13. 富山観光ナビ
14. 高岡観光協会/高岡御車山保存会／伝統工芸高岡漆器協同組合／高岡伝統産業青年会
15. 公益財団法人 祇園祭山鉦連合会
16. 日本大百科全書(ニッポニカ)
17. 「株式会社 俄 製作課」
18. よしだ造佛所
19. 日本工芸堂
20. ふちゅう曲水の宴実行委員会
21. 京都観光協会

嘉和羅惠比壽(かわらえびす)

《曳山囃子：本囃子第1番》

2022年(令和4年)10月01日 発行

企画・協力／法土寺町曳山委員会・法土寺町自治会
<https://www.houdoujimachi-imizu.jp/>

編集・作成／桧物和広 Kazuhiro Himono
email: himokazu@nifty.com

〒934-0013 富山県射水市立町 12-5 / TEL0766-84-8150

「献本」

関係各位

拝啓 晩秋の候、日に日に木々が色づき、朝晩の空気も凜としてまいりました。各位には、益々の御健勝衷心よりお慶び申し上げます。

日頃は、法土寺町に対し格別の御配慮を賜り感謝申し上げます

このたび「嘉和羅恵比寿(かわらえびす)《曳山囃子:本囃子第1番》」という本を上梓いたしましたので、献呈いたします。

長年「曳山」という「放生津八幡宮秋季例大祭曳山巡行」に携わり、これまで多くの事柄を知ることが出来ました。私達は、先人の思いを少しでも理解し、多くの皆さんに知ってもらい、後世に繋いでいかなばなりません。その一助になればと、分からぬままに作成致しました。

ご一読いただければ幸いです。

今後、「法土寺町自治会・放生津地域振興会HP」にて、公開の準備を進めております。これからも、御指導賜りますようお願い申し上げます。

また、今後、地域伝承「振り返る未来シリーズ」として、挑戦していきますので、その際にはまた献呈いたしますのでご笑納ください

人生の 角(かど)曲がり切れ 我が身体 麻痺と闘う 弥栄(イヤアサー)の祭

嘉和羅恵比寿(かわらえびす)

《曳山囃子：本囃子第1番》

2022年(令和4年)10月01日 発行

企画・協力／法土寺町曳山委員会・法土寺町自治会
<https://www.houdoujimachi-imizu.jp/>

編集・作成／桧物和広 Kazuhiro Himono
email: himokazu@nifty.com

〒934-0013 富山県射水市立町 12-5 / TEL0766-84-8150